令和元年度

史跡古津八幡山　弥生の丘展示館
企画展関連講演会

記録集

2020

新潟市文化財センター

講演風景（第１回）

講演風景（第１回）

講演風景（第２回）

講演風景（第２回）

企画展１　展示風景

企画展１　展示解説風景

企画展２　展示風景

企画展２　展示解説風景－１

企画展２　展示解説風景－２

企画展３　展示風景

企画展３　展示解説風景－１

企画展３　展示解説風景－２

第１回フォトコンテスト　審査風景

第１回フォトコンテスト　展示－１

第１回フォトコンテスト　展示－２

第２回フォトコンテスト　展示－１

第２回フォトコンテスト　展示－２

第３回フォトコンテスト　審査風景

第３回フォトコンテスト　展示－１

第３回フォトコンテスト　展示－２

■企画展２関連講演会（第１回）

北陸における弥生時代後期から古墳時代前期の大型建物とその背景
－ 新潟県を中心に －

滝沢　規朗（新潟県教育庁文化行政課）

はじめに

皆さん、こんにちは。ただいま、ご紹介をいただきました滝沢と申します。よろしくお願いします。今日は新潟市さんから企画展の関連講演会、北陸における弥生時代から古墳時代の大型竪穴住居・掘立柱建物とその背景という題名で話をしろと言われたのですが、なかなか難しい問題です。その背景について、私からズバッと言うことは難しいです。私は新潟県で生活しているので、北陸と言いつつも、新潟県を中心にお話をさせていただきます。この時代の建物にどういったものがあり、大きさがどれぐらいで、どのような建物の構成かという、基礎的な話をさせていただいてから、最後に少し考えていることが付け加わればなと思っております。長丁場でありますが、よろしくお願いします。座ってお話をさせていただきます。

本日のお話の構成です(スライド２)。縄文時代から弥生時代へという、簡単に導入部分のお話をさせていただいたあと、弥生時代後期に古津八幡山遺跡の重要性についてお話をさせていただき、弥生時代後期から古墳時代前期の大型建物がどういうような状況になっているのかという背景を、パワーポイントを主に使ってお話をさせていただきます。

１．縄文時代から弥生時代へ

最初に、縄文時代から弥生時代でどんな変化があったのかを簡単に触れます(スライド３)。これは高校の教科書でよく出ているものですが、水田がつくられるようになります。縄文時代は主に木の実ですとか、魚をとったり、動物をとったりというのが主体だったのが、弥生時代に入り稲作が導入されると、比較的安定的に食料が確保できるようになりました。実際はちょっと違うのかもしれませんが、そういうことが言われています。②として金属器。今まで一番硬い道具は石器だったのですが、鉄や青銅器が導入されたということになります。③戦いの村。水田稲作、安定的な食料が確保できるようになると、それをめぐって水利等々で、周辺地域との小競り合いから始まって、さらに収奪が繰り返され、小さい国々が全国的に広がり、それが権力を求めて戦いが行われたという考えです。④以降は、教科書にあまり出てこないものですが、ガラス製品が出てきます。また、縄文時代は地べたを掘りくぼめてお墓をつくるのですが、弥生時代になると方形周溝墓というお墓がつくられます。周りに溝を掘って、その掘った土を一度盛り上げて、盛り上げた地からお墓の穴を掘るものです。あと製品として、鳥形の製品や、弥生の記号などが弥生時代になると入ってくると言われています。

これらは、弥生時代になって一斉にバーッと全国的に広がったというよりは、かなりモザイク状に広がります。例えば東日本ですと、弥生時代前期から全ての地域で稲作が導入されたようではないようです。弥生時代の中期の終わりごろに導入されます。

また、金属器もそういうことが言えると思います。弥生時代の初頭ではなくて、中期の後半ぐらいに東日本に広がってくると思います。ここに書いてある項目は、モザイク状に地域的、時期的に広がっていくと考えています。

画像（スライド４）を使って、補足させていただくと、大陸から渡来系の弥生人が来て、文化が変わっていったと言われております。見つかった人骨から、顔を復元していきますと、少し彫りの浅いのが渡来系の弥生人で、縄文人は比較的彫りが深くて、骨格がしっかりしていたと言われています。

稲作の導入ですが、上の画面（スライド５上）には稲作風景が出ています。台地を耕して収穫をしていくということが、大きな違いかと思います。縄文時代の木の実は、比較的安定した収穫量が誇れるかというと、そういうことでもありません。先ほどご紹介いただいたように、私が旧朝日村の奥三面という所で縄文時代の遺跡を掘っているときに、トチの実やクルミ、栗を山の中に入って、３年ほど収穫実験をしたことがありました。意外と年によって収穫がマチマチで、採れる年、採れない年というのが結構はっきりしていました。採れるときにしっかり

採って、それを長期的に保存するような加工をしていました。収穫量が少ない年は、前年に採った木の実を食べ、ほかの食料で補っていたと考えられます。

弥生時代の稲作でも、収穫量は比較的安定はしているとは言いつつ、品種改良等はまだまだ進んでおりませんので、冷害等もあり、そんなに安定したものではなかったと思います。弥生時代の前期には、東北まで水田稲作が広がっていきます。これ（スライド５下）は青森県で見つかっている田んぼですが、その後に中期・後期と、東北でしっかりとした水田が経営されたのかと言うと、そういうことでもないようです。特に東北は安定した水田の経営がなされず、そのボーダーが、恐らく新潟県のこの辺りかと思っています。阿賀野川から北に行きますと、少し違った文化が広がっています。阿賀野川から南の地域は、比較的水田の導入後は安定した経営がなされていったと考えています。

次に金属器ですが、これは（スライド６左）よく見る銅鐸と鏡です。弥生時代に導入されたと言われていますが、残念ながら新潟県に、この銅鐸は見つかっていません。一番それに近いものが、粘土をこねてつくった銅鐸型土製品です。これは上越市の吹上遺跡から見つかっています。なかなか新潟県は銅鐸が出ないので、研究も進みませんが、西日本の方に吹上遺跡の銅鐸型土製品を鑑定していただいた限りですと、土製品ではありますが、しっかりと銅鐸の模様の構成を知っていないと作れないものという評価をいただきました。吹上遺跡の人たちは、銅鐸を見られるような状態の文化程度というふうに考えています。残念ながら、今のところまだ新潟県で見つかってないので、これからどこかで見つかることを祈りつつ、出てきた場合は備えていきたいと思います。

鉄ですが（スライド６右上）、写真のものは錆びていて、見栄えしません。ですが、これは非常に重要なもので、今まで石でつくっていたものが大きく変わります。古津八幡山遺跡のガイダンス施設に行くと、その映像を見ることができます。木を切るにしても、石の斧と鉄の斧だと、もう作業時間が全然違います。鉄のほうがはるかに速いですよね。新潟市さんの実験の結果を聞く限り、石の斧ですと、木を切るというよりは、削ぐような感じの作業になります。しかし、鉄ですと時間が半分ぐらいになるようです。かつきちんと切れるということで、かなり作業効率が違うと思います。非常に重要なものとご認識ください。

あと、鏡（スライド６右下）ですが、弥生時代になると青銅製の鏡が入ってきます。残念ながら新潟県では、弥生時代と言えるものは、今のところちょっとはっきりしません。弥生時代から古墳時代の境目ぐらいには、こういったものが新潟県の中にも入ってきていると思います。

次に、戦いの村にはいります。古津八幡山遺跡でもそうですが、集落の周りを濠で囲う村があります（スライド７左上）。この濠も２ｍ以上あるような非常に深いもので、幅も非常に広いものです。一度落ちてしまうと、なかなかはい上がることができないような濠です。これで村の周りを囲うというものが全国的に出てきて、日本海側ですと、新潟県がその最北の分布地になります。戦いが実際にあったのかどうかというのは、これは諸説あってですね、今も学会の中で侃々諤々です。西日本ですと、骨がお墓から出てきたことで、有名な佐賀県の吉野ヶ里遺跡では、首がない遺体が埋葬されているとか（スライド７左下）、あとこれは福岡県の遺跡で、今度は逆に頭だけが埋葬されたものがあります（スライド７右下）。こういうのを殺傷人骨といいますが、残念ながら東日本には、ほとんど確認されていません。しかし、西日本の例からすると、かなりの戦いがあったのだろうと思います。

次にガラスですが、青く、非常にきれいなガラスが弥生時代になると出てきます（スライド８左上）。原料は日本産じゃありませんで、すべて外国産になります。非常にきれいで、古津八幡山遺跡でもいくつか出ています。青く輝く、極めて重要な製品と思います。

次の方形周溝墓は、先ほどお話ししたものです。周りを四角形になるように溝を掘りまして、掘った土を盛り上げます（スライド８右上）。盛り上げて墳丘をつくって、そのあと墓坑を掘るというつくりになります。縄文時代には基本的にはなく、弥生時代固有のものと言われています。これが古津八幡山遺跡でも見つかっています。それ以外に鳥形、これも農耕にかかわるものですが、土製品や木製品が、弥生時代になると出てきます（スライド８左下）。縄文時代にはないものです。

あと、弥生時代の記号として、グルグル巻きにこう描いてあるものや（スライド９上左）、線の記号があります（スライド９上中）。上越市の吹上遺跡でも出ていますが、線状の記号状のものが描かれていま

す(スライド９上右)。こういったものが弥生時代になると出てきます。卜骨という骨を焼いて（スライド９下左)、いろんなものを占うというような風習も出てきます。これは鏃ですが（スライド９下右)、磨いて仕上げる磨製石鏃というのが弥生時代に出てきます。こういったものが、縄文と弥生を区分する、弥生文化の特徴というふうに言われているものになります。

こういうのが教科書とか概説書に出てきますが、１つ番外編で、犬についても、縄文時代と弥生時代はかなり様子が違うということをお話しさせてください（スライド10)。これ、うちの犬ですが、６月の下旬に亡くなりまして、非常に今寂しい思いをしています。犬が亡くなったのをきっかけに、縄文時代と弥生時代でどんな違いがあるのか概説書で調べてみました。縄文時代ですと、全身の骨がそろって見つかるものが非常に多いです。骨が見つかる、見つからないというのは、その遺跡の特徴、土壌の特徴もあります。全国すべての集落で犬を飼っていたかどうかはわかりませんが､150体以上埋葬されたような状態で見つかっています。全身の骨がそろって見つかるものが多いというのが､縄文時代の特徴です。

一方、弥生時代では、散乱して出てくるものが非常に多いです。弥生時代の遺跡から見つかった犬の個体が､230ぐらいあるらしいのですが､全身が残っているのはわずかに15個体しかありません。この15個体は、恐らく埋葬に近いような形で、見つかっているようですが、大体のものが解体されて見つかっています。中には、骨に刃物で傷つけたような跡もあるということから、食用資源や、犬の毛皮を素材に使用するという指摘がされています。ですので、縄文時代は、主に狩りのお供として非常に大事にされて、死んだあとも手厚く葬られていたものが、稲作の導入とともに大陸から伝わった文化の中では、犬の扱いがガラッと変わってしまいました。愛犬家からすると残酷ですが、弥生時代は犬を食用にするような文化だったと言えると思います。縄文時代と弥生時代は連続する時代でありながら、いろんなものが違っていると思います。

２．弥生時代後期に出現した古津八幡山遺跡の重要性

弥生時代になって、いろいろなものが日本全国の中で変わっていく中で、弥生時代の終わりぐらいになると、あの場所に突如、非常に大きい古津八幡山遺跡が出現します(スライド11)。ここにも書いてありますように、恐らく日本海側最北端にある弥生文化の要素がそろう遺跡というふうに考えています。古津八幡山遺跡は県内では非常に大きい、有数の規模を誇る大規模な集落であります。また、弥生時代後期に始まった集落が、終わる時期は押さえられませんが、古墳時代の前期と言われているころには、一度人があそこからいなくなっているだろうと思います。そのあともお墓が築かれていって、集落廃絶から約数百年たったあとに、新潟県で一番大きい、古墳時代中期に位置づけられる古墳が築造されています。これは非常に､日本国内の歴史を考える上で、重要な遺跡ということで、国の史跡になりました。新潟市さんが一生懸命労力をかけて調査研究を行い、遺跡を整備してきました。今見に行くと芝生がはってあって、建物が復元されていたり、古墳が復元されていたりして、非常に整備が進んでいます。私は冒頭でご紹介いただいたように、教育庁の文化行政課という所にいて、全国各地の史跡を見て回る機会があります。しかし、弥生時代の終わりから古墳時代の前期､ないしは中期にまたがる遺跡の中で、これほどきちんと調査が行われ、内容が把握され、整備されている遺跡は、あまり東日本の中ではみられません。この遺跡は非常に立派な整備が行われています。東日本では唯一無二ぐらいの調査成果と整備が行われていて、非常に新潟にとっては、重要な史跡になっていることを、地元にいられると感じられないかと思います。あれだけのものはなかなかありません。新潟市の方々は頑張って調査をしておられるので、皆様方におかれましても、いろいろな面でご支援をいただければと思っています。

弥生文化が伝わった日本海側最北の地、またはその１つというふうに申し上げました。新潟県のこの辺りから村上市に向かって見つかっている重要な遺跡を、分布図で落として、それぞれどういったものがどこまで見つかっているのかを示した図であります（スライド12)。まず「戦いの村」ではと言われている環濠集落は、古津八幡山遺跡から60km北の村上市の山元遺跡があります。古津八幡山遺跡は最北の分布地ではありませんが、山元遺跡から北に行きますと、環濠集落はないです。山形県ではまだ見つかっていません。環濠集落ということだけ見れば、古津八幡山遺跡は最北ではありませんが、それ以外の要素で見ていきますと、例えば先ほどご紹介した方形周溝墓、弥生時代特有のお墓は、古津八幡山遺

跡が最北です。山元遺跡では方形周溝墓は見つかっていません。縄文時代以来の地面を掘りくぼめただけの、土坑墓というものしか見つかっていません。山元遺跡で見つかっている金属器とかガラス製品は古津八幡山遺跡でも見つかっていて、さらに奥の旧朝日村の遺跡でも見つかっています。そのため、古津八幡山遺跡が最北ということではありませんが、いろんな要素がそろっているのは古津八幡山遺跡が一番北です。研いで仕上げた磨製石鏃も、弥生文化の特徴の１つだと言いましたが、それも見つかっているのは古津八幡山遺跡が最北です。

そうしたことからすると、阿賀野川が１つのポイントになるかと思います。古津八幡山遺跡では弥生文化と言われているものがある程度そろっていますが、阿賀野川を越えると、欠落するものが出てきます。ただし、まったくここで途切れるというわけではありません。村上市の山元遺跡では、ちょっと様相が違いますが、環濠、金属、ガラスと、弥生文化の一要素が入っているということから、この辺りが、西日本が中心だった時期に、西日本の文化が伝播する、日本海側最北の地だということが言えると思います（スライド12）。

少し時代が違いますが、古津八幡山遺跡が盛行したのが、大体西暦の０年から西暦の200年よりちょっと前ぐらいだと思いますが、そこから400年あとぐらいに、渟足柵とか磐舟柵とかいうのが、この辺りにつくられたと言われています（スライド12）。どこで見つかるかが難しいのですが、１つの可能性として、渟足柵はどうもこの辺り、磐舟柵は村上市の岩船潟の周辺という説もあります。西日本でも畿内が中心だったころにつくられた最前基地、東北の蝦夷という方々を制圧するためにつくられたものがこの辺りにあったと言われています。時代がさかのぼって、弥生時代の後期ぐらいには、西日本の情報が伝わる極めて重要な地域だということが、時代を越えても言えると思っています。

古津八幡山遺跡は、今ほど申し上げましたように、大体西暦０年から西暦の200年のちょっと前までの100数十年間続いた村だと考えています。この頃の新潟県の遺跡では戦いに備えた、古津八幡山遺跡もそうですが、高台に村を構えて、周辺を濠で囲う高地性環濠集落がたくさん見つかります。古津八幡山遺跡が築かれていた最後のほうになると、邪馬台国の女王卑弥呼が出てきて、戦いを治めたと言われています（スライド13）。

ちょっと難しい図ですが、新潟県の弥生時代の後期につくられている環濠集落の存続期間を、少し細かく見たものです。先ほどお話しさせていただいた山元遺跡、これは村上市ですね。その南に古津八幡山遺跡があります。それ以外には大平城遺跡ですとか経塚山遺跡、上越市裏山遺跡などが環濠集落と言われているものです。弥生時代後期は、西暦０年から西暦200年ぐらいまでの期間だと思ってください。その間を、土器で時代を区切ると、３時期に区分ができると考えています。かなり年代幅がありますが、３つに区切った２つ目の段階になると、新潟県では環濠集落が多くなります。いずれも小規模なものですが、古津八幡山遺跡だけは、これらのものと違います。後期を３つに区切った一番最初から環濠集落がつくられまして、最後まで続いており、小規模な環濠集落とは違う存続期間になっているとお考えください（スライド14）。

一方、濠が埋まる時期ですけれども、３段階目の段階になると、濠が埋まって、古墳時代早期とか弥生時代終末期と言われている西暦200年以降になっても、古津八幡山遺跡では人が生活の痕跡を残しています。同じように、この時期に濠が埋まるのが、妙高市斐太遺跡群の矢代山Ｂ地区です（スライド14）。これを見ていただくと、説明が難しいのですが、小規模なものは後期を３つに分けると、２段階目でバーッと広がって、一気に埋まってしまいます。しかし、大規模なものは、始まる時期は少し違いますが、３段階目に埋まっているというふうに見ていただければと思います。戦いに備えた村で濠を掘るということが、社会的な緊張状態とか戦乱を反映しているとすれば、埋まった時期は、社会的な緊張状態とか戦いが終結した時期ではないかと想定できます。ですので、大きいものが３段階に埋まって、小さいものがそれより先に埋まるということは、歴史的な意義があるのではと考えています。

これが、高台に構えた村ですが、一方であまり高くない場所や平地に築かれた環濠集落は、もうちょっと続きます。例えば、国の史跡になっている上越市の釜蓋遺跡です。これは新幹線新駅、上越妙高駅の真ん前にある遺跡ですが、ここでは、古津八幡山遺跡とか斐太遺跡群の矢代山Ｂ地区の濠が埋まったあと、平地に出現した環濠集落です。ちょうど高台から移転したかのような状態になっているものもいくつかあり、１つ１つに社会的な何か事情があって、濠が埋まったのではと考えています（スラ

イド14)。

今ほど言った、戦いに備えた村がなぜ出てきているのかと言いますと、これは正直考古学のほうだけだとわからないことも多いです。しかし、中国の歴史書に当時の日本の様子を記した文献があります。ご存じの方も多いかと思いますが、『後漢書東夷伝』ですとか、『魏志倭人伝』です。これらの文献によりますと、西暦147年から189年の間、倭国は非常に乱れたとあり、俗にいう倭国大乱を女王・卑弥呼が治めたと言われています(スライド15)。考古学の立場からすると、文献にこういう記載があるので、考古学のほうもそうだったということにはなりません。あくまでも遺跡は遺跡で分析を続けて、資料を十分に吟味したあと、こういう記述があるのでそれと合致するのかどうかという検討をしていく立場です。大体これぐらいの時期に、倭国が大いに乱れていたのを卑弥呼が治めたという記載と、古津八幡山遺跡とか大規模な斐太遺跡群の矢代山Ｂ地区は、西暦の200年よりちょっと前の時期に濠が埋まっていることからすると、この文献の記載と大きく違わないというのが、今のところの自分の見解です。もしかすると、古津八幡山遺跡の環濠が埋まったのは、卑弥呼が治めたからもう戦いを行う必要がなくなったことを反映しているとも言えるのではと思っています。

ちょっと広い視点で高地性集落、高台の村をみると、今お話ししている濠で囲う村は、更に防御性が高いと言えると思います。日本海側で一番北が、山元遺跡ですが、弥生時代の中期ないしは後期の初めごろまでは、能登半島までしかなかったものが、新潟県の北部まで伝わってきていることが、この分布から言えるのかなと思っています（スライド16)。

これは全国の環濠集落です。古津八幡山遺跡のガイダンス施設の資料から抜粋したものですが、濠で囲う集落というのはたくさん見つかっています（スライド17)。どちらかと言うと、西日本のものは規模が大きいです。新潟県ですと我らが古津八幡山遺跡ですとか、今ほど申し上げた妙高市の斐太遺跡群は、西日本の最大級のものと比べれば小規模です。しかし、東日本単位で見れば、かなりの規模というふうに見ていただければと思います。こういったものが、全国で分布しており、新潟県まできちんと入ってきています。非常に重要な地域だろうというふうに認識してください。

今度は、古墳時代と弥生時代の比較になりますが、これは弥生時代後期の集落遺跡の立地を示したものです(スライド17右上)。周辺との標高差を測っていきまして、少ないほうから点で落としていきます。これは周辺との標高差がない集落です。右に行けば行くほど、周辺との標高差が大きいというふうに見ていただければと思います。弥生時代後期ですと、一番周辺との標高差がある所が、大体80m超えます。30mぐらいで、多さが違っているので、ここで私は線を引き、30m以上あるものを高台の村とします。弥生時代の後期は非常に多いのですが、古墳時代前期になると周辺との標高差が30m以上の村はなくなります(スライド17右下)。周辺と標高差がないものばっかりになります。これから言えるのは、弥生時代後期は、比較的高台にたくさん村を構えていますが、古墳時代になると高台から下に降りてきて、平地に村を構えるという違いがあると思ってください。これからも、やはり弥生時代後期は高台に造る、戦いに備えた村が非常に多かったと言えると思います。

新潟県の戦いに備えた村を、分布に示したものですが、一番北が村上。古津八幡山遺跡がある新津丘陵の辺りから長岡に向かう丘陵上に、非常にたくさん見つかっています(スライド18左)。上越のほうでも見つかっていますが、この分布と当時使われていた土器の分布を示したのが、この図です（スライド18右)。新潟県の弥生時代後期は、全域で同じような土器が使われていたわけではありません。阿賀野川から南の海岸平野部では、北陸系の土器で、石川県の能登とか富山県と同じような様子の土器を使っています。阿賀野川以北からずっと魚沼地域にかけては、弥生土器ですが縄目の模様、縄文の模様が施された土器が使われていて、信濃川の上流のほうに行きますと長野と同じような土器を使っています。それぞれの地域の在地、地元の土器というふうに見てください。弥生時代後期に限っては、新潟県は１つのまとまりにはなっていませんで、大きく３つの文化圏に分かれています。そのちょうど境界付近に、たくさん高地性集落ですとか環濠集落があります。戦いに備えたような村があるというふうにご認識をいただければと思います。

これは新潟県の話ですが、少し広い視点で北陸全体を見渡すと、北陸でも東部と言われている石川県の能登半島から新潟県を広く見たときに、古津八幡山遺跡ですとか、先ほど分布図で見ていただいた、妙高市の斐太遺跡ぐらい大きい高地性環濠集落が築

かれているのは、富山県はどうもありませんで、石川県の能登に大海西山遺跡があります（スライド18）。昔の国で言いますと能登と加賀の境にあたります。この境に大きい高地性環濠集落が築かれています。古津八幡山遺跡も、恐らく東北と北陸の境界になっていて、斐太遺跡は北陸と信濃の境界に位置し、そういう国境に非常に大きい高地性環濠集落が築かれています。弥生時代後期を３つに分けると、３段階目の段階で濠が埋まっているため、卑弥呼が戦乱を治めたことを象徴しているのではと申し上げましたが、北陸の視点で見ても言えるのかなと思っています。

これが新潟の地図で、半径100kmでくくってみたものです（スライド19）。古津八幡山遺跡は半径100kmでくくると、会津までは入りますが、上越まではいかない。上越地域の妙高市斐太遺跡を中心として半径100kmで円を描くと、能登までは行きませんが長野県は優に入る文化圏になっています。ここに国境があったと思いますが、古津八幡山遺跡と斐太遺跡群というのは、同じ新潟県でありながら100km以上離れて、かなり距離感がある。さらにこの辺が大海西山という、能登と加賀の国境付近のものですが、大体100kmから120kmぐらいの単位で、大規模な高地性環濠集落が築かれていたと思っています。こういう背景もあり、古津八幡山遺跡が非常に重要だというふうに申し上げています。

これはちょっと余談ですが、上越の越後平野、この辺だと、かなり水はけが違うということだけ、お話しさせてください。海からずっと山手に向かってどれぐらい標高が上がるかですが、上越のほうですと、内陸のほうに20km行かない間に、もう標高が60mも上がります。ですが、越後平野のほうですと、60kmぐらい行っても、まだ標高って20mぐらいしか上がりません。山から水が流れてきても、頚城は比較的水が海に抜けていきますが、標高差がないので、越後平野は、なかなか日本海に水が抜けず、砂丘が発達して、潟湖がたくさんできる地域です。水はけが非常に悪いので、弥生時代の後期、古墳時代の前期も、それほど生産力は上がらなかったんだろうと思います（スライド20）。今でこそ日本一の米どころとなっていますが、こういうような状態だったので、生産力が上がらなかったため、越後平野の中では古津八幡山遺跡以上の集落が見つかっていないというふうに見ていただければと思います。

これは私の地元、紫雲寺を流れている加治川の河口付近ですが、おわかりになりますでしょうか（スライド21）。砂がだいぶ迫ってきていて、何もしないと河口をふさぐようなことにもなりかねません。このため、ここに大きい重機が来て、この砂を取って、水はけを少しよくすることも、越後平野の風景の中にはあります。水はけがあまりよくない所だとご認識をいただければと思います。小さいころよく言われたのが、江戸時代に自分の生まれ育った紫雲寺町には、紫雲寺潟というのがあり、長野から竹前権兵衛・小八郎という人たちが来て、紫雲寺潟を開拓したので、農業生産力が上がったと教わったのが思い出されます。江戸時代になるまで、あまりこの辺は農業生産力が高くなかったとご認識をいただければと思います。それと、弥生時代の大規模集落の存在、数量は比例していると考えています。

次に、弥生時代後期から古墳時代前期の大型建物について話を移していきたいと思います。

３．弥生時代後期～古墳時代前期の大型建物

いよいよ本題で、弥生時代後期から古墳時代前期の大型建物についてお話を進めていきたいと思います。建物ですが、この時期はいろいろなものがあります。区分をする際に、どこをみるかですが、私は建物の床で区分をすべきと思っています。地べたを掘りくぼめる竪穴（スライド23上）と、地べたがそのまま床になる、ないしはちょっと整地したと思いますが、平地式（スライド23中）、あとは高床の建物（スライド23下）に区分をすべきだと思います。しかし、実際に遺跡を掘っていると、区分が難しいものがあります。例えば竪穴建物ですが、地べたを掘りくぼめて床をつくったとしても、あとの時代に壁を削るような造成がなされると、竪穴かどうかがわからなくなります。また、高床の建物ですが、柱だけこうポンポンポンポンと見つかる場合、考古学上は掘立柱建物と呼んでいますが、床が実際に高かったのかどうかは、なかなか認定が難しいです。一般的には、柱が非常に太いものは平地ではなく、床が高かったと言われていますが、何cmの柱だったら高床で、何cmの柱だったら平地という区分が、できていない状況にあります。ですので、考古学の呼び方としては、竪穴建物・住居だったり、掘立柱建物という呼び方を、平地式にしたり高床にしているとご認識をいただければと思います。非常に区分が難しいのですが、一般的には竪穴、平地式、ないしは掘立柱建物という区分進んでいます。

新潟県内で見つかっている建物は、運が良いと柱材がわかります。水がグチュグチュしているような湿地を掘ると、柱が実際に残っていて、どういった樹種が使われているのかわかります。おおむねの傾向として、杉が使われているのが、糸魚川周辺と佐渡で、それ以外の地域では竪穴建物はクリで、掘立柱建物はいろんな種別の木材が使われているというのがわかってきています。杉は糸魚川と佐渡で多いのですが、それ以外、上越市から北側に行きますと、特別な建物にしか杉は使われません。数量も非常に限られていて、大きな違いがあるとご認識ください（スライド24）。建物の構成も、先ほどお話をしたように竪穴建物、平地式と掘立柱建物がありますが、その区分については、お配りしたＡ３の資料の表側のほうでご確認をいただければと思います。この時期の集落を掘っていきますと、佐渡は圧倒的に狭い溝の平地式の建物が多くて、続いて掘立が多く、竪穴建物はあまり多くない。糸魚川とか上越とか頚城と言われている地域は、竪穴・平地式建物が多く、この狭い溝の建物も若干あります。しかし、上越市より北では、狭い溝の建物というのはまったくなく、大体が竪穴・平地式・掘立柱建物という組み合わせの違いがあります（スライド25）。

ちょっとかたい話が続いたので余談になりますが、「のっぺ」と言われている新潟の郷土食がありますが、おおむね建物で使われる木材の分布傾向が一致するのかなと思っています。私は下越の旧紫雲寺町出身ですので、のっぺは「のっぺ」とか「小煮物」と呼び、貝柱で出汁をとって、里芋を入れるので、少しとろみがつき、いくらを乗せます。違う方いらっしゃったらご容赦いただきたいのですが（スライド26）。これが、木材に杉を使っている佐渡とか上越のほうに行きますと、いくらは乗せないというのと、とろみを片栗粉でつけるという、どうも違う文化のようです。呼び方も、「のっぺ」というよりも、「おおびら」とか「こくしょう」と呼んでいるようです。正月に「のっぺ」を必ず食べる、食べないというのを、昭和50年代後半に調べた調査がありますが、弥生時代～古墳時代前期の建物で、柱材に杉を使っている地域は、あまり正月料理に「のっぺ」は作らず、杉以外の建物の柱材を使っている地域は、正月にのっぺを食べるというような違いがあるので、おおむね弥生・古墳時代の建物の木材の選択と、現在の食べ物の分布は、一致しているようです。

次に、竪穴建物の大きさなど、いよいよ本題のほうに行きたいと思います。これは、弥生時代後期ですとか、弥生時代終末とか古墳時代前期ですとか中後期といった、３つの時期に分けて、１つ１つ建物の床面積を計測して、小さい順から並べていった図になります。各時期とも、大体床面積が60㎡ぐらいで分布の断絶がありますので、60㎡以上を、大型の中でも特に大型の建物と呼んでみたいと思います。こういうふうにして見ていきますと、古墳時代を前後する時代になると、特別大きい建物が多く出てくることがわかります。弥生時代の後期ぐらいですと、特大型は１つしかありません。あまり大きいものは見つからないと言えるかと思います。古津八幡山遺跡で見つかった大型建物は、これはまた新潟市の調査担当である相田さんに時期を聞かなければいけませんが、恐らく弥生時代の終末頃にあたると思うのですが、面積で言うとこの辺になるんでしょうかね。

相田　9.5×9.5。

滝沢　ああ、80㎡強で、多分この辺になると思います。ですので、新潟県の中で大型の竪穴建物が増えてくる時期に、古津八幡山でも大きい建物が見つかるようになると思います（スライド27）。

次、掘立柱建物の面積ですが、これも同じように、１つ１つ面積を計測して、同じような時期区分で図示しました。これを見ていただきますと、大体30㎡ぐらいで分布の断絶がありますので、ここから上を特別大きい建物というふうに見ていきたいと思います（スライド28）。そうしますと、やはり古墳時代の前後ぐらいには、非常に大きいものが多くつくられるようになると言えます。冒頭、相田さんからお話があった、柏崎市の西岩野遺跡というのは、弥生時代後期にあたります。ですので、弥生時代後期では、西岩野遺跡の掘立柱建物は際立って大きいものだというふうに見てください。これ単純に床面積だけでありまして、先ほどお話した、高床かどうかの判定基準である柱の太さは加味せず、単純に面積だけのものと見ていただければと思います。

今度、これは弥生の丘展示館で配られている資料から抜粋したものです。単純に面積じゃなくて、建物の短軸と長軸で分布を示したものですが、古津八幡山の大型建物、竪穴建物というのはここにランクしてきます。かなり県内では大きいほうです。古津八幡山遺跡よりも大きいのが、上越市の釜蓋遺跡で見つかっているものです（スライド29）。

古津八幡山遺跡で見つかっているのは、これでありまして、新潟県内で見つかっているものでも、大

きいものになります。先ほど言いました、柏崎の西岩野遺跡は、長軸が９ｍ、短軸が4.5ｍで、それに匹敵するぐらいの大きさのものが、古津八幡山遺跡で見つかったと思います（スライド30）。

以上が新潟の状況ですが、同じ北陸でも今度は建物が比較的たくさん見つかっている、石川県の加賀のお話です。現在の金沢市周辺で見つかっている竪穴建物の面積を、時期ごとに、私が示したのよりかなり細かく時期を比定して、どれぐらいの大きさのものがどれぐらいの時期見つかっているのかを示したものです。60㎡以上を特別大きい建物とした場合に、石川県では弥生時代後期が終わって、弥生時代の終末とか古墳時代の早期と言われている時期に、60㎡以上、70㎡近くの竪穴建物が非常に多く見つかっています。古津八幡山遺跡の竪穴建物の規模は、恐らくこの辺だと思います。この時期になると、際立って大きい建物が、北陸の中でボコボコと出てきますが、古墳時代の前期になると、急速に数量が少なくなっています（スライド31）。

次に、こういった大型建物が見つかっている場所ですが、集落の中でもどの場所かが非常に重要になると思います。新潟県の事例で確認をしていきます。古津八幡山遺跡は、行かれた方が多いと思います。国の史跡の範囲になっている中では、これが（スライド32）環濠と言われている濠の中ではなく、国の史跡の追加を目指している範囲から見つかっています。集落の本体部分から少し離れた所を今調査していて、大型の建物が見つかりました。方形周溝墓も見つかっていますが（スライド32上）、これは環濠の外で見つかっているというのが、大きな肝かなと思っています。これが掘立柱建物（スライド32上）で、これが大型竪穴建物（スライド32下）で、いずれも濠で囲われている集落の外側で見つかっています。逆に、環濠の中は大型建物も掘立柱建物も見つかってないということが大きな特徴であります。

これは言いづらいことですが、この掘立柱建物も、本当に弥生時代後期かというのも、非常に重要な点です。この大型の竪穴建物というのは、濠が埋まってからつくられているのかなというぐらいの年代です。ですが、掘立柱建物に関しては、柱がポンポンと出てくるだけで、個々の細かい年代は非常に決めづらいところがあります。竪穴建物に比べると、時期の比定が非常に難しいものですが、これが環濠の中にたくさん建物がつくられている時期に築かれたものなのか、それとも環濠が埋まってから、一段下がった場所につくられているのかというので、歴史的な意義も違ってくるのかなと思っています。大胆に言えば、この辺にたくさん人が住んでいて、環濠が埋まった段階で、どうもこちらに象徴的な大型建物、竪穴建物と掘立柱建物が築かれたという想定もできなくはないと思いながら、現地を見させていただいているところです。

次に、釜蓋遺跡ですけれども、古津八幡山遺跡で環濠が埋まったあとの時期に、新たに平地ないしは低地につくられた環濠集落です。濠が合計３本あります（スライド33）。どうもこの濠は、最初にくくられた範囲はこれで、そのあとこっちのほうにもう一度濠がつくり直されていると想定ができるかと思います。大型の建物、特大型、70㎡以上の建物というのは、３棟見つかっていて、１つがこの場所で、ちょうど最初濠で囲っていたのを、さらにここに濠をつくったあとに（スライド33下）、ここに１棟つくられているということがわかります（スライド33中）。濠ですが、この辺りの濠の内側に、大型建物がつくられているというのが調査でわかってきました。これが一辺11ｍとか12ｍぐらいと思いますが、新潟県の中では際立って大きい、大型の建物が２棟見つかっています。このうち１棟を、上越市さんが調査をしました。連続するように同じ場所に、大型の建物が築かれているということがわかってきています。

次に、柏崎市の西岩野遺跡ですが、大型の掘立柱建物がここにあります（スライド34）。西岩野遺跡は非常に広い遺跡ですが、調査したのはごくわずかです。この部分に、県道をつくるため調査されました。全体像がわからないのですが、ここの部分を掘って、大きい掘立柱建物が見つかりました。ここには、環濠と思われる濠が見つかっています（スライド34右）。ちょっと想像をたくましくすれば、環壕が築かれ、その外側に大型の掘立柱建物が築かれていて、その脇が方形周溝墓がまとまって見つかっているということからすると、墓域がこの辺にあって、何らかの祭祀を行う大型の掘立柱建物だったのかなと思います。いずれにしても、濠の外側に大型掘立柱建物があるということが、西岩野遺跡の特徴になります。

大型建物の配置を見ていくと、古津八幡山遺跡は環濠の外側、西岩野遺跡ももしかすると環濠の外側にあるかもしれません。一方で、上越市の釜蓋遺跡は、環濠の内側に大型の建物、竪穴建物があるという違いがありそうです。この違いが何なのかは、ま

だよくわかりませんが、もしかすると時期的な変遷かもしれません。弥生時代後期から続いている集落だと、濠の外側に大型建物をつくる傾向があったのが、釜蓋遺跡のように、１段階新しい時期になると建物の配置等が変わり、環濠の中に大型の建物がつくられるという想定もできるかと思っています。

今度はもう１つ見ていきます。佐渡市にあります蔵王遺跡です。蔵王遺跡の場合、大型の建物がここです。非常に細長い調査区なので、集落全体の傾向はまだわからないのですが、環濠かと言われるものが、ここら辺にあります（スライド35）。濠の、恐らく中に、こういう大型の建物がつくられているというのと、あとここに大型の掘立柱建物がありますが、これも濠の内側にあると言えるかと思います。時期が非常にわかりづらいのですが、恐らく弥生時代の後期に濠が掘られたのではなく、釜蓋遺跡と同様に、古墳時代早期ないしは弥生時代終末期と呼ばれる時期、古津八幡山遺跡の濠が埋まった時期から集落構成を開始する遺跡かと思っています。そして、濠の内側にこういう大型のものがつくられるようになるという想定をしています。蔵王遺跡の場合、非常に建物の面積を測るのが難しくて、さっき見ていただいた大型建物、これ（スライド36）ですけれども、最低でも７回の建て替えがなされています。柱の組み合わせだけでも７通りあります。柱の重複関係からすると、大型の建物が、同じ場所に７回も築かれていますが、古いものほど大きく、だんだん小さくなっていって、最後役目を終えるということがわかっています。かなり大型のもので、その規模を考えてみますと、これが建物の柱の配置で、それに伴うような溝は全周しません。一部あるのを推定で追いかけていくと、床面積は200㎡近くになり、非常に大きい建物になるかなと思います（スライド36・37右下）。一番大きいと言った竪穴建物が、上越市の釜蓋遺跡で、面積が恐らく120㎡とか130㎡ぐらいの建物になると思いますが、蔵王遺跡はさらにそれを上回る大きい建物がつくられています。時期も恐らく、石川県で大きいものが見つかっている時期、古墳時代早期ですとか弥生時代終末期と言われているころのものだろうと思います。古津八幡山遺跡の大型建物よりちょっと新しい時期ぐらいだと思ってください。この時期に、新潟県内でも大型の建物が集中するということが言えると思います。

こういった大型建物が築かれたあとですけれども、古墳時代の前期になりますと、どうも特別大きい建物は、集落の中では見つからなくなります（スライド36･37右下）。一方で古墳、墳丘を持った大きいお墓というのが、全国的にたくさん見つかってきます。これ全国の状況を示したものです（スライド38）。一番格が高いとされる前方後円墳は、日本海側の最北は旧巻町の菖蒲塚古墳で、ここより北は、今のところはありません。それ以外、円墳と言われているもので、日本海側で一番北は今のところ胎内市の城の山古墳になります（スライド38右下）。ここから北になると、山形県の庄内平野で、古墳じゃないかと言われているものがあります。現地に行って見たのですが、まだ確定されていないようです。そのことからすると、高地性集落とか環濠集落などと同様に、古墳時代前期になっても西日本から伝わる情報が伝播する最北端が、日本海側では新潟県の阿賀野川を挟んだ辺りだったと考えられます。それが、アコーディオンのように範囲を変えていると思います。

４．大型建物の背景

こういった大きい古墳が築かれるようになると、集落の中でも大きい建物、要は首長の居館みたいなものがあってしかるべきですが、今のところそういったような状況にはありません。かえって弥生時代、古墳が築造される前のほうが、大きい建物が見つかっているとご認識ください。これについて、1990年代にいろいろな研究がなされていて、古墳が築かれるころになると、集落遺跡の中で特大型の建物が検出されなくなることから、通常の集落を飛び出して、首長の居館、特別な場所に首長だけが住むような集落構成になるのではと指摘がされていました。それを念頭に置いてずっと調査をしてきたのですが、今そういったようなものは、新潟県内ないし北陸を含めても、見つかっていません。大きい古墳が築かれるころには、むしろ建物全体が縮小していて、大きい規模のものが見つかっていないというのが、新潟県を含め、北陸全体の特徴になります。

新潟県で見つかっているお墓の変遷では、弥生時代後期は一番大きいお墓でも10mぐらいです。これが古墳時代の早期、弥生時代の終末期とも言いますが、あまりお墓は大きくなりません。あいかわらず10mぐらいが一番大きく、首長のお墓と言われています。この時期も大型の建物が見つかりますが、逆に古墳時代の前期、お墓の規模が30m近くなり、阿賀北の城の山古墳が40m程になります。その右側

ずっと行きますと、保内三王山古墳跡で前方後円墳が見つかり38m、その右側、信濃川左岸の山谷古墳が38m、菖蒲塚古墳が54m。そういった時期に、その古墳に被葬されたであろう人の大規模な建物は、見つかっていないというのが現状です。これは、これから見つかるのか、そもそもなくて、大きい建物自体がこの時期につくられなくなるのかというのが、１つ大きな争点になるというのが現状になります。

弥生時代後期ないしは終末期と、古墳時代前期の違いがあるというのを確認して、次、掘立柱建物の変化についても、少しお話をさせていただきます。掘立柱建物は、いろいろ柱の組み合わせで区分ができます。西岩野遺跡みたいに大きく、柱が非常にたくさんあるタイプもあります。あと、棟を持つ柱、亀甲形といって、特別な建物というふうに言われている時期もありました。それ以外に総柱、柱が内側にあるものもあります。いくつかパターンがある中で、弥生時代から古墳時代の後期まで、掘立柱建物がどういった割合で使われているのかを見ていくと、１つ大きな傾向は、総柱と言われている建物は、弥生時代後期にはないということです。その後の古墳時代前期、古津八幡山が集落構成をやめた時期から出てきます。掘立柱建物自体も、弥生時代後期、古墳時代早期ないしは弥生時代終末期よりも、前期になると爆発的に増えてくるということからすると、どうもこの辺りで建物の構成は線が引けると考えています（スライド39）。

こういった違いがありますが、古津八幡山遺跡で見つかっているこの建物、大型の掘立柱建物がいつの時期になるかで、まただいぶ評価も変わってきますが、弥生の丘展示館に行きますと、この冊子があり、復元された掘立柱建物が、想定されています（スライド40左上）。古津八幡山遺跡で見つかった掘立柱建物の柱は、非常に太くて、掘り方も大きい。面積だけじゃなくて、柱穴の掘り方も大きいので、恐らく高床だろうと想定されているのですが、私もそれでいいと思います。棟を持つ柱は、まっすぐじゃなくて、斜で復元されています。これ白山神社にある棟持柱建物と同じようなつくりになっているのですが、さっき佐渡市の蔵王遺跡で、大型の建物が出ていると言いましたが、掘立柱建物でも大型のものが出ておりまして、棟を持つ柱、柱材が実際に残っていました。それを見る限り、斜め方向に配置されているのがわかっています（スライド40右）。ですので、この棟を持つ柱が斜めになっている、また柱の掘り方が非常に大きいというのは、特別な建物で、恐らく神殿とか祭殿と言われているものだろうと思います。こういったものが、弥生時代の後期ですとか古墳時代の初頭ぐらいまでは残ります。しかし、前期、大きい古墳が築かれるようになると、逆にこういったものは少なくなって、同じように棟を持つ柱、独立棟持柱と呼ばれている掘立柱建物でも、柱の掘り方が非常に狭くて、残っていた柱自体も10cmぐらいの、非常に簡略化したものになってきています。ですので、同じような柱配置のものであっても、古津八幡山遺跡で見つかったものが、弥生時代の終わりとか古墳時代の早期だとすると、こういったものがあってもいいのですが、古墳時代の前期になると、棟持柱で、このような祭殿というのは、基本は新潟県の場合ははっきりしなくなるのかなと思います。そういう質的な変換があるというふうに考えています（スライド40右）。

おわりに

最後に古墳時代の集落ですが、どういった村かというのを確認させていただきます。これは村上市の道端遺跡です。同時にあった建物がどれぐらいあったかというのは難しいのですが、50～60年続いた村です（スライド41）。一番大きい建物というのが、周りに溝を掘った平地式の建物で、床面積は特大型までいかないサイズのものです。これが首長、一番ここの村の長の家かなと思っていますが、こういったものと掘立柱建物と竪穴建物の組み合わせが、１つ古墳時代の前期のパターンかと思います。

同じようなことが、三条市の吉津川遺跡でも言えまして、周りを溝で囲う竪穴建物が際立った大きさを持ちます。ただこれは、特大型まではいかないサイズになります（スライド42左）。その周りに、竪穴建物とか、小規模な掘立柱建物が伴います。上越市の津倉田遺跡でも同じように、周辺を溝で囲った平地とか竪穴の建物が首長的なもので、それ以外に竪穴建物ですとか、掘立柱建物が伴います（スライド42右）。近場でいろいろな建物が混在するようなあり方を見せています。これと、弥生時代に築かれた古津八幡山遺跡の建物の配置や構成というのは、少し違うと思っています。再度繰り返しますけど、古津八幡山遺跡の場合は、濠の外側にこういったものがあって、大型の建物が集中する。弥生時代の後期の西岩野遺跡でも、環濠の外側に大型のものが集中す

るというのから、弥生時代の終末とか古墳時代の早期ぐらいと言われている時期になると、そういったものが１カ所にまとまって見つかるような建物構成になっていくということが、調査の結果、言えるのではないかと思います。

このことに対する意義、ここが一番重要と思いますが、こういうことをしっかり言えると、多分大学の先生になれるのかなと思います。私は発掘を専門でやっているため、データをそろえて、ある一定の傾向をお伝えすることはできますが、なかなかそこから先、歴史的な解釈というところまで行くと、ちょっと口ごもってしまいます。ただし、古墳の規模が、お墓の規模が甚だ大きくなる時期に、そういった首長居館的なものが見つからないということからすると、どうも建物の大きさに関する考え方自体が、変わってきているのではないかと思います。むしろ集落の中できちんと、大きいものはつくるにしても、際立った大きさを持たない、建物自体の大きさに固執せずに、むしろ威信財、さっきの鏡とかいろいろなものですね、特別なものを持つほうに労力を使っていくのが、この辺りの集落のあり方ではないかと、今は考えています。一方で、古津八幡山遺跡で見つかった大型の竪穴建物は、恐らく居住のものだろうと思うのです。ですが、掘立柱建物は祭祀的なものだと思っていますが、それに、大型の建物に見合うようなお墓というのが、古津八幡山遺跡の場合はどこにあるのか。今のところまだ、それに見合う時期のものは見つかってないと思います。そういったものの配置なんかも、今後発掘調査を通じて、検討していくべきことなのかなと思っています。

以上、なかなかまとまらない話で恐縮でしたが、新潟県の状況についてお話をさせていただきました。

北陸における弥生時代後期から古墳時代前期の大型建物とその背景

ー新潟県を中心にー

令和元年9月1日

滝沢規朗

スライド1

本日のお話

1　縄文時代から弥生時代へ
2　弥生時代後期に出現した古津八幡山遺跡の重要性
3　弥生時代後期～古墳時代前期の大型建物
4　大型建物の背景

スライド2

1　縄文時代から弥生時代へ

①稲作の導入
②金属器の使用
③戦いの村（環濠集落。高地性集落？）
④ガラス製品
⑤方形周溝墓
⑥鳥形製品、弥生記号、卜骨、磨製石器

スライド3

○縄文人の顔立ち

大陸からの渡来弥生人に比べ、寸詰まりで立体的な顔立ち

スライド4

弥生文化とは

①稲作の導入（大陸から伝来）

スライド5

---

②金属器の使用（青銅器・鉄器）

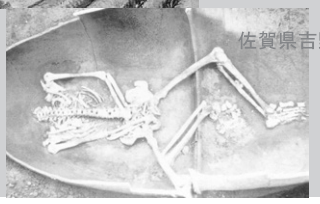
スライド6

---

③戦いの村（小国分立）

環濠集落

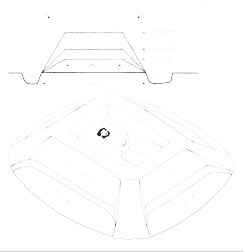
濠



佐賀県吉野ヶ里遺跡

スライド7

ガラス製品



方形周溝墓（固有の発展）

鳥形製品

スライド8

スライド 9

番外編（犬）

○縄文時代
- 全身の骨が揃って見つかるものが多い（埋葬されたものもあり）

○弥生時代
- 散乱骨の比率は縄文時代より多い。（230個体中、全身が残るは15例）
- 解体され、食用資源・素材に使用されたが可能性が高い。

（内山幸子「狩猟犬から食用犬へ」『弥生時代の考古学』5　同成社）

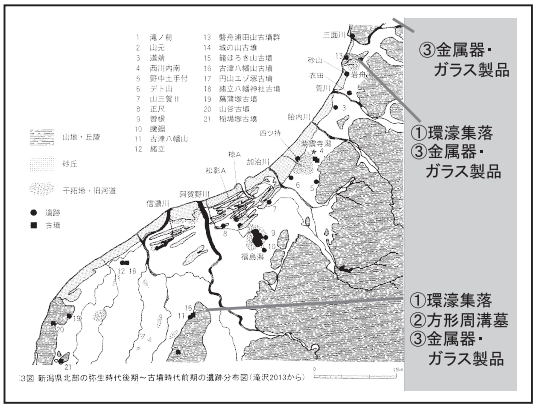
スライド10

2　弥生時代後期に出現した古津八幡山遺跡の重要性

- 弥生文化の要素が揃う日本海側最北の遺跡（又はその一つ）。
- 県内では有数の大規模集落
- 弥生時代の集落が廃絶？した後に、県内最大の古墳が築造される

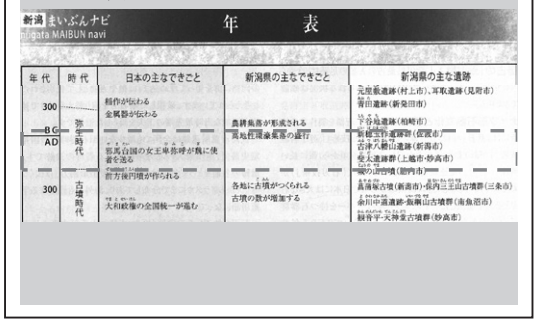
※国史跡に指定後に整備され、ムラの様子が分かる国内でも有数の遺跡

スライド11



スライド12

古津八幡山遺跡築かれた弥生時代後期～古墳時代初頭はどんな時代・時期か



新潟 まいぶんナビ　niigata MAIBUN navi　　年　表

年代	時代	日本の主なできごと	新潟県の主なできごと	新潟県の主な遺跡
300	弥生時代	稲作が伝わる 金属器が伝わる	農耕集落が形成される 高地性環濠集落の盛行	元屋敷遺跡（村上市）、耳取遺跡（見附市） 智恵遺跡（新発田市） 下谷地遺跡（柏崎市） 新潟空港遺跡（佐渡市） 古津八幡山遺跡（新潟市） 寺大遺跡群（上越市・妙高市） 城の山古墳（胎内市）
BC				
AD		邪馬台国の女王卑弥呼が魏に使者を送る		
300	古墳時代	前方後円墳が作られる 大和政権の全国統一が進む	各地に古墳がつくられる 古墳の数が増加する	高浜塚古墳（新潟市）、長岡大塚古墳群（三条市） 赤川砦遺跡・魚沼古墳群（南魚沼市） 観音平・天神堂古墳群（妙高市）

スライド13

第4表 県内の後期環濠集落の存続期間

遺跡名		立地	規模	中期	1	2	3	4	5
山元		高地	小規模	…	……	■			
古津八幡山		高地	大規模		■	■	■	……	
大平城		高地	小規模		…	■			
経塚山		高地	小規模			■			
裏山		高地	小規模			■			
髮木遺跡群	百間山	高地	大規模			……	……		
	上ノ平・矢代山A	高地				……	?	?	……
	矢代山B	高地				……	■		
横山		低丘陵	小規模			■	……	■	■
西谷		低丘陵	小規模			……	……	……	■
釜蓋		低地	大規模		……	……		■	■

…… 土器・若干の遺構有り。
■ 主体時期

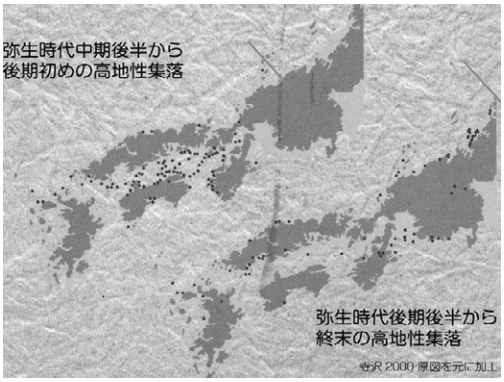
スライド14

倭国大乱

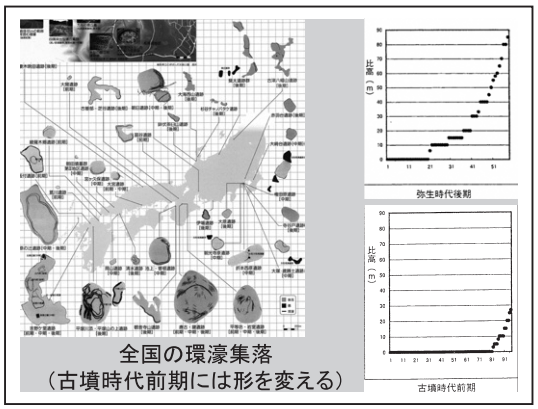
【文献資料など】
- 小さいクニが100ほどあり。
- 桓霊の間（AD.147-189）、倭国大いに乱れ（「倭国大乱」（『後漢書』東夷伝）。
- 邪馬台国の女王・卑弥呼が戦乱治める。
- 卑弥呼は247年に死去。壱与が王となり再び治める

＜畿内のヤマト政権＞

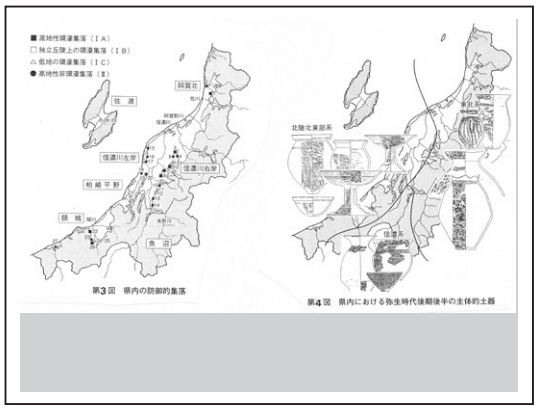
スライド15



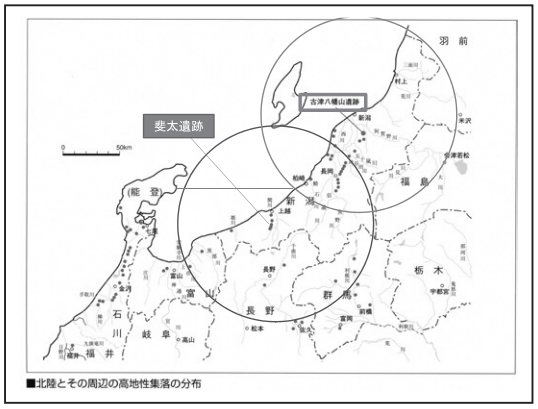
スライド16



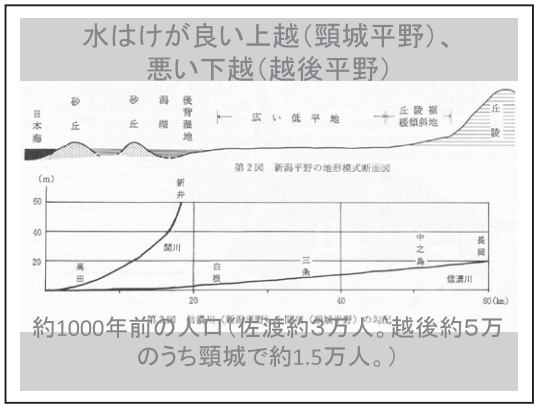
スライド17



スライド18



スライド19

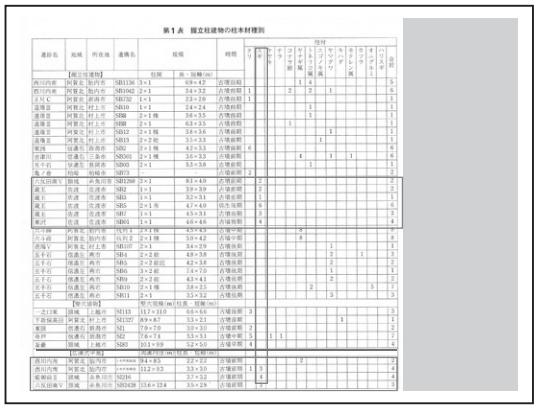


スライド20

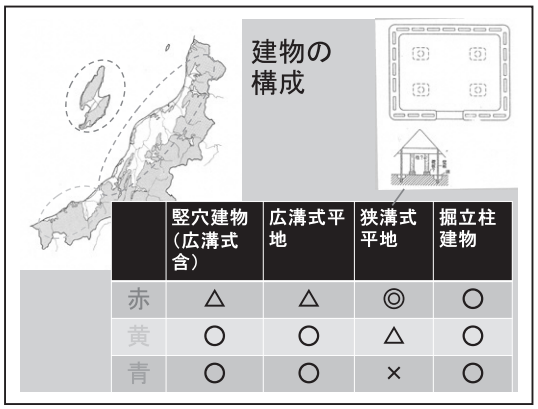
スライド21

スライド22

スライド23

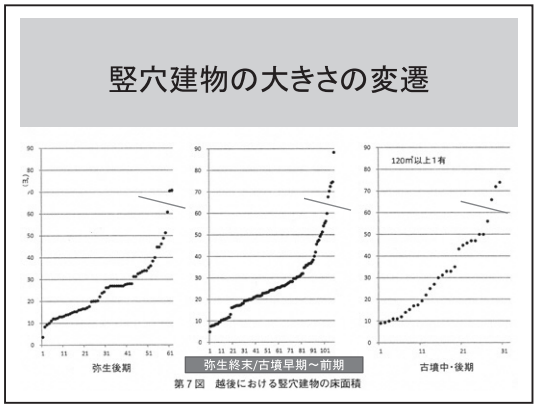


スライド24

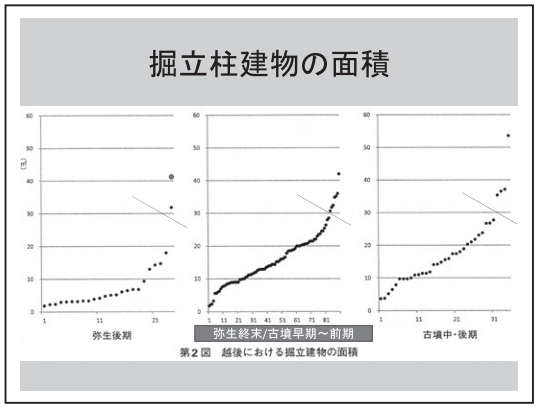


スライド25

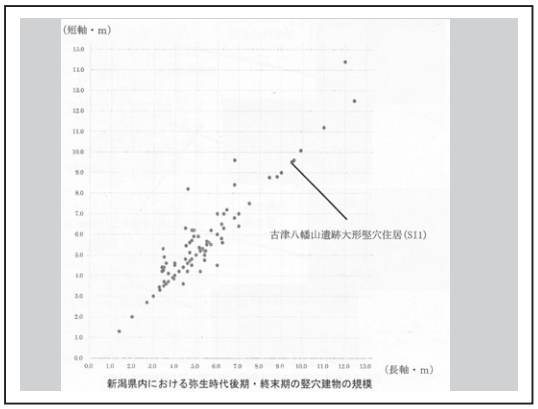
スライド26



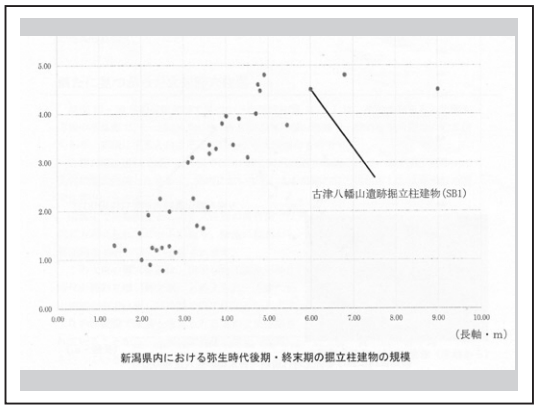
スライド27



スライド28



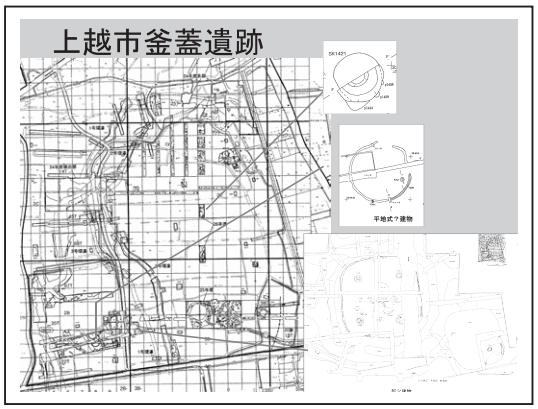
スライド29



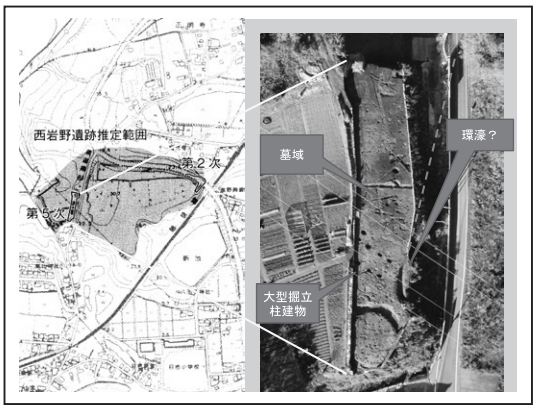
スライド30

スライド31

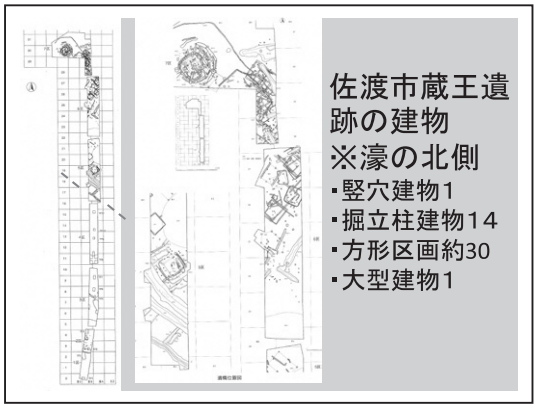
スライド32



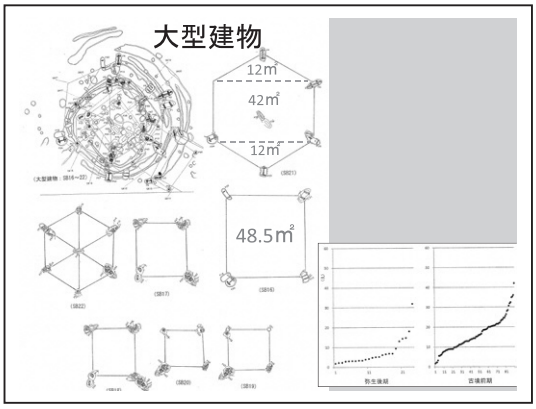
スライド33



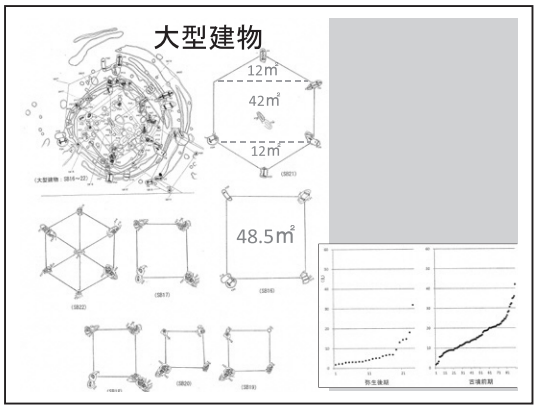
スライド34



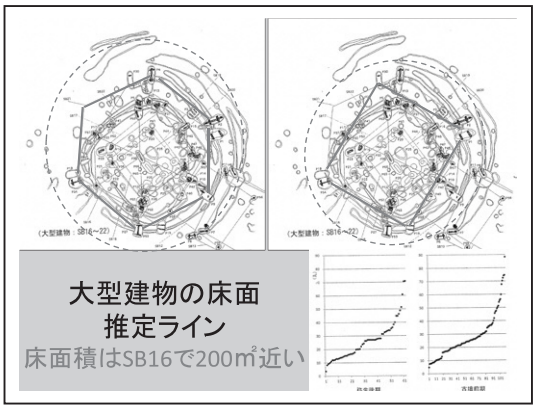
スライド35



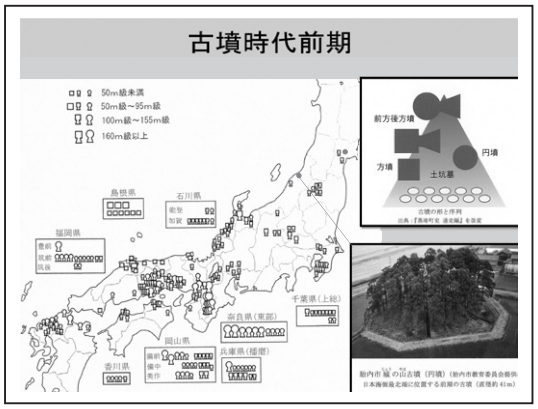
スライド36



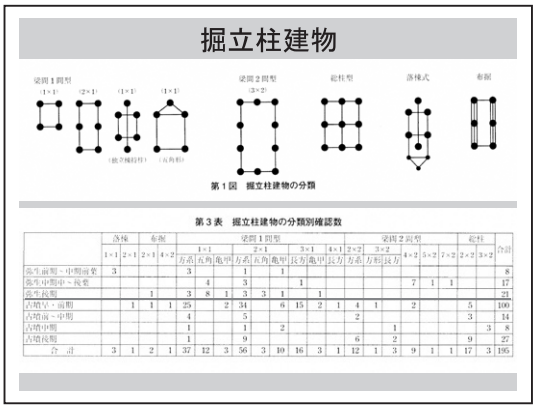
スライド37



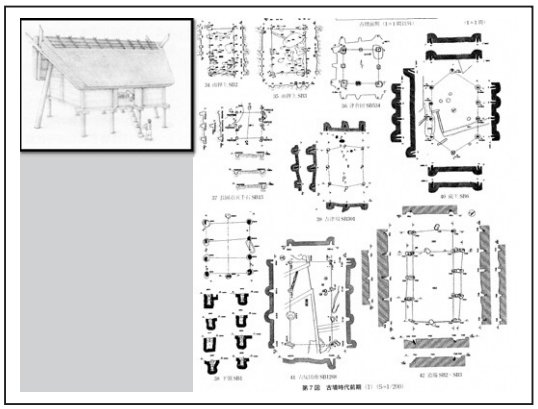
スライド38



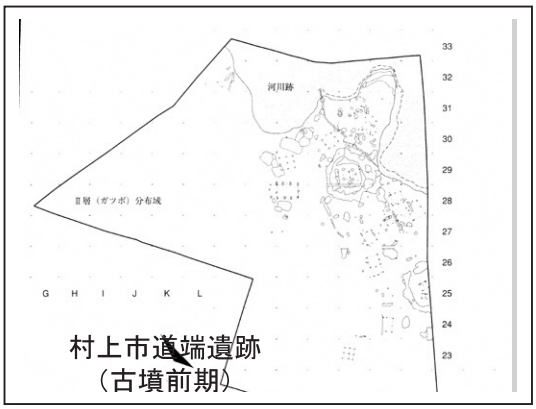
スライド39



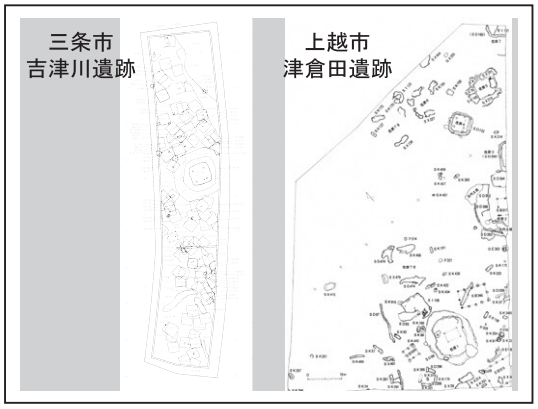
スライド40



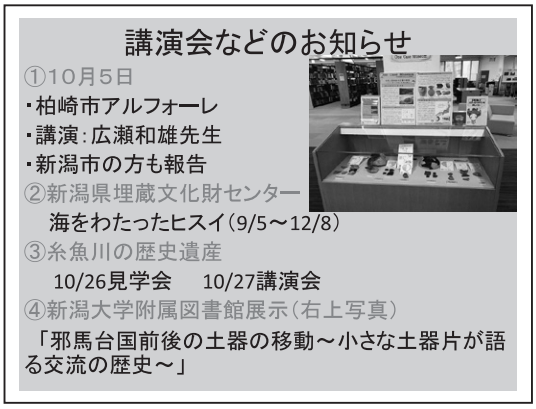
スライド41



スライド42



スライド43



スライド44

図・写真の出典

スライド４：集英社1999『縄文世界の一万年』
スライド５：上・山川出版社2013『詳説　日本史図録』第６版、下・福島県立博物館1993『東北からの弥生文化』、
スライド６：左・長野県立歴史館2009『山を越えて川に沿う』、右・奈良県立橿原考古学研究所2005『ムラの変貌－弥生後期の大和とその周辺』
スライド７：上と左下・山川出版社2013『詳説　日本史図録』第６版
スライド８：左上・奈良県立橿原考古学研究所2005『ムラの変貌－弥生後期の大和とその周辺』、左下・新潟県立歴史博物館2009『弥生時代のにいがた』、右・福島県教育委員会・福島県文化振興財団2014『桜町言う席（第５次）ほか』
スライド９：新潟県立歴史博物館2009『弥生時代のにいがた』
スライド12：滝沢規朗2013「阿賀北における弥生後期の北陸系土器について」『三面川流域の考古学』第11号　奥三面を考える会
スライド13：新潟県教育委員会『新潟まいぶんナビ』増刊号
スライド14：滝沢規朗2009「まとめ」『山元遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団に加筆
スライド15：右・上山川出版社2013『詳説　日本史図録』第６版
スライド16：新潟市埋蔵文化財センター2013「弥生の丘展示館ガイドブックNO.2」（弥生時代編）
スライド17：左・新潟市埋蔵文化財センター2013「弥生の丘展示館ガイドブックNO.2」（弥生時代編）、右・滝沢規朗2009「まとめ」『山元遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
スライド18：滝沢規朗2009「まとめ」『山元遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
スライド20：坂井秀弥1993「古代越後の環境・生産力・特性」『新潟考古学談話会』第12号　新潟考古学談話会
スライド22：川村浩司1996「越の土器と古墳の展開」『越と古代の北陸』名著出版
スライド23：左上・新津市教育委員会2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』、左中・佐渡市・佐渡市教育委員会2015『東沢遺跡』、左下・佐渡市・佐渡市教育委員会2017『蔵王遺跡・小谷地遺跡・
平田遺跡』、真中の上・都出比呂志1989『日本農耕社会の成立過程』、真中の中・鹿取渉2015「第Ⅵ章１　方形区画溝について」『東沢遺跡』佐渡市・佐渡市教育委員会、真ん中・下：新潟市文化財センター弥生の丘展示館2019配布資料
スライド24：滝沢規朗2019「新潟県における弥生時代～古墳時代の掘立柱建物」『磨斧作針』橋本博文先生退職記念論集
スライド25：右上・鹿取渉2015「第Ⅵ章１　方形区画溝について」『東沢遺跡』佐渡市・佐渡市教育委員会
スライド26：渋谷歌子・本間伸夫・石原和夫・佐藤恵美子1988「新潟県の郷土食に関する研究（第22報）『県立新潟女子短期大学研究紀要』第25集
スライド27：滝沢規朗・鹿取　渉2018「弥生時代後期～古墳時代前期の佐渡市蔵王遺跡について」『三面川流域の考古学』第16号　奥三面を考える会
スライド28：滝沢規朗2019「新潟県における弥生時代～古墳時代の掘立柱建物」『磨斧作針』橋本博文先生退職記念論集
スライド29：新潟市文化財センター弥生の丘展示館配布資料2019
スライド30：新潟市文化財センター弥生の丘展示館配布資料2019
スライド31：浜崎　悟1993「加賀における集落構成要素」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会を一部改変
スライド32：新潟市文化財センター弥生の丘展示館配布資料2019など
スライド33：上越市教育委員会2013『釜蓋遺跡確認調査概要報告書』１
スライド34：柏崎市教育委員会2019『西岩野２』
スライド35：佐渡市・佐渡市教育委員会2017『蔵王遺跡・小谷地遺跡・平田遺跡』に加筆
スライド36・37：滝沢規朗・鹿取　渉2018「弥生時代後期～古墳時代前期の佐渡市蔵王遺跡について」『三面川流域の考古学』第16号　奥三面を考える会
スライド38：滝沢規朗・鹿取　渉2018「弥生時代後期～古墳時代前期の佐渡市蔵王遺跡について」『三面川流域の考古学』第16号　奥三面を考える会
スライド39：左・（財）大阪府文化財センター2006『古式土師器の年代学』、右・新潟県教育委員会2015『遺跡が語る弥生・古墳時代の越後』
スライド40：滝沢規朗2019「新潟県における弥生時代～古墳時代の掘立柱建物」『磨斧作針』橋本博文先生退職記念論集
スライド41：左・新潟市文化財センター弥生の丘展示館配布資料2019、右・滝沢規朗2019「新潟県における弥生時代～古墳時代の掘立柱建物」『磨斧作針』橋本博文先生退職記念論集
スライド42：新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団2005『道端遺跡Ⅲ』
スライド43：三条市教育委員会2008『吉津川遺跡』、上越市教育委員会1999『津倉田遺跡』

■企画展３関連講演会（第２回）

弥生時代における北陸西部と下越地方の交流

久田　正弘（石川県埋蔵文化財センター）

はじめに

ご紹介に預かりました石川県埋蔵文化財センターの久田といいます。今回、レジュメは話しの流れとして、基本的にはパワーポイントで画像を見て頂き、その内容を話していきたいと思います。

１．石器の流通

石川県というのは、左手挙げて人差し指を少し曲げて、親指を広げた形で表現します。親指が富山県、能登半島が人さし指となります。石川県は能登地方と加賀地方で地形・地質が大きく異なり、スライド２が地質図ですが、岩体が意外と違います。能登の方は青・紫色が多く、加賀地方はピンク色などが多いなどの違いがあります。スライドの星印は縄文時代の剥片石器の石材が採れる産地です。能登半島では、新潟や佐渡と近い石器の石材が出土しているので、ある程度地質的には近いと思います。ただ大きく違うのは、旧富来町、現在合併して志賀町ですが、そこには輝石安山岩が採れます。それは西日本（二上山や四国）のサヌカイトに近いような石材です。この石材が利用されることが、新潟県と大きく違う状況だと思います。輝石安山岩の石器は、スライド２の黒印で出土し、かなり多く分布しています。土器圏のまとまりは、能登と富山が１つの分布圏、能登と金沢が１つの分布圏としてあるのですが、加賀地方では手取川という大きな川があるので、能登・金沢とは違う状況です。

スライド３が縄文時代の石材流通のイメージですが、富山市小竹貝塚では色々な産地から色々な石材が来ています。スライド３の石器では赤や白や黒や黄色があるのは、明後日から展示が始まる新潟市御井戸遺跡でも殆ど変わりません。それは、縄文時代の石材の流通は、１つの産地に頼るのではなくて、色々な所から石材や製品が集まって来ます。スライド３は黒色の石器が目立ちますが、色々な色の石材が少しずつあるというのが、縄文時代の石器です。

弥生時代では、石川県小松市八日市地方遺跡では沢山の遺物が出土しています。スライド４は石鏃の集合写真です。スライド３に比べて色々な色もありますが、基本的には黒色で統一されます。それは、能登の輝石安山岩やサヌカイトや他地域の安山岩が入っているからですが、写真スライド４の赤囲みに３点の黒曜石があります。透明な石鏃は長野県霧ヶ峰産と思いますが、下の黒い石鏃は、九州の黒曜石であり、縄文時代に来ていると私は思っています。

近年、輪島市塚田遺跡で縄文時代に磨製石器を作っていることが判りました（スライド５）。能登地方では、糸魚川の蛇紋岩製磨製石斧が一番多く出土していましたが、縄文時代後期中頃以降になると、スライド５の石材の磨製石斧が出土します。これを探していくと、米原市起し又遺跡で出土しているのを確認しました（スライド５左）。実は昨日、御井戸遺跡の展示準備を見学した際に、私が石川県内などで見た石材と、多分同じものがありました。それは旧朝日村で作られた縄文時代後期中葉頃の石斧が、金沢か近畿には、ちょっと記憶が定かじゃないのですが出土しています。つまり、土器だけじゃなくて石器の石材を調べることで広域流通が判ることが、現在言われております。

２．土器・土製品の流通

私の出身は真脇遺跡の近くで、「お魚さん」土器がありまして、日本海側で分布しております（スライド６左）。福浦上層式土器の分布は、昔に秋田県の富樫さんが纏められましたのを図に落としました（スライド６右）。すると男鹿半島にぶつかって米代川沿いに登っていくと三内丸山遺跡に行った可能性があります。縄文時代前期終わり頃に、石川県の土器が、下越地方を越えて三内丸山遺跡まで行った可能性があるのです（スライド６右）。

スライド７は「の」字状石製品であり、南海種のイモガイの上を切った形の石製品です。本当はこの貝製品が欲しいのですが、それが手に入らないから真似をしたコピー商品が、石川・新潟・東北でも出土しています（スライド８）。

南海産のコピー製品は、村上市のホラガイの土製

品（後期中葉、スライド８中）、富山市北代遺跡（スライド８左）ではタカラガイの土製品が出土しています。模倣する際にはある程度現物が無いと無理ですが、東北地方でもイモガイ型土製品（スライド８右）が出土しているので、遠方の情報がしっかり伝わっています。

スライド９は、西日本で出土した北陸系土器の分布ですが、殆どの土器が関東系土器と言われています。北陸の新崎式は和歌山県新宮市や南九州の方にも出土しているので、広域に動いているのが判ります。それ以外に、スライド７・８の南海産のものが北陸に来ているので、何百㎞も動いているようです（スライド９）。

３．玉製品・祭祀具の流通

今までは土器の話ですが、今新潟県埋蔵文化財センターでヒスイの展示をしている中に、結晶片岩製の玉があります。九州地方で多く作られた玉であり、一番新しい玉が新発田市青田遺跡で出土しています。その九州の玉は縄文時代後期中葉から晩期前半ぐらいに、集中的に多く作られました。その石材はヒスイでは無く、軟玉で深緑色の石を使い、円錐形、コの字勾玉があります。それが石川県の御経塚遺跡で４か５点出土しています（スライド10右）。この玉の事は熊本大学大坪志子氏がまとめられて、何回も発表しています。

九州の物が北陸に行くけど、実は北陸の物も西日本に動いているのです。出雲市三田谷遺跡には八日市新保式が出土しています（スライド11）。だから片方だけじゃなく双方向で交流が行われ、石川県金沢市藤江Ｃ遺跡でも九州の玉が出土しています（スライド11）。藤江Ｃ遺跡の他の玉はヒスイですが、ヒスイの玉と一緒に九州の玉が出土することが判ってきました。

スライド12は御物石器の分布図ですが御物石器とは、穴水町比良で出土したものが檀家から東本願寺に寄進され、本願寺から明治天皇に献上されたから、付いた名前です。飛騨型、北陸型に分かれていますし、２種類の石材があります。その中で、黒い石材は大分県竹田市で出土しています（スライド12左下）。もう１つ山を越えれば熊本県です。先ほどの九州の玉は、この中央構造体の所に産地があるので、その近くまで御物石器は行っております。

竹田市は黒色粘板岩質であり、多分飛騨で作られたと思いますが、加賀産の凝灰岩質は飛騨市家ノ下遺跡でも出土し、石川県真脇遺跡では両方出土（スライド12）するので、一方から色々なものが来るのではなく、同じ地域内でも多方向からの流通がありそうです。

次に漆器ですが、富山県小矢部市桜町遺跡の櫛は、東北で作られた透かしが入った綺麗なもの（スライド13左下）で、同じような櫛が埼玉県や北海道で出土しています。ただし地元で作る櫛はスライド13左上の形なので、この透かしを持つ櫛は広域に動いていたと思われます。

４．広域に移動した土器

スライド14は未報告資料ですが、真脇遺跡では大洞Ｂ１式土器が出土し、胎土も違います。明治大学の石川日出志氏に聞いたら、下越か中越だろうとのコメントを頂きました。新潟県の土器が、真脇遺跡までは来ていることが判りました。

西日本と東北地方の架け橋として上越市奥の城西峯遺跡があります（スライド15）。何で架け橋かと言うと、西日本系の突帯文土器、東海地方西部（愛知、岐阜県）の土器、富山県の土器（左下）、東北地方中部の土器（右）が出土しています。

スライド16は東大と奈良大の教授が書いた論文を元に、私が作図したのですが、高知県居徳遺跡に東北系土器が出土しており、弥生博などの展示に使われる土器ですが、同じ土器が石川県波並西の上遺跡や富山県桜町遺跡や福井県舟寄福島通遺跡、それ以外に、この奥の城西峯遺跡に出土しています。この両氏がある時に、「横浜市杉田遺跡にもあるが、高知へ行くにはどこを通って行ったのかが判らない」と言われたような気がします。しかし、奥の城西峯遺跡を入れることによって、東北から関東に来て、高知まで行くルート以外に、上越から東海行って近畿から高知に行くルートも考えられます。この土器が大事なのは、福岡県雀居遺跡に出土し、遠賀川式土器の文様に影響を与えたと論じられました。今まで弥生時代というのは、文化は西から東しか行かないとずっと言われ続けていました。それが、この両氏の研究によって、相互交流もあることを提唱されたのが、今からもう12年ぐらい前のことです。

スライド17・18は見るだけで良いのですが、東日本系土器の分布域があります。弥生時代研究者は、「新潟県の大洞Ｃ２式朝日式は西日本に行ってないが、弥生時代前期になり始めた頃、沢山の土器が西日本に出土して、交流を盛んに行った」と言いたい

のですが、実は大洞Ｃ２式朝日式段階でも、それなりに交流はあるのです。ただそれを西日本の研究者がちょっと、図として表現していない。

その逆の例として、石川県市御経塚遺跡、国指定史跡があります。そこには赤塗り、いわゆる丹塗磨研の壷、丹塗磨研の浅鉢が出土しています（スライド19）。中国地方には浅鉢変容壺というのがあり、本当は壺を作りたいのに壺を作る技術がないので、浅鉢の口縁を長くしたものが岡山地方あります。その浅鉢変容壺が御経塚遺跡で出土しています

スライド20では、同じような時期に、北部九州地方の夜臼式底部と思われる土器や絵画か記号に近い土器（写真）が、縄文時代の終わり頃に出土しています。

御経塚遺跡では、晩期後半（新潟県では鳥屋式併行）の縄文土器の中に籾圧痕が確認されます（スライド21）。まだ時代的にも土器の作り方でも縄文時代なのですが、石川県まで稲は来ているのが判りました。

先ほど言った、夜臼式･口酒井式の赤塗り土器は、実は石川県にも赤く塗った土器があります（スライド22左）。縄文土器の赤塗りというのは、土器を焼いてからベンガラを塗ってるので洗うと落ちますが、赤塗り土器は焼く前に塗っているので、洗っても赤色は落ちません。この技法が、奥の城西峯遺跡まで出土しています。

５．弥生時代前期の土器の交流

弥生時代前期には遠賀川式壺の分布（スライド22右）は黒、赤、青色の３種類が産地のイメージと思ってください。新潟では糸魚川市大塚遺跡は青色です。青色は、私の感覚ですと、出雲地方の混和剤に近いです。黒色は花崗岩地帯の土器であり、上越市和泉Ａ遺跡は東海地方から来ていると思います。小松市八日市地方の壺は、出雲地方から直接来ていると見ております。その理由は、皆さんも色々な人と話していると、方言で出身地が判るように、土器の混和材を見れば作られた地域が大まかに判ります。

スライド23は東京大学設楽博己氏の論文を纏めたもので、島根県松江市西川津遺跡には、遠賀川式土器の壺なのに変な模様がある（スライド23左下）。楕円形の間に線を入れて眼鏡状にした文様があり、これは北陸的な文様です。これは北陸の土器（スライド23中下）が、鳥取県智頭枕田遺跡、鳥取県の入り口にある交通の要所の遺跡に搬入されており、胎土･文様的にも北陸の土器ですが、北陸の文様を模倣した土器（スライド23中央右上）も出土しています。智頭枕田遺跡には瘤が付いた突帯文土器の壺があります。よって山陰地方で北陸の文様と突帯文の瘤が融合した壺（スライド23右上）が、石川県小松市八日市地方遺跡で出土したと私はみています。

それを可能にしたのが船でしょう。スライド24は輪島市舳倉島ですが、夏はアワビ採りの海女で有名ですが、そこの深湾洞遺跡に弥生時代前期に、遠賀川式土器ではなくて条痕文土器という縄文土器の伝統を持つ土器が出土しています。その中に一点、遠賀川式土器があるのが判りました（岩手大学佐藤由紀男氏教示、スライド24）。この報告書が出たのは1985年ですが、この土器の写真は報告されていません。2003年大阪文化弥生博物館の展示で、輪島市内から52㎞離れた離島に、弥生前期初頭以外の遺跡が無いのに、急に人が渡って生活した痕がある。そこに遠賀川式土器が出土しており、どこから来たのかが、今後課題になっています。それ以外に、舳倉島沖の底引き網であがった山陰系壺があります（スライド24右上）。これは山陰地方の古墳時代前期の土器ですが、難破したのか、それとも荒波にあったので荷物を海に投げたのか判りませんが、出土しています。深湾洞遺跡の近くにあるシラスナ遺跡には弥生時代後期から古墳と思われる鹿角の破片が出土しています（スライド24右下）。50㎞以上離れた島なので鹿は生息して居ないので、鹿角を持って行き、切った長い方で、アワビオコシか釣り針を作ったと思います。舳倉島は、今はアワビ漁で有名ですが江戸時代はアシカ漁が有名だったので、当時も海獣を獲りに行っていたと思います。

次に愛知県一宮市伝法寺野田遺跡に、浮線網状文（新潟県では鳥屋２式併行）という土器が出土しています（スライド25上）。報告書作成時に愛知県のセンター職員から「海綿骨針が入っている土器がある」と連絡がありました。愛知に行って見ると、混和材の感じから七尾市周辺、和倉温泉よりは七尾城跡周辺から持って行ったのではないかと判断しました。それ以外に、三重県松阪市でも弥生時代後期終末の装飾器台（スライド25右）は混和材から野々市市から能美市周辺の土器と思われます。

弥生時代の中期になると櫛描文が多様になり、破片では細かい時期が判りにくくなりますが、前期の場合は縄文的な文様があるので、細かい時期が判ります。石川県の柴山出村式の中に、縦に一本線を引

いて両方に羽状の線を入れる文様が特徴の壺が、名古屋からしらさぎに乗って金沢に来るルートと、逆に富山から高山線に乗って行くルートに、意外と出土しています。新潟県では和泉Ａ遺跡や保明浦遺跡にも出土していますので、ある程度交流があったと思われます。ただ、和泉Ａ・保明浦・布尻遺跡の土器、高山市三枝城跡の土器は、似ているけど石川県のものではないことが判りました（スライド26）。

６．弥生時代の石器の流通

小松市八日市地方遺跡では、弥生時代前期頃に北部九州地方の石斧と、北海道の石斧が出土しているのが報告されました（スライド27）。

北海道の石斧を報告した人は、青森・秋田ぐらいから、直接搬入されたのではないかと報告されました。ただ土器が伴わないので東北地方から直接なのか、新潟経由なのかも踏まえて、その時期の土器をもう一回洗い出して検討する必要があります。

先程北部九州から来た石斧を紹介しましたが、他に抉入柱状片刃石斧という石斧（スライド28）が出土しています。この石斧は北陸でも殆ど作っていません。出土する場合は完形品で未成品は無いので、直接持って来ているのだろうと思います。スライド28の石斧も、スライド29の石斧も黒い筋が少し見えると思います。斧柄には抉り部分で縛って使うのですが、縦筋が入る石材で作られています。出雲地方でも、同じような石材の石斧が出土しています。ただ、スライド29右下は同じような石材でないことや石材の色味が違うので多分近畿地方の石斧が来ていると見ております。

７．石川県から新潟県に運ばれた土器

ここの展示室にある緒立遺跡の条痕文系壺（スライド30-1）ですが、小松市埋蔵文化財センター下濱貴子氏が、「あの土器は多分、八日市地方遺跡の土器だから、機会があったら確認して」って言われていました。混和材は同じ丸い粒子があるのと文様から小松市八日市地方遺跡から持ってきた土器と判断しました。見学の際に、スライド30-2を見せてもらうと海綿骨針が入っていました。胎土・文様的に新潟の土器と違うので、この土器は能登から運ばれたことを確認しました。

緒立遺跡はⅡ様式後半の管玉（スライド31）が展示してありますが、この管玉は孔が貫通していない未成品があります。これは穿孔途中で割れたものが出土しています。集落の開始期ではなく、途中にそれが来ていることを評価していく必要があると思います。あとで話しますが、変な石錘があります（スライド31中央下）。

次は、新潟県に運ばれた北陸系櫛描文土器の話をします。旧亀田町西郷遺跡（スライド32左）の土器ですが、赤い鉄石英が入っており、在地で無いことが判りました。これ以外に、上越市吹上遺跡（スライド32中・右）では、集落の開始期に能登から運ばれた土器と南加賀か富山に運ばれた土器があることを混和材から確認しました。よって、新潟県の玉作り遺跡の集落開始期に、必ず北陸西部の土器、能登と加賀の土器が入っております。これは、今後重要になってくると思います。その理由は八日市地方と能登の土器が西郷遺跡や吹上遺跡まで出土しており、吹上遺跡では管玉を穿孔する石針の中に能登の安山岩があるのが蛍光Ｘ線で判明しています。だから小松・羽咋周辺の土器などが、新潟県に来ていることが判りました。上越市吹上遺跡（スライド34・35）の集落Ⅰ期に、能登などの土器などが来ていますし、あと銅鐸形土製品と石製品というのがあります。これは大阪湾型銅戈形土製品と長い名前なのですが、元の銅戈は大阪湾周辺で作られています（スライド35下段中央）。

８．東日本系土器などの出土

スライド36は石川県・富山県で出土した東日本系土器の分布図ですが、2009年に私が纏めた時には色々な地域の土器が出土しています。この中で遺跡名が赤色は東北系、青色が中部・関東系ですが基本的に赤字が多いです。徳丸遺跡や飯野新屋遺跡などは、東北南部の二ツ釜式か川原町口式であり、下甘田遺跡は天王山式の前の型式と石川日出志氏から教示を得たのですが、私の中では判らない土器も出土しています。

９．能登地方と新潟の関係

先ほど緒立遺跡の管玉では、薄い水色ですが、他に赤い鉄石英や深い緑色もあります。スライド37は七尾市細口源田山遺跡の方形周溝墓、その近くに千野遺跡（スライド38）があります。管玉や素材（スライド37・38）は薄い水色が多いので、七尾周辺では濃い緑色の石材が無いようです。スライド38右上に大きな変なやつ、珪化木が出土しています。珪化木は薄く剥いで、石鋸を作ります。石鋸は石材を割

るための溝を作る工具ですが、和歌山・徳島県で採れる紅簾石片岩製の石鋸も出土していますが、能登では珪化木が利用されているのは佐渡と同じか近いのです。

その理由を考えたら、志賀町（旧富来町）では、佐渡市平田遺跡などで作った管玉のセットが山王丸山遺跡で出土しています（スライド39）。他に、吹上遺跡で作られた滑石製勾玉が八幡バケモンザカ遺跡も出土しています。それ以外に、後に出てくる山陰系注口とか、色々な地方の遺物が出ているのが判っています（スライド39）。

山王丸山遺跡では佐渡の管玉が方形周溝墓の中央にある土坑からまとまって出土し、つなげると長さ３ｍぐらいになるネックレスになります（スライド40）。この遺跡にはヒスイ製勾玉もありますが、黒色は滑石製、白色は蛇紋岩製なので糸魚川市や上越市で作られた勾玉が出土しています。ですから志賀町（旧富来町）では、佐渡産の管玉を沢山入手し、上越・糸魚川周辺で作られた勾玉も出土するので、新潟県と交流があったことは確実です。

10. 能登の拠点集落の石器

羽咋市吉崎・次場遺跡は後ろに潟湖があったので拠点的な集落として残ったと思われ、一部が国指定史跡です（スライド42）。スライド43の石剣（１）は、弥生文化博物館の今回の図録に掲載されましたが朝鮮式磨製石剣と思っています。違ったとしても地元産ではないのです。２は銅剣型模倣石剣といって、銅剣が欲しいのですが銅は高いから無理なので、近畿地方北部から多分来た石剣と思われます。

吉崎・次場遺跡の玉作は、糸魚川からヒスイを入手して、濃い緑色の碧玉と言われる緑の石もあるのですが、管玉の石材産地は良く判りません（スライド44）。

玉以外に磨製石斧を作っています（スライド45）。石材は、柱状節理の素材を利用し、何種類かの石材を利用して作っています。過去の県調査では100点ぐらい素材があるようです。それ以外に新潟県でもよく出土する長野県善光寺平で作られた榎田型石斧が10数点出土します。つまり、自分達が使うから石斧を作るのですが、それ以外に吹上遺跡や新潟県内と同じように、長野産の石斧が沢山来ています。

吉崎・次場遺跡の北側に能登一の宮である気多大社があります（スライド46右上）。その北側にある大島から石材を９㎞離れた遺跡をまで運んで、磨製石斧を製作していると林大智氏がまとめました。しかし現地に行くと、違う柱状節理の石材でしたが、石包丁と環状石斧を作っている石材でした。この石材は、黒い斑晶が特長なので加賀地方での出土も確認されています。逆に、羽咋市吉崎・次場では、南加賀、八日市地方遺跡などで使っている珪岩製の敲き石が出土しています（スライド47）。多分この石は佐渡でもあると思います。

11. 弥生時代中期の石器の流通

石川県内の石包丁・石斧の分布は、石材からみると、加賀地方と能登地方の石斧では、青色や黒色や赤色の出土事例があり、石川県の中で石材が動いていることが判りました。これは、図面でなく写真で石材を判断するとこのような交流があったことが判っています（スライド48）。

大阪文化博物館禰冝田館長が石川県に資料調査に来られた際に、吉崎・次場遺跡には二上山のサヌカイト製尖頭器を確認され、弥生博物館の図録に掲載されました。これ以外に小松市白江梯川遺跡にサヌカイト製の大きな打製有茎石鏃が出土しています（スライド49左２）。下呂温泉周辺には、昔はガラス質安山岩と言われ、今は下呂石と呼ばれる石鏃が出土しています（スライド49右下）。石川県には、近畿や下呂地方から来ているのが判ります。また、愛知県で有名な朝日遺跡で作られた土器が小松市八日市地方遺跡に持ちこまれています（スライド50の右）。

12. 鉄器の流通

八日市地方遺跡では、玉以外にも精巧な木製品を作っていました。精巧な木製品を作る為に、糸魚川の玉髄・蛇紋岩製の鑿状石器を使っていますが、それ以外に鉄製鉈を使っていたようです。鉈の１字でヤリガンナ（宮大工が使う道具）と読ませますが、本来はシと読みます。鉈の鉄部分は5.1㎝、柄にはイヌガヤを図のように割って鉄を置いて桜皮の紐で巻いています。レントゲンにより、木を糸で巻いていることが判明しました。糸に接着剤が使われているのかは判りませんが、桜皮２本で巻いています（スライド51）。

八日市地方遺跡では、沢山の玉を作っています。スライド52の右側には、ものすごく綺麗なヒスイですが、すごく小さいのです。鉄製ヤリガンナの近くから糸が切れた状況で出土しました。手頸にしていたが紐が切れて、川の中に落としたようです。

スライド52の右上には変な斧の柄があり、鋳造鉄斧というソケット式の鉄斧用の柄です。この概要報告書は石川県埋蔵文化財センターのホームページでダウンロード可能なので、良かったら見てください。

スライド53の鋳造鉄斧は高田遺跡、鋳造鉄斧柄は八日市地方遺跡、板状鉄斧は吉崎・次場遺跡で出土したものです。鋳造鉄斧の柄が、弥生中期から後期にかけて、小松市で多く出土しています（スライド54）。その理由として、出雲地方との交流が強いからだと思います。

13. 西日本系の土器などの流通

スライド55には、変な形の底部や土器があり、出雲地方などから羽咋市に持ちこまれた（スライド55左下）、その影響がある土器（スライド55中央上）が確認されます。また、新潟市六地山遺跡（スライド55中下）では、私の観察では戸水Ｂ式の甕でした。Ⅳ様式最後の頃（天王山式土器ががいるかいないの頃）に石川県の土器が出土しています。スライド55右中央は金沢市中屋サワ遺跡の魚の絵画土器がですが、これも山陰系の影響だと思います。

スライド56の右下の土器は柏崎市開運橋遺跡から出土した九州系土器で、弥生時代後期（Ⅴ期）前半の土器です。実はこの土器は、新潟県内の土器よりも赤いのです。その前のⅣ期にもスライド56の中央下、加賀市三木Ａ遺跡出土の赤く焼かれた土器があります。この土器にはタマキ貝の模様が施されています。山口県に関係する人に聞くと、山口県の土器は、赤く焼くものがあるようなので、北部九州や西部瀬戸内の土器が動いている中で、北部九州系土器が開運橋遺跡まで飛んで出土する以外に、その手前での出土もあるのでしょう。

次に銅鐸形土製品という弥生時代中期の話をします。銅鐸形土製品が石川県羽咋市吉崎・次場遺跡と富山県小矢部市埴生南遺跡に出土しています（スライド57）。埴生南遺跡は写真でしか確認していません。

八日市地方遺跡は、銅鐸形土製品が６つ（スライド58･59）あるので、銅鐸は知っている、見ている、持って居たのかは不明なので、今後石川県でも出土すれば良いのですけれど。

次は、山口県や広島県や鳥取県に多く出土する分銅形土製品があります。いわゆる両替商のマークの分銅に近いので、分銅形土製品と名前が付いています。現在、石川県では44点以上確認されています（スライド60）。出土地は、加賀市と小松市の川の流域、金沢市西側から白山市（旧松任市）と、羽咋市の沿岸部です。2002年の大阪府立弥生文化博物館の集計（スライド61右）では石川県は数点でしたが、現在は44点と沢山出土しています。ただし、近畿圏では少し、若狭地方にも１点だけなので、多分鳥取県などから直接来たとしか言い様がない状況です。

次に、戸水Ｂ遺跡では滑石製指輪が出土しています（スライド62）。当時、金属性指輪もありましたが、これは形が歪なので貝製の指輪を模倣して作ったものと思います。スライド62中央下は身長150㎝前半の女性の指に入れて撮影したものです。石製指輪は、長野県や四国地方でも多く出土していますが、北陸では少ないです。

北陸と長野の関係を纏めたのがスライド63です。薄紫色が長野の榎田型石斧、他の色が青銅関係のもので、分布などをみると八日市地方遺跡、吹上遺跡、柳沢遺跡などが各地域で色々交流をしているルート以外に、直接海を伝わったルートもあるのと思います。この中で面白いのが、この榎田型石斧で若狭地方と長浜市で出土していますが、栗林式土器は確認されません。若狭の場合は、どのルートで来たのかを解明出来ればと思っています。

14. 後期における土器などの交流

今回、八幡山弥生の丘展示館展示してある天王山式土器の北陸地方西部での分布（スライド64）ですが、その中で北海道系の恵山式土器が出土していることが、重要でしょう。最初の渡邊所長の挨拶にあったように、間は飛んでいます。能登半島の語源は色々言われていますが、ノット、突き出た岬というアイヌ語があるそうです。ノットがつまればノトにもなるのです。突き出た岬、東から来ても西から来てもぶつかります。たまたま地元のラジオ局で、「日本列島ここが真ん中」という番組があるのですが、何で石川県が日本列島の真ん中なのと思っていました。だけど考古学では、最近使える言葉と思っています。天王山式土器は富山湾にも分布しながら、倶利伽羅から金沢へのルートや七尾周辺から羽咋周辺へのルートでも、ものすごく多く出土しています。赤丸印は、最近の事例です。

スライド64右の写真は、大きく見えますが、10㎝程度の小さな甕です。今後、南加賀地方でも出土例が増えると思います。大阪府茨木市で、アメリカ型石鏃という天王山期の石鏃が出土しているので、天

王山式の人々が近畿まで行った事例もあります。

スライド65の土器は、現在八幡山弥生の丘展示館で展示中の石川県中能登町大槻３号墳に天王山式を模した壺が、後期前半のお墓に供献されています。これは昔の調査で、報告書は出てないのですが、再評価する必要から、渡邊所長が今回展示に借りてきました。ですから、展示を見て頂きたい。

北陸地方には、大阪の生駒西麓産壺が出土しています(スライド66)。特徴はチョコレート色の角閃石という黒色の鉱物がたくさん入っています。それが吉崎・次場遺跡と東的場タケノハナ遺跡では後期の壺（スライド66）が出土し、両遺跡は70mと近い距離にあり、共に中期の分銅形土製品が出土しています。あと氷見市大境洞窟（スライド66左下）や白山市野本遺跡（スライド66右上）で出土していますが、新潟でも出土して欲しいと思いますが、具体的に出土例があるのか私は判りません。

次は青銅器の鋳造の話をします。先ほど鉄器の話をしましたが、皆さんは青銅の製品と鉄の道具（鉄斧・鉄の工具）はどちらが高いと思いますか。鉄だと思う方は挙手お願いします。じゃあ銅が高いと思われる方挙手をお願いします。結果は銅が少し多いですね。奈良文化財研究所を退職された難波洋三氏が中国文献から金額を算定しますと銅製品のほうが鉄製品よりかなり高いそうです。ただ、銅製品よりもっと高いのは魏志倭人伝などに出てくる生口（セイコウ)、つまり奴隷が一番高いそうです。中国の歴史書では、倭国王等が160人、卑弥呼が40人の奴隷を献上したことが記録されています。当時中国でも人間が一番高かったのを、わざわざ持って来たので当時の皇帝は、倭人は金をかけており、皇帝に敬意を払っていると感じたでしょう。

15. 青銅器の生産

スライド67は後期前半の鋳造遺物ですが土製です。本来、北部九州では石製ですが、土で鋳型を作るのは近畿地方で発明された技術なので小松市一針Ｂ遺跡で土製が出土したことだけで、技術は近畿地方から来たことが判ります。ただし、鋳型などは出土しても、炉の構造が判らないのですが、変な焼けた土の塊（スライド67右下）がありました。炉の部材だと思いますが、どういう形になるのか判らないのが、一番のネックになっています。

吉崎・次場遺跡でも、鋳造関係の遺物（スライド68）が出ているので、能登と加賀地方では、とりあえず青銅器を作っていたことが判ります。あと、福井市高柳遺跡では銅鐸を破片にしたものが出土しているので、何かを作っていたようですが、どのぐらいの量をつくっていたのか判りません。

16. 山陰と北陸西部の関係

青谷上寺地遺跡は全国的に有名な遺跡で、昔人間の脳が出土したと新聞報道された遺跡です。実は弥生時代中期の終わりぐらいから、青谷上寺地遺跡と北陸地方西部との関係がものすごく強くなりました。それは、台が広口になる高杯（スライド69右）で、裾にタコ足みたいな突起が付いたものがあります。両者の形は似ていますが樹種（赤い字）が違います。ヤマグワとケヤキ、サクラと材料が違いますが同じようなものを作ろうとしています。青谷上寺地遺跡の高杯がオリジナルなのですが、木取りが報告書に入ってなかったので私が確認すると、戸水Ｂ遺跡の高杯と透かしの割り付けが違うことが判りました。石川県ではオリジナルは知っているので憧れて作ってみたけれど､材料と割り付けも違うことが、詳細に観察すると判ってきました。

青谷上寺地遺跡の周辺には、大きな岬があり、航海のランドマークになります。青谷上寺地遺跡は弥生時代中期から北陸の玉製品と小松で採れる玉の原石を輸入して自分達の所でも管玉を少し製作して、それを北部九州や佐賀県に運んで、利益をあげていたようです(スライド70)。いわゆる仲介貿易をしていたのですが、それが破綻したのです。青谷上寺地遺跡で管玉を作って輸出するのは、商売的には無理となったので、今度は木製品、花弁高杯というのを作り始めました。その高杯が北部九州と石川県で出土しています（スライド70右下)。

花弁高杯（６弁）は上下を別で作っていますが、杯部には変な取っ手が付いています。スライド71の中央右側はこれを模倣して作ったものです。この高杯は昭和54年、55年に石川県で２つ出土しました。青谷上寺地遺跡は2000年代に入ってから見つかったので石川県内の研究者は、「青谷上寺地遺跡の高杯は、石川で最初に作った？石川の高杯が行った？」などと言っていました｡しかし､検討していくとやっぱり北陸のもので無いことが判りました。白江梯川遺跡の高杯（スライド71中央下）が出土した際に、うちの上司は「これ北陸で作ったものじゃないのか？」と言いましたが、それは無理ですと答えました。

スライド72は昭和54年金沢市西念・南新保遺跡から出土した高杯で、水銀朱が塗られ、口縁に黒漆が塗られています。内側中央に白っぽいもの（スライド77右下）が見えますが、別材を埋めているようです。古代中世の挽き物の木器には、中央に６本や色々な形の当て具痕跡があり、生地が動かないようにする工具があるので、その当て具の痕跡と見られておりました。

小松市白江梯川遺跡10次調査を私が担当しました（スライド73）。現在の集落の北と南側から、同じ遺跡と言っても良いような近隣した所から高杯が出土しています（スライド74）。きれいな加工がされていますが、保存処理する前の写真（スライド74右上）では中央部に黒いものがあり、木目の方向と違うことが判ります。保存処理を行うと、その黒いものが浮きでました（スライド74右下）。当て具痕であり、CTスキャンを行って、どのくらいの深さなのか、古代中世の挽き物の当て具痕の中心と違うのかを調べて行きたいと思います。

白江梯川遺跡と青谷上寺地遺跡では高杯以外に、同じものが確認されます（スライド75）。朱塗り容器の脚と言われる変な木製品があり、水銀朱が塗られ、下側に溝を持ち、上端に紐穴があるので他の物と合体させます。両者の樹種はイヌガヤと同じです。スライド75左下のカゴは青谷上寺地遺跡の出土品を復元したものですが、底に台が付いています。出土状態ではカゴの横から少し離れて、台の部材が出土していました。白江梯川遺跡では台が付いた状態（スライド75中央）で出土したことを受けて、青谷上寺地遺跡の復元品は台を付けて復元したようです。カゴは両遺跡とも同じなので、直接来たかは判りませんが、同じ技術、同じものを持っています。

次は、青谷上寺地遺跡から直接来たものがあります。これは２回目の紹介になるのですが、青谷上寺地には緑土を塗った楯があります（スライド81左）。この赤い色が水銀朱で、ここの緑色が緑土です。同じものが白江梯川遺跡にもありました。発見の経緯がおもしろいのです。青谷上寺地遺跡から、仕事を依頼されて伺った際に「日本初の緑土の楯を確認」と来週記者発表すると言われました。それを見せていただいた際に、「どっかであった」と思って、自分の職場に帰って見たら同じものがありました。ちょっと判りにくいですが、ここに少し薄い緑色（スライド81右側中央）があり、これが緑土です。鳥取県に電話かけたら、当時の所長が「今から新聞発表するのでその話は聞かなかったことにする」と言われました。実は全国初というのを報道するときに、実はもう１個石川県にあったというのがばつが悪かったのでしょう。その後、鳥取県埋蔵文化センターで、復元し本を出しました。その復元チームは白江梯川遺跡の楯も見に来ました。その際に「そのものだね」って言って帰られて、一応分析もお願いしました。青谷上寺地遺跡では、保存処理の前の写真が無く、保存処理後には緑色も飛んじゃって判らないですけど、白江梯遺跡では保存処理する前の写真もあるのが良かったと思っています。

スライド77は腰掛けですが、少し形が違いますが、出窓のような透かしが近いものが越前市で出土しており、色々なものが交流していると思われます。

17. 新潟県の木製品

今回集めてみて「えっ」と驚いたのが長岡市大武遺跡の木製品です。川から出土の資料なので評価は難しいのですが、この高杯と棍棒を見て、普通の遺跡じゃないと思いました（スライド77）。桶の出土は北陸西部では何てことないのですが、大武遺跡で杉の桶が２つあるのはちょっと驚きました。石川県では桶はよく出土し、富山県でも氷見市惣領浦之前遺跡に桶の未成品と水銀朱を塗った楯（スライド78）がありますが、富山県では桶は殆ど無いです。スライド79は青谷上寺地遺跡と白江梯川遺跡の桶ですが、取っ手がちょっと内側に向いているのが特徴なのですが、惣領浦之前内遺跡のもそうです。桶は、惣領浦之前遺跡で出土し、やっと能登半島を越えたと思ったのですが、そのうち上越市釜蓋遺跡（スライド79右）で出土したのでやっぱり上越も出るか！と思いましたが、長岡市大武遺跡まで出土が確認されました（スライド79中央下）。この桶は多分、石川か富山県、もっと飛べば山陰から持ってきている可能性があると思います。

スライドの表題のプラス新潟県というのは、実は今週追加した部分があります。スライド80右側の短剣柄２つは、樹種は違いますが剣を入れる縁や段があることや形のカーブが似ているのです。樹種はツバキ属とカヤで異なりますが、カヤは弓などにも使う硬い木なので、剣の柄にもすごく良いです。また、大武遺跡のモミ属の楯（スライド80右）も出ているので、朱が塗ってあったら、ものすごくすごいと言いたいのですが観察してないので判りません。楯は必ずモミ属で作ります。大武遺跡にはこれらがある

ことで感動しました。

今年の弥生文化博物館、秋の展示で大武遺跡のトチノキ製高杯が評価されています(スライド82)。これらの高杯は、北陸で作られたものが、滋賀県を通じて奈良まで行っているとされています。それが大武遺跡まで行ったということが、大武遺跡の木製品の評価をものすごく高めました。

木製品は今まで出た報告書の中でも見直しすることが必要だと思います。

北陸東部と西部も木製品と土器は、弥生時代後期になるとほぼ一緒です。スライド83の竿釣瓶（さおつるべ）が、糸魚川市笛吹田遺跡と小松市白江念仏堂遺跡で出土しています。使い方は細長い棒を入れて、井戸に入れて水を組み上げます。右側は淦取り（あかとり）、船にたまった水を出す道具と思われましたが、孔に棒を入れて使う竿釣瓶の方が良いと思います（スライド83)。

18. 北陸地方の鉄器と生産について

これから、鉄器の話です。弥生時代後期になると鉄器を作っていますという話がありますが、実は奥原峠遺跡（スライド84左)、和倉温泉の近くでバイパス工事のための調査ですが、そこには後期の鍛冶工房があって、その技術は北部九州からの技術導入があったと、北部九州の人が書いています。小松市一針Ｂ遺跡（スライド84右）には古墳時代前期に、北部九州や近畿の一部しかない蒲鉾型の羽口が出土しています。

村上市山元遺跡（スライド85～87）は鉄器などを求めて動いたことが有名ですけど、私はそれよりもお墓と土器の関係が気になります。この遺跡は、竪穴住居とお墓があるのですが、お墓は遺体を土坑に埋めた後に一回抜き出して、土器を合わせた形で再葬をしている（スライド85右）と思いました。ここの遺跡が、鉄器と青銅器を求めていますが、普段使っているのは石の道具（スライド86中央上）です。日本でも数少ない青銅の筒形製品、鉄製短剣を持っています（スライド87)。けれど、墓の形態と石鏃は「弥生時代なの？（縄文時代だね)」との感じを持ちます。他に管玉やガラス玉が出土しているので、当時の一番入手したい高いものを持っています。北陸のこの時期では竪穴住居は殆どが方形や縦長の方形が多いのですが、円形かある程度楕円形の形態もあります。富山市向野池遺跡には天王山土器が伴う竪穴住居（スライド88左下）があり、楕円形なので天王山式の形態と同じですが、炉の感じが少し違うと思います。

19. 四隅突出型墳丘墓について

次は、新しい資料を紹介します。四隅突出型墳丘墓は山陰に多いお墓で、福井・石川・富山県辺りまでありますが、最近新しい事例が増えましたので、紹介します（スライド89)。津幡町七野２号墓（スライド90）は、昔のＪＲが通っている谷筋で、この丘陵の一番端にあるのですが、四隅突出型墳丘墓と思われます。保存により調査が全て行われなかったのですが、20ｍぐらいの意外と大型だと思われます。谷筋を行くと富山エリアに行きますので、富山市杉谷４号墳がこのルートで来ていると思います。次に、福井市高柳遺跡（スライド91）では四隅が突出しながら、陸橋になっている可能性があるものが出ています。

20. 北陸地方のＬ字形石杵

それ以外、今まで石川県には無い、日本海側に無いと言われたものが、実はあったことが判明しました。それは、Ｌ字形石杵です。スライド92左は10年前の論文ですが、その分布は北部九州、瀬戸内、近畿、東海で終わり、日本海側では今後出土しても希だろうと纏められました。しかしその希が、現在５例もあります。Ｌ字形石杵は、底の部分を使って水銀朱を微粉末化して、発色をよくするものです。水銀朱は、細かく砕けば砕くほど、朱色が綺麗になります。2009年に論文の抜き刷りを貰った際に著者に、「残念。2008年に石川県でも報告したよ」と言いました。

七尾市万行遺跡は、七尾湾の一番東側に位置する国指定史跡です。そこでも、Ｌ字形石杵が出土しています。スライド94の左側に赤い色が見えると思いますが、分析により水銀朱でした。先端が欠損しているので、短い長靴のような形をしています。七尾市では小島西遺跡にもあり、七尾市内に２点あります（スライド94)。

金沢市大友Ｅ遺跡にも１点（スライド95）ありますが、縄文時代の独鈷石として本来とは違う形で報告されていました。しかし、見に行ったら赤色顔料がついていました。水銀朱なのかは判りませんが、赤色顔料を作る石器でしょう。

北陸地方では、報告書の中でＬ字形石杵があると書かれたのは、福井県林・藤島遺跡（スライド96）

だけなので、色々な視点で変な石器を見ることが、調査担当者は必要です。

21. 北陸地方の山陰系甑

次に山陰系甑と言われるものがあります。韓国人の学生が立命館大学在学中の論文ですが、韓国の西側に起源がある土製品が、山陰や北部九州や瀬戸内や近畿まで分布していると纏められました（スライド97左）。これは日本では山陰系甑と呼ばれる土製品です。山陰に特徴的な土製品と言われていますが、私も１・２本論文を書いていますが、この図では北陸は全部見落とされています。その中で、石川県内でも類例が増えたので新たに探してみました。旧富来町鹿頭上の出遺跡（スライド98上）が弥生時代後期後半で全国的にも一番古いのですが、ここで発祥する訳が無いので、山陰地方にも弥生時代後期後半のものがあると思いますが、山陰地方では終末期ぐらいから確認されています。八幡バケモンザカ遺跡（スライド98下）は変な取っ手があるので、これも山陰系甑と判断しました。昔に志賀町で採集された埴輪（スライド99右下）も山陰系甑でした。平成に合併した２町に５個体も出土しています。

加賀地方では、１例以外は小松市から出土しています。小松市は先ほどから出てくる八日市地方遺跡と白江梯川遺跡の周辺に多いことが判ります（スライド100）。

念仏林南遺跡の竪穴住居から山陰系甑が出土し、焼けた石も出ている。何か火を使う時に、これも使っていたようです。また、八里向山Ａ遺跡にも出土しています（スライド102）。ちょっと取っ手の位置が違う変わった形です。この竪穴住居には袋状鉄のみが出土しており、朝鮮半島産だろうと言われています。私は鉄器のことまるっきり判らないのですが山陰系と朝鮮半島系ということで、とにかく西からの影響があったことだけ、覚えておいてください。

22. 北陸地方の九州型石錘

スライド103は九州型石錘ですが、色々な形があり、分布は玄界灘に集中しています。これは長崎県の人達が集成された図です。今春の日本考古学協会総会では、高校生がもっと細かい分析をパネル展示していました。その中では、石錘は小地域で石材が違うことを纏められました。その時に石川県にも九州型石錘があることを思い出しました。色々な人の発表を聞くことで、聞いた人も色々な話ができるのだなと思っています。皆さんは図面より写真の方が判ると思いますが、形のバリエーションが沢山あります。石の中央に穴を持つもの（スライド104）がありますが、砲弾型（スライド103）が多く、石材は滑石のものもあるようです。

九州型石錘の分布（スライド104）は、玄界灘以外に、壱岐や対馬、松江、青谷上寺地遺跡にも出土しています。本来はここで出土は終わっていましたが、石川県でも赤い印の遺跡に出土しています。しかし、今週の木か金曜日に黒埼町史を見たら九州型石錘がありました。

スライド105･106は石川県内の九州型石錘ですが、２と４は同じ石材なので同じ所で作られた可能性もあります。１は色が違うのと４は滑石製で違います。能登の内陸部に出土した３や、富山県射水市、昔の大島町にも出土しています。その理由を考えますと、今は干拓で埋められた潟湖周辺にから出土しています。それ以外に、３は山中ではなくて、そこから山に上がる所でして、そこから氷見のほうに抜けるルートの一部でもあるのですけど、そんな所に石錘が出土しています。この遺跡で面白いのは、時期が判らないのですが、文様と調整がない土器に穴が空いたＡ・Ｂがあります。ひょっとしたら、穴に紐を縛ったタコ壺と思いました。つまり九州から来た人が九州型石錘とタコ壺で食料を獲っていたので、この遺跡に一緒に持ってきたのかなと思いますが証明は難しいです。ただし、これを１つのセットと見れば、九州の人が来て、実は富山の方か新潟の方に行きたかったので山越えをしようとしたが、やっぱりあきらめて置いていったのではないかという物語のようなことも思ったりもします。

スライド107は加賀地方の九州型石錘ですが、右下の205は土製品です。九州型石錘は石製ですが、小松市平面梯川遺跡では土製品を作っていますので、やっぱり九州型石錘を知っていたのだろうと思います。

スライド108は金沢市畝田・寺中遺跡の石錘群で、こういうセットがあります。横に溝が回るものを瀬戸内型石錘と、頭が瘤状になる中部型石錘が多いと言われています。それに九州型石錘と、右上の大きな石の中央に紐掛けの溝があるのは碇石です。これは漁業的な錘や船の碇にして、このようなセットで多分あったんだろうと思います。スライドの表題に「＋新潟県」としたのは新潟市緒立遺跡Ｂ地区に、古墳前期だと思われる九州型石錘が出土しています。

（スライド108左下）。だから最低でも九州の人か、山陰の人が緒立遺跡まで来ている可能性があります。それ以外に、長岡市五千石遺跡に変な石製品がありますが、九州型石錘はならないと思いつつ、今後気にかけなければいけない資料です。

23. 交流を支えた船

スライド109は準構造船の材であり、右側は丸太のくり抜いた船底板に、船縁をかさ上げするための舷側板です。こういう船が白江梯川遺跡でも出ています。

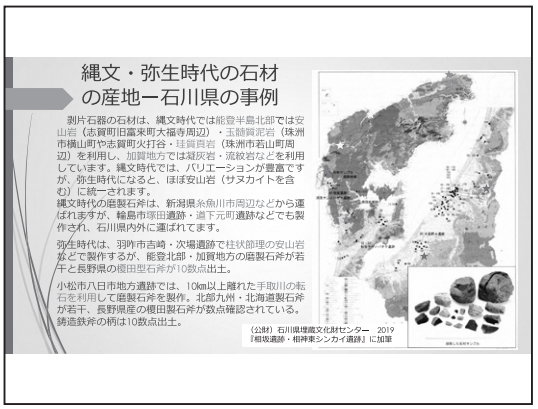
スライド110が最後ですが、このピンクで塗ってある場所が、山陰系甑や九州型石錘が出ている大体の場所です。赤丸印は、寄港地として良い場所であります。北前船の場合輪島や旧門前町黒島や能登町小木・宇出津など、いろいろな所がありますけど、基本的には日本海の西からの波がぶつかる所で出土しています。能登半島をたまに越えたものが上越市や柏崎市や緒立まで来ていた可能性があります。

スライド110左は準備造船の竪板（波よけの板）です、準構造船で日本海を越えて来たのでしょう。実は金沢市西念・南新保遺跡では口縁部に文様が書いた壺（スライド110左下）があります。左側は船を簡単にした文様と、三日月は荒波であり、いくつも描いてあります。この壺の文様は荒波の日本海側を越えてきた船というのを、描いているので、当然金沢市にも直接色々な地域の人が来ていると思います。その逆に、天王山式の人々は、船で沖に出てから風を使えば、富山湾に入り、能登半島に必ずぶつかります。この赤の逆の流れとして、新潟県や東北地方北部の人達が、日本海を船で色々な物を乗せて石川県を目指して上陸し、七尾から羽咋へ、富山から金沢へと陸路で来ていたと見ております。

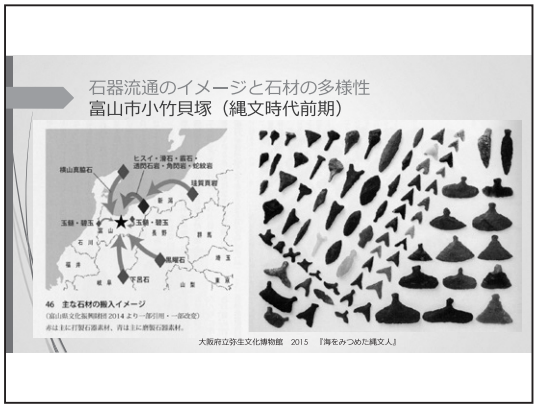
石川県へは、陸路ではなく海路を中心として、青谷上寺地遺跡や山陰地方をリレーしてかなりの人達が来ていると思います。丹後地方や若狭地方を越えて直接来ています。冒頭の渡邊所長の挨拶の話も踏まえて、下越の人達は、中越・上越を越えて直接富山・石川に来たので、お互いにいろいろ影響していたと思います。その結果は物が残らないと考古学では語れないのですが、その語る要素が色々あればもっと面白いのですが、現状としてはなかなかありません。逆に村上市山元遺跡での青銅器と鉄器の評価と、大武遺跡での木製品の評価を他地域の私達から投げかけて、地元の新潟県で色々考えもらえたら良いと思っております。

長かったですが、以上、私の講演は終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

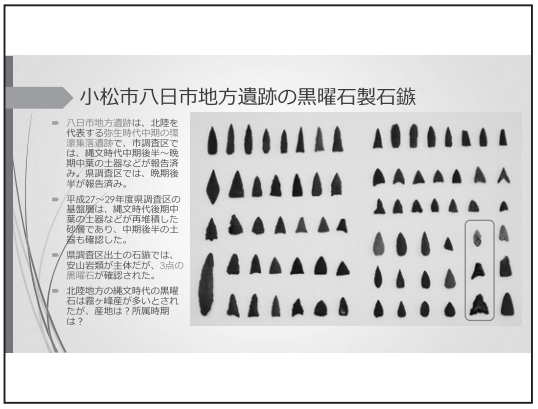
スライド 1



スライド 2



スライド 3

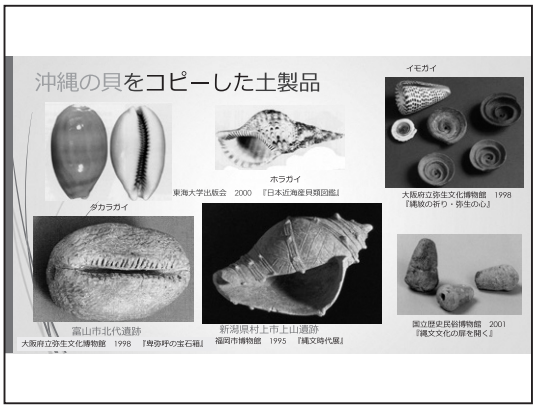


スライド 4

スライド 5

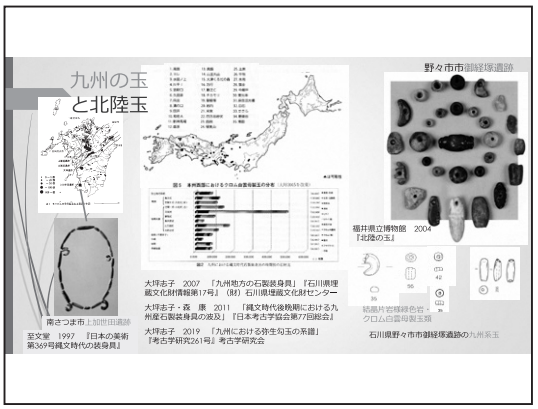
スライド 6

スライド 7

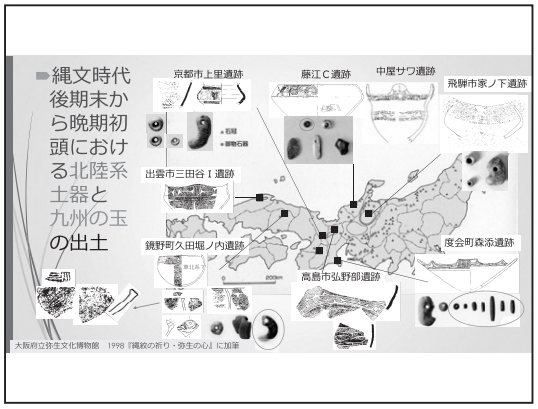


スライド 8

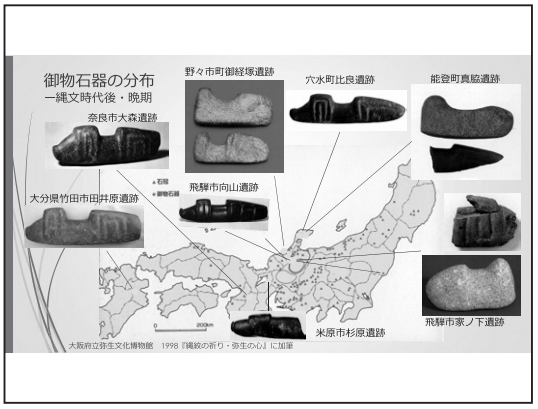
スライド 9



スライド10

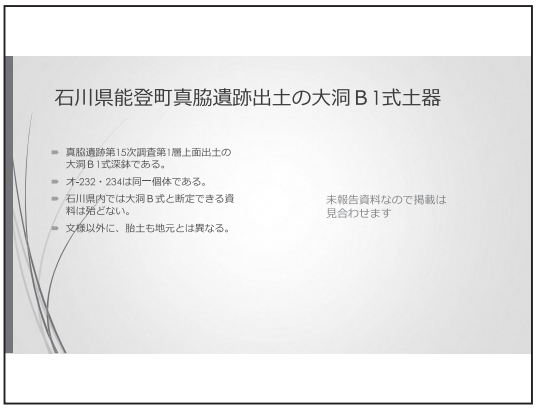


スライド11

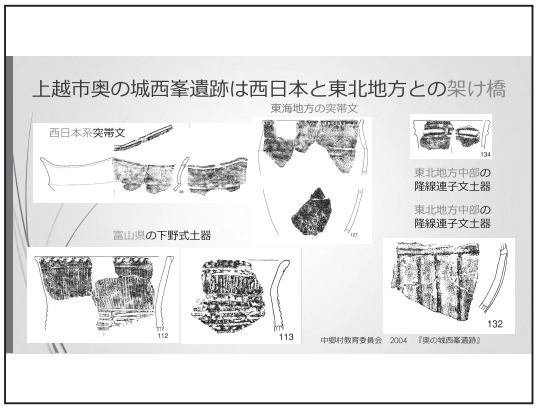


スライド12

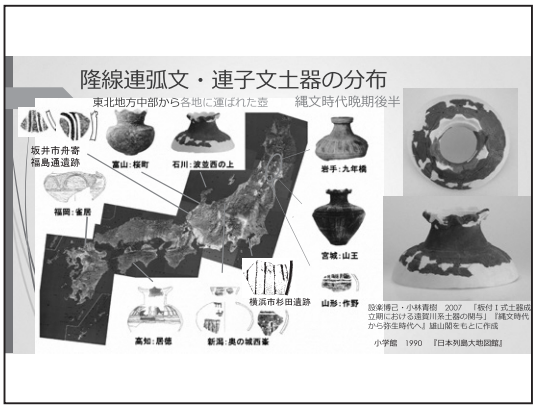
スライド13



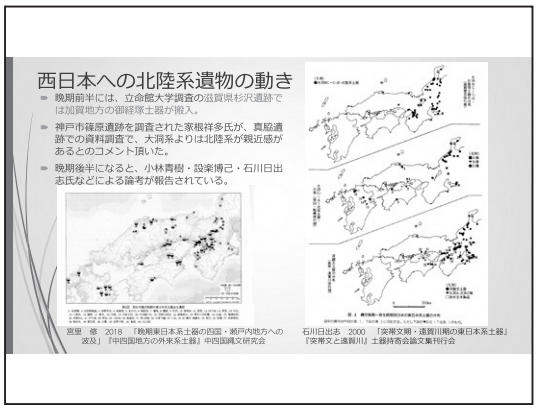
スライド14



スライド15

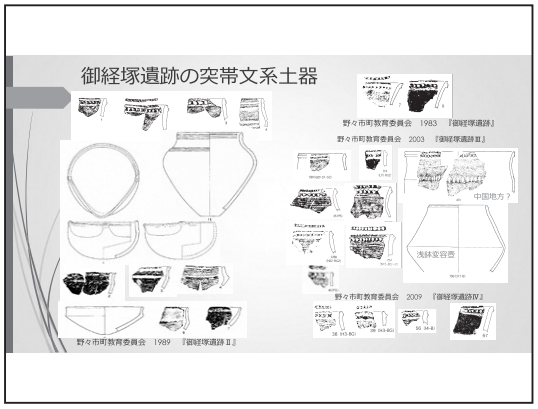


スライド16

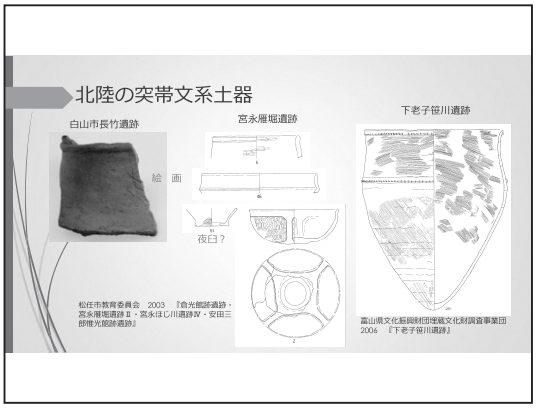


スライド17

スライド18

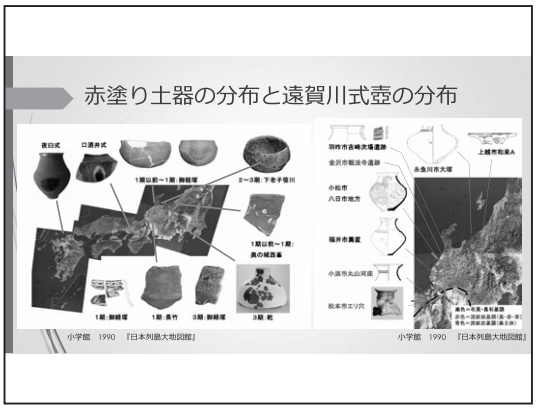


スライド19

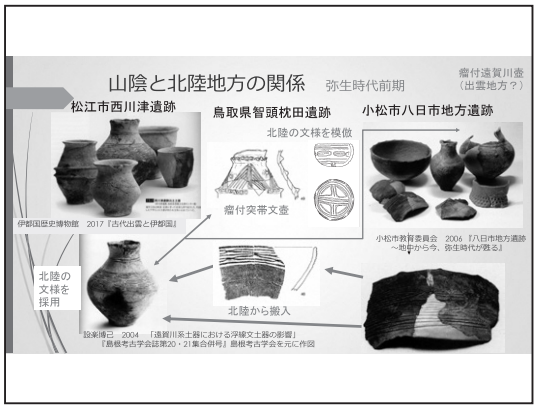


スライド20

スライド21

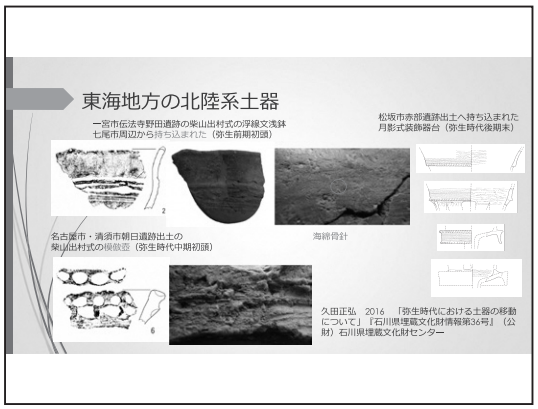


スライド22



スライド23

スライド24



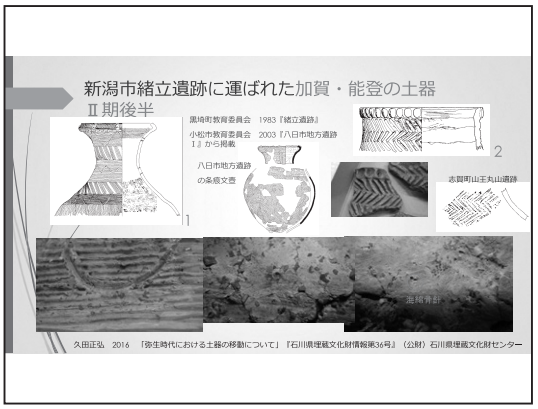
スライド25

スライド26

スライド27

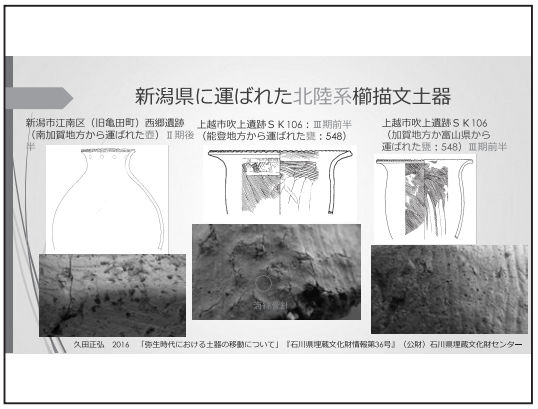
スライド28

スライド29

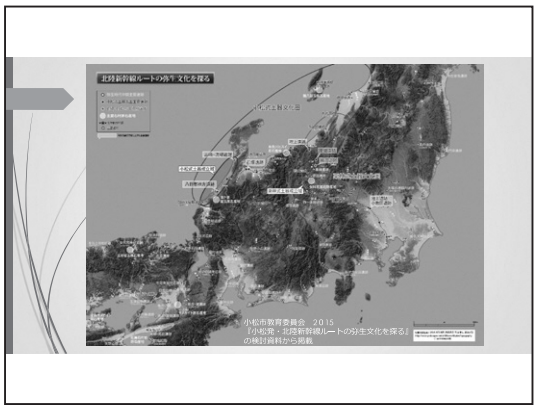


スライド30

スライド31

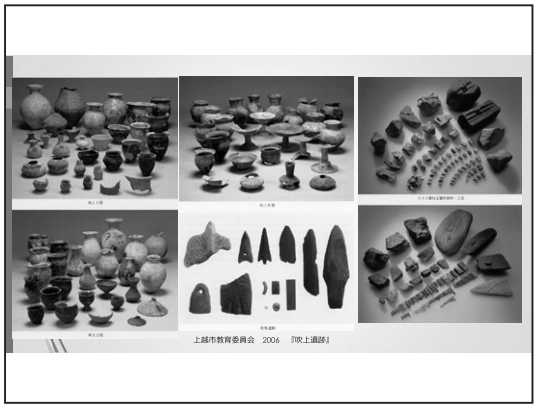


スライド32

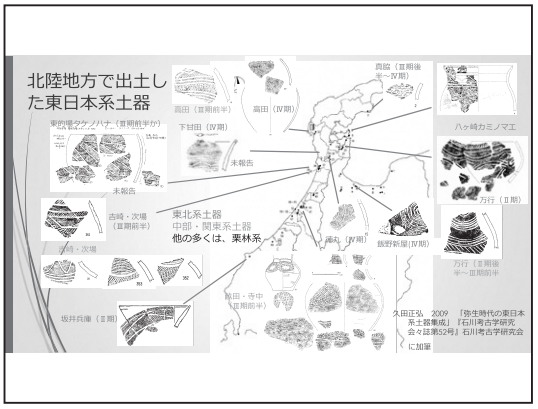


スライド33

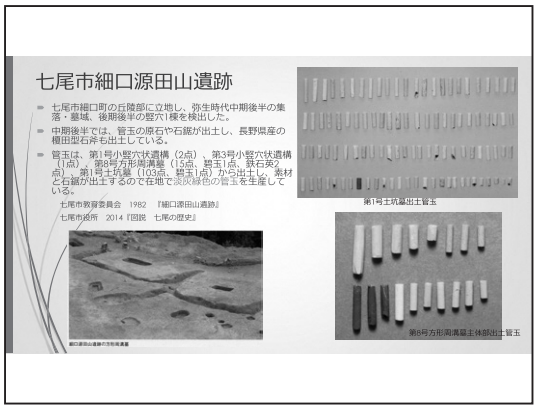
スライド34



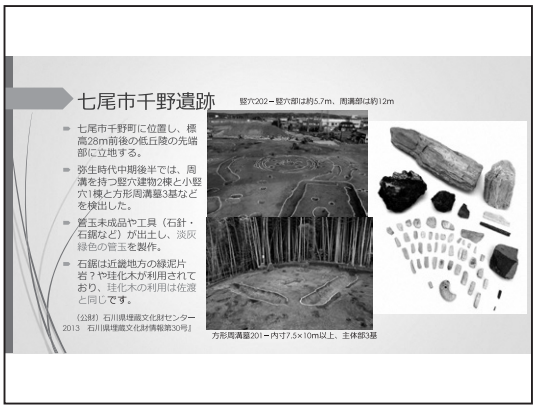
スライド35



スライド36



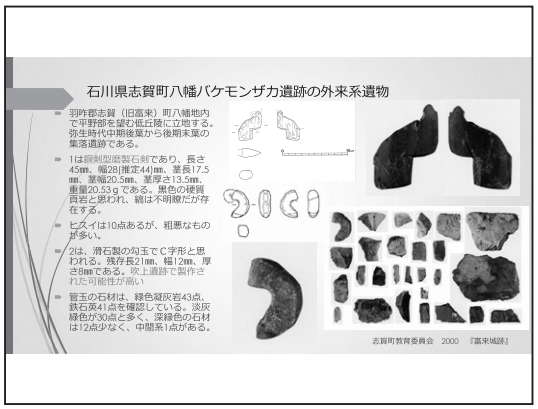
スライド37



スライド38

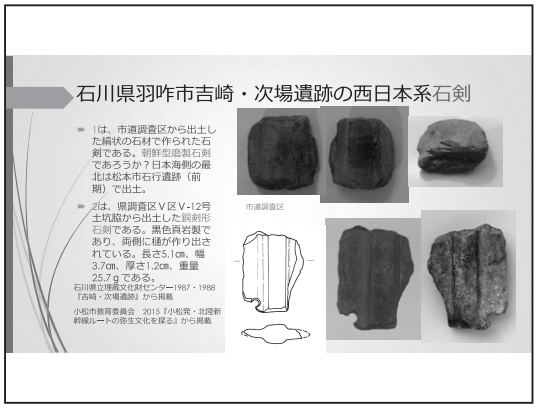
スライド39

スライド40



スライド41

スライド42

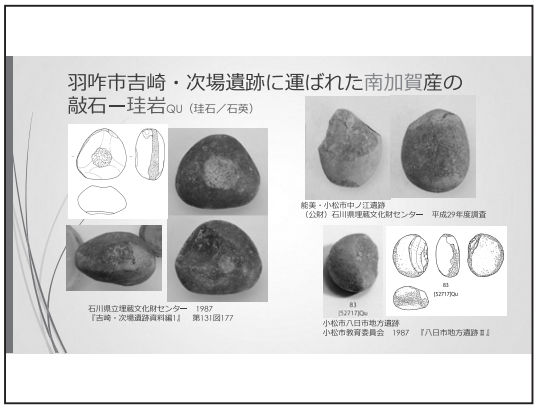


スライド43

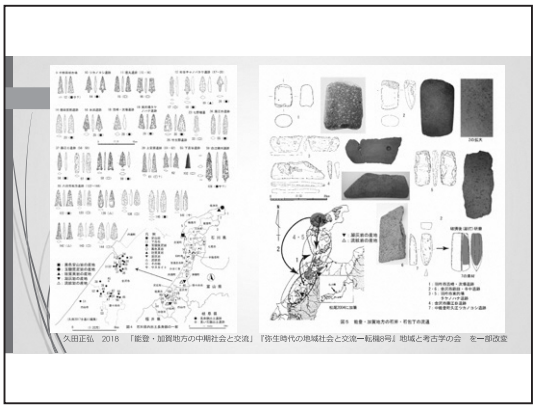
スライド44

スライド45

スライド46



スライド47

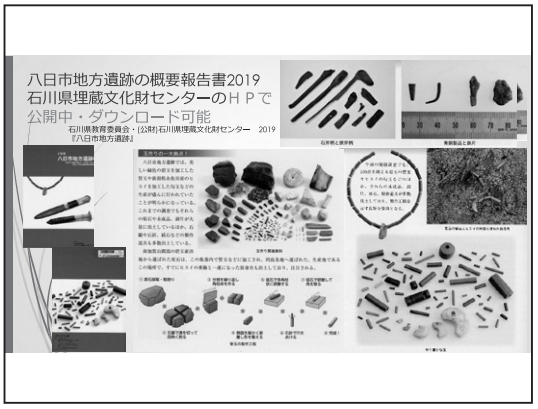


スライド48

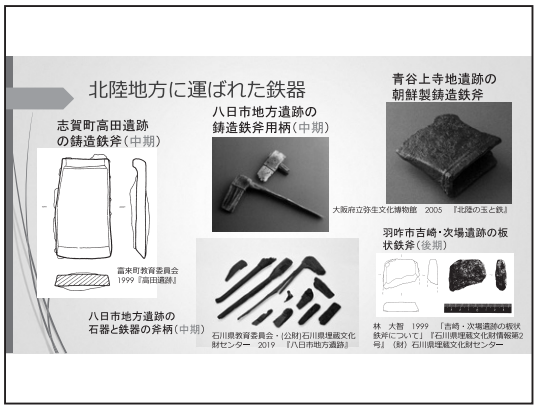
スライド49

スライド50

スライド51



スライド52

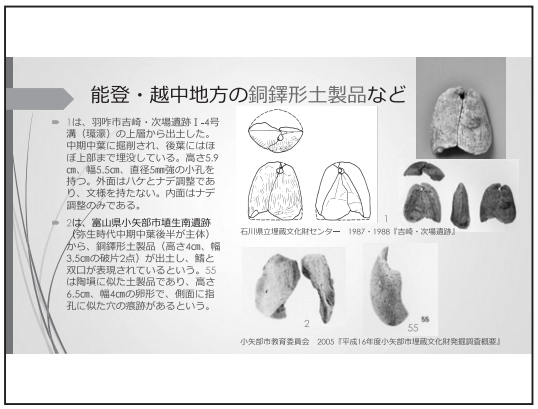


スライド53

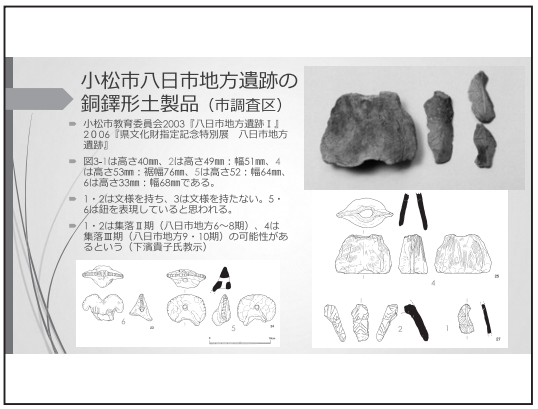
スライド54

スライド55

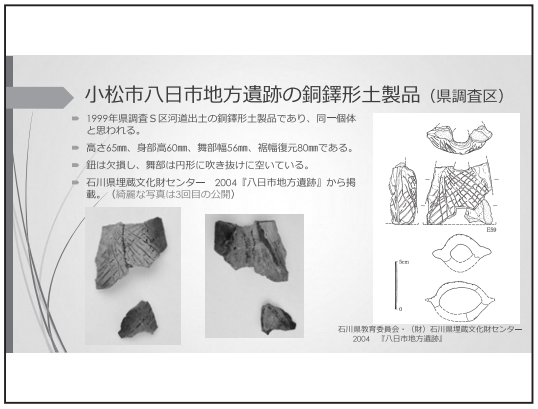
スライド56



スライド57

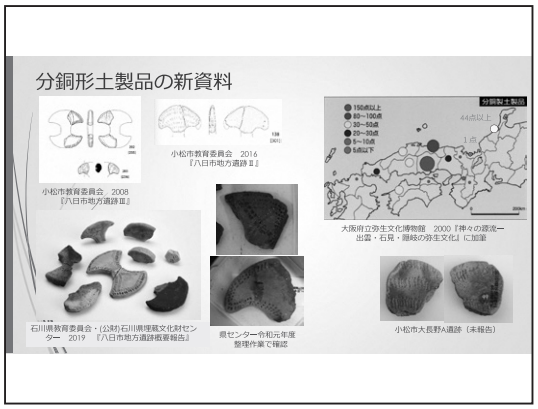


スライド58



スライド59

スライド60

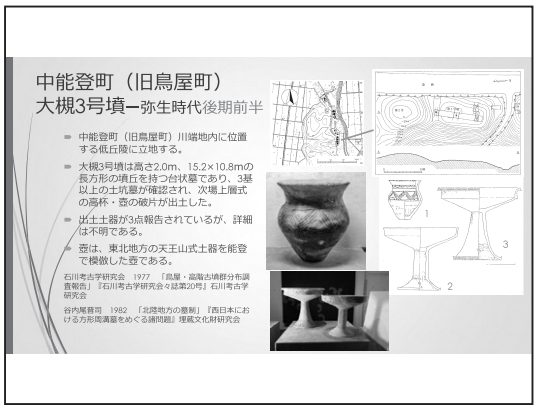


スライド61

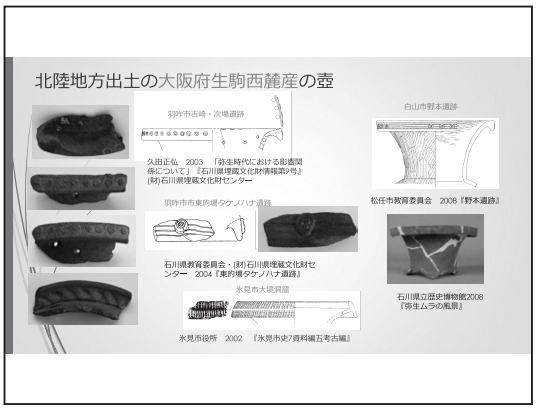
スライド62

スライド63

スライド64



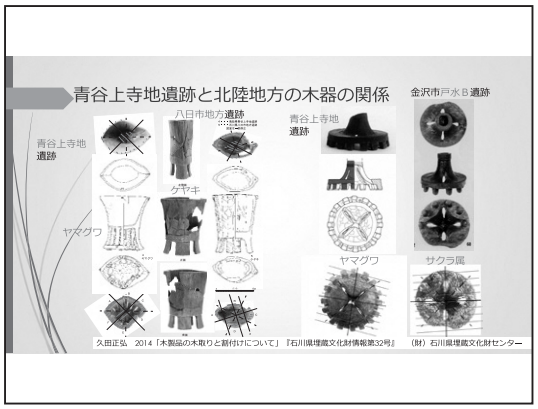
スライド65



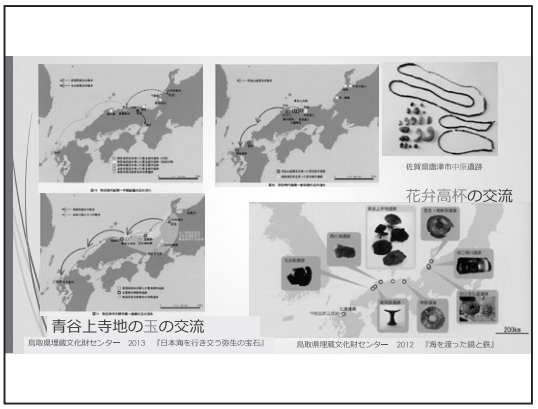
スライド66

スライド67

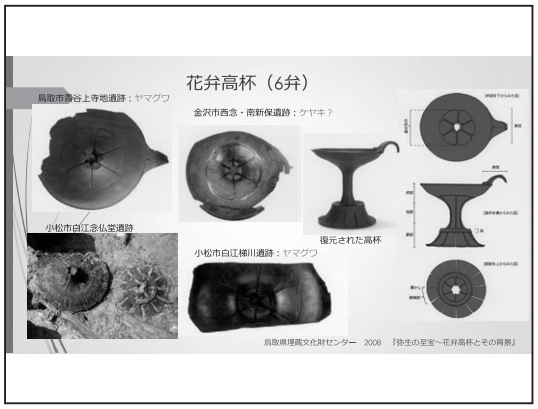
スライド68



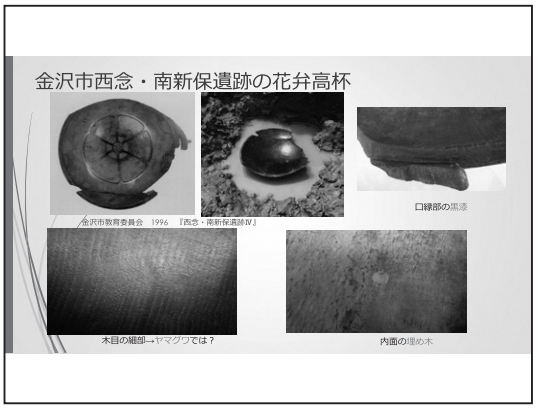
スライド69



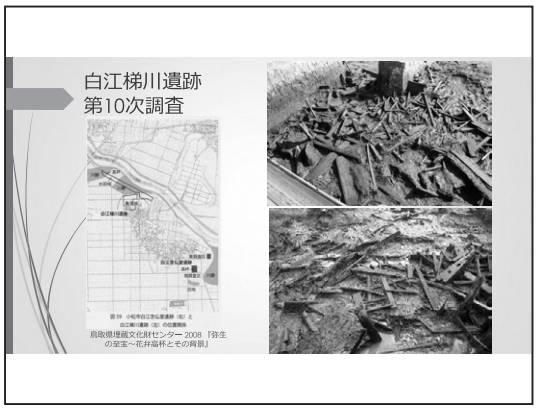
スライド70



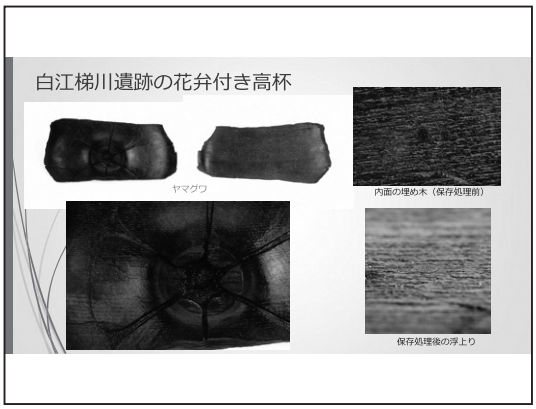
スライド71



スライド72



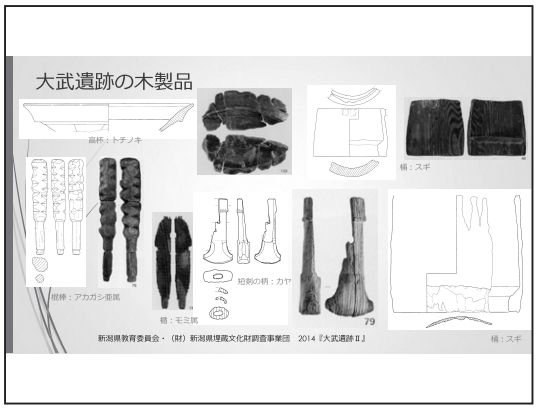
スライド73



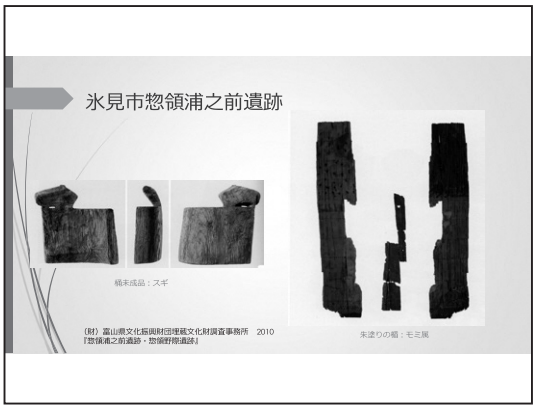
スライド74

スライド75

スライド76



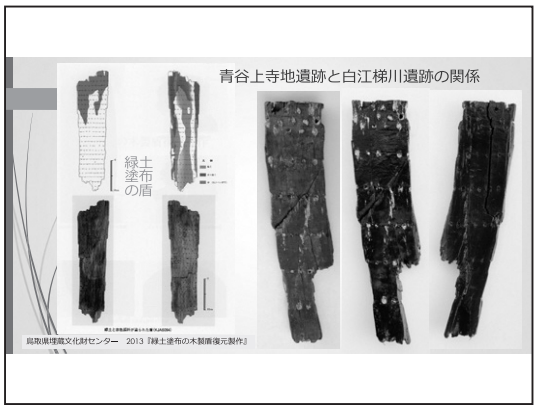
スライド77



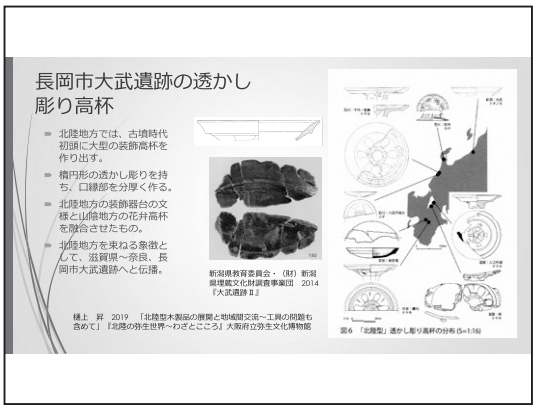
スライド78

スライド79

スライド80

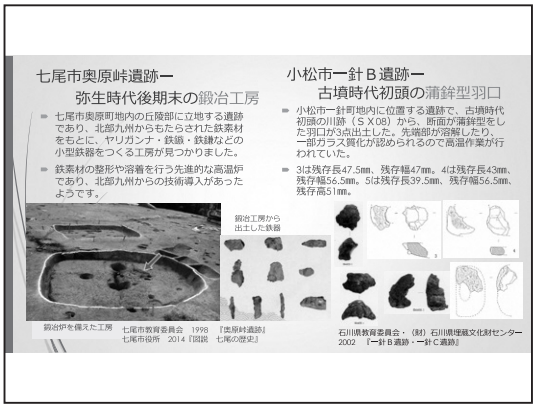


スライド81



スライド82

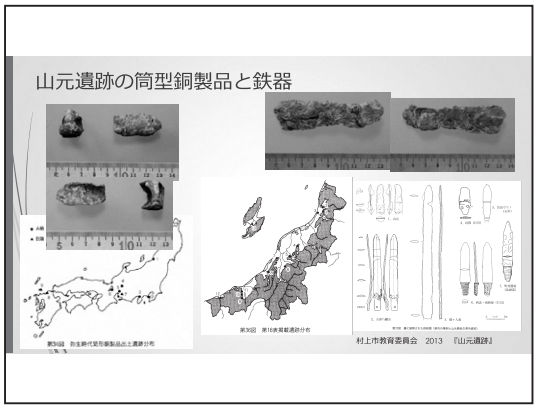
スライド83



スライド84

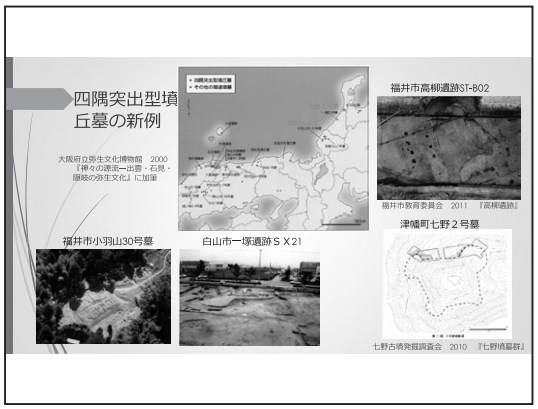
スライド85

スライド86

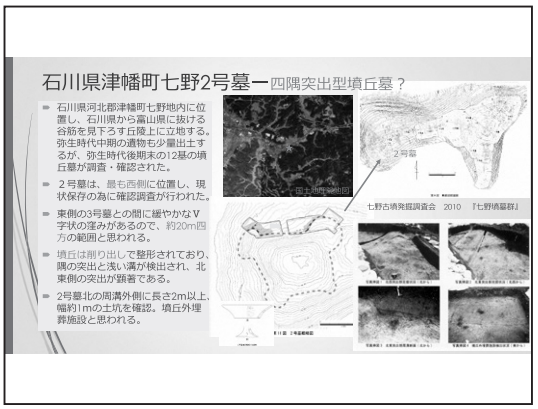


スライド87

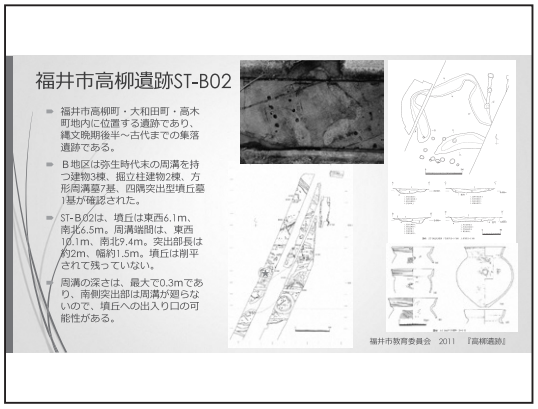
スライド88



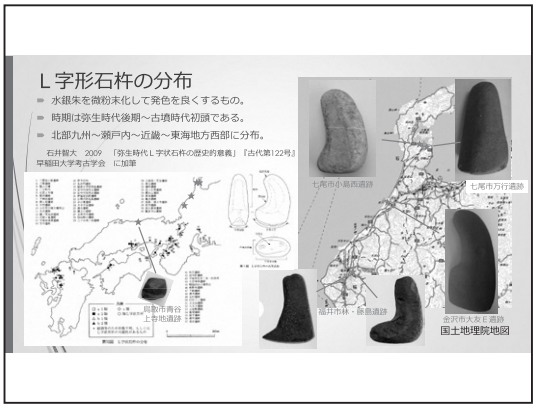
スライド89



スライド90

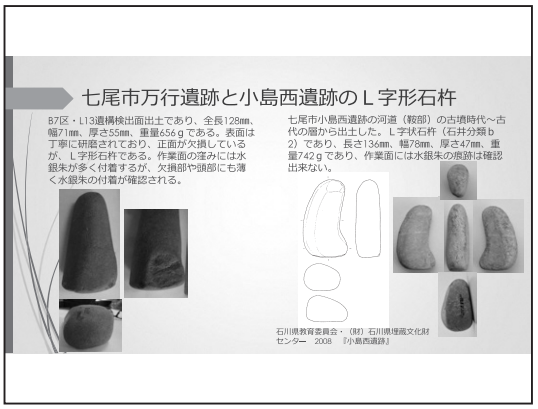


スライド91



スライド92

スライド93



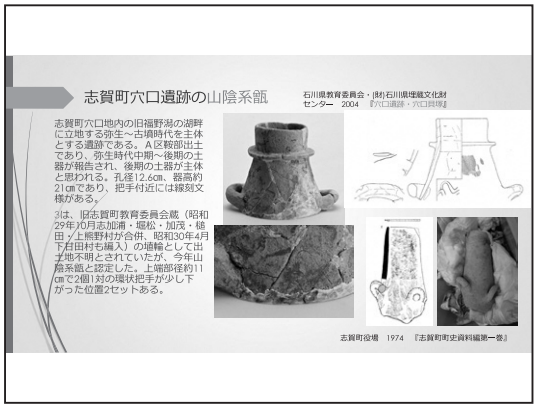
スライド94

スライド95

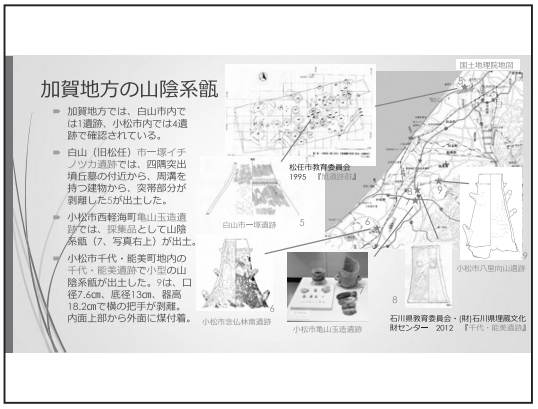
スライド96

スライド97

スライド98



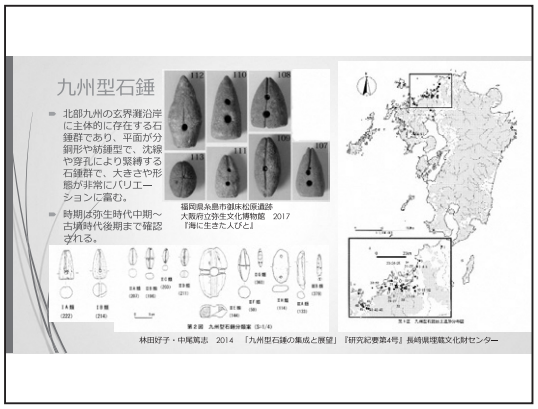
スライド99



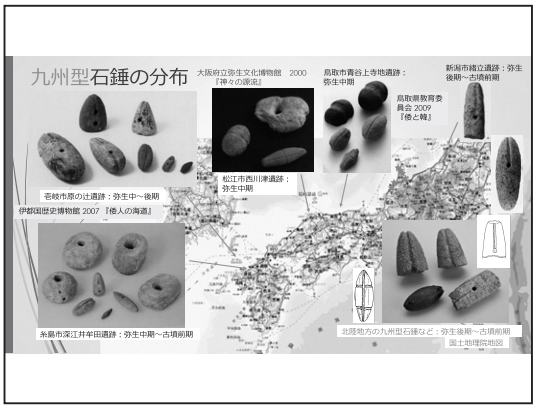
スライド100

スライド101

スライド102

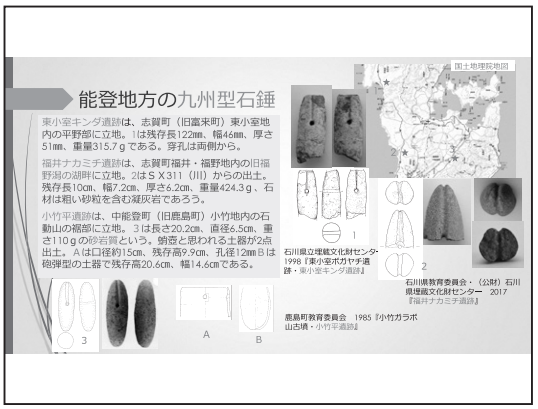


スライド103



スライド104

スライド105



スライド106

スライド107

スライド108

スライド109

スライド110

図・写真の出典

スライド２：石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2019『相坂遺跡・相神東シンカイ遺跡』に加筆
スライド３：大阪府立弥生文化博物館2015『海をみつめた縄文人』
スライド４：石川県埋蔵文化財センターの写真
スライド５：筆者撮影など
スライド６：能都町教育委員会1986『真脇遺跡』、国立歴史民俗博物館2001『縄文文化の扉を開く』に加筆
スライド７：国立歴史民俗博物館2000『北の島の縄文人』、福岡市博物館1995『縄文時代展』
スライド８：大阪府立弥生文化博物館1998『卑弥呼の宝石箱』『縄紋の祈り・弥生の心』、東海大学出版会2000『日本近海産貝類図鑑』、福岡市博物館1995『縄文時代展』、国立歴史民俗博物館2001『縄文文化の扉を開く』
スライド９：中四国縄文研究会2018『中四国地方の外来系土器』、和歌山市立博物館　2010『よみがえる和歌山の縄文世界』から掲載など
スライド10：至文堂1997『日本の美術　第369号縄文時代の装身具』、大坪志子2007 「九州地方の石製装身具」『石川県埋蔵文化財情報第17号』（財）石川県埋蔵文化財センター、大坪志子・森　康2011「縄文時代後晩期における九州産石製装身具の波及」『日本考古学協会第77回総会』、大坪志子2019「九州における弥生勾玉の系譜」『考古学研究261号』考古学研究会、福井県立博物館2004『北陸の玉』から掲載など
スライド11：大阪府立弥生文化博物館1998『縄紋の祈り・弥生の心』に加筆
スライド12：大阪府立弥生文化博物館1998『縄紋の祈り・弥生の心』に加筆など
スライド13：小矢部市教育委員会2007『桜町遺跡』、金沢市埋蔵文化財センター2010『中屋サワ遺跡
スライド15：中郷村教育委員会2004『奥の城西峯遺跡』から掲載
スライド16：小学館1990『日本列島大地図館』、設楽博己・小林青樹2007「板付Ⅰ式土器成立期における遠賀川系土器の関与」『縄文時代から弥生時代へ』雄山閣をもとに作成など
スライド17：宮里　修2018「晩期東日本系土器の四国・瀬戸内地方への波及」『中四国地方の外来系土器』中四国縄文研究会、石川日出志2000「突帯文期・遠賀川期の東日本系土器」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会から掲載
スライド18：小林青樹2000「東日本系土器からみた縄文・弥生広域交流序論」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
スライド19：野々市町教育委員会1983『御経塚遺跡』・1989『御経塚遺跡Ⅱ』・2003『御経塚遺跡Ⅲ』・2009『御経塚遺跡Ⅳ』から掲載
スライド20：松任市教育委員会2003『倉光館跡遺跡・宮永雁堀遺跡Ⅱ・宮永ほじ川遺跡Ⅳ・安田三郎惟光館跡遺跡』、富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事業団2006『下老子笹川遺跡』から掲載、左端写真は石川県埋蔵文化財センターで撮影
スライド21：野々市町2006『野々市町史　通史編』
スライド22：小学館1990『日本列島大地図館』を使用
スライド23：設楽博己2004「遠賀川系土器における浮線文土器の影響」『島根考古学会誌第20・21集合併号』島根考古学会を元に作図、伊都国歴史博物館2017『古代出雲と伊都国』、小松市教育委員会2006『八日市地方遺跡～地中から今、弥生時代が甦る』
スライド24：大阪府立弥生文化博物館2013『弥生人の船』、石川県立郷土資料館1978『舳倉島シラスナ遺跡』、輪島市教育委員会1985『舳倉島・七ツ島（大島）』から掲載
スライド25：久田正弘2016「弥生時代における土器の移動について」『石川県埋蔵文化財情報第36号』（公財）石川県埋蔵文化財センターから掲載
スライド26：小学館1990『日本列島大地図館』を使用
スライド27：佐藤由紀男・宮田　明2018「石川県小松市八日市地方遺跡出土の層灰岩製片刃石斧と三面石斧をめぐって」『考古学研究259号』考古学研究会から掲載
スライド28：七尾市教育委員会1985『七尾市赤浦遺跡』、石川県歴史博物館2008『弥生ムラの風景』から掲載
スライド29：石川県歴史博物館2008『弥生ムラの風景』、伊都国歴史博物館2017『古代出雲と伊都国』から掲載、他は筆者撮影など
スライド30：久田正弘2016「弥生時代における土器の移動について」『石川県埋蔵文化財情報第36号』（公財）石川県埋蔵文化財センターから作成
スライド31：黒埼町1998『黒埼町史資料編１　原始・古代・中世』から掲載
スライド32：久田正弘2016「弥生時代における土器の移動について」『石川県埋蔵文化財情報第36号』（公財）石川県埋蔵文化財センターから作成
スライド33：小松市教育委員会2015『小松発・北陸新幹線ルートの弥生文化を探る』の検討資料から掲載
スライド34・35：上越市教育委員会2006『吹上遺跡』から掲載
スライド36：久田正弘2009「弥生時代の東日本系土器集成」『石川考古学研究会々誌第52号』石川考古学研究会に加筆
スライド37：七尾市教育委員会1982『細口源田山遺跡』、七尾市役所2014『図説　七尾の歴史』から掲載
スライド38：（公財）石川県埋蔵文化財センター2013『石川県埋蔵文化財情報第30号』から掲載など
スライド39：富来町教育委員会1994『山王丸山遺跡』・1999『高田遺跡』・　2000『富来城跡』、佐渡市教育委員会2017『蔵王遺跡・小谷地遺跡・平田遺跡』、上越市教育委員会2006『吹上遺跡』から掲載など
スライド40：志賀町教育委員会1994『山王丸山遺跡』から掲載
スライド41：志賀町教育委員会2000『富来城跡』から掲載
スライド42：石川県立埋蔵文化財センター1987・1988『吉崎・次場遺跡』、羽咋市教育委員会2000『吉崎・次場遺跡第17次』、小松市教育委員会2015『小松発・北陸新幹線ルートの弥生文化を探る』から掲載
スライド43：石川県立埋蔵文化財センター1987・1988『吉崎・次場遺跡』、小松市教育委員会2015『小松発・北陸新幹線ルートの弥生文化を探る』から掲載、上段は筆者撮影
スライド44：石川県立埋蔵文化財センター1988『吉崎・次場遺跡』から掲載、右側は石川県埋蔵文化財センターの写真
スライド45：林大智2009「北陸における弥生時代の生産と流通」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究会刊行委員会を元に作成、写真は石川県埋蔵文化財センターで撮影
スライド46：林大智2009「北陸における弥生時代の生産と流通」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究会刊行委員会を元に作成、写真は石川県埋蔵文化財センターで撮影と筆者撮影
スライド47：石川県立埋蔵文化財センター1987『吉崎・次場遺跡資料編１』、小松市教育委員会1987『八日市地方遺跡Ⅱ』から掲載、カラー写真は石川県埋蔵文化財センターで撮影
スライド48：久田正弘2018「能登・加賀地方の中期社会と交流」『弥生時代の地域社会と交流ー転機８号』地域と考古学の会を一部改変
スライド49：左端の写真は小松市教育委員会　2006『八日市地方遺跡～地中から今、弥生時代が甦る』から掲載、他は石川県埋蔵文化財センターで撮影
スライド50：大阪府立弥生文化博物館2005『北陸の玉と鉄』、愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター・愛知県陶磁資料館2006『発掘されたムラと宝　いにしえの暮らしと技を探る』から掲載
スライド51：石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2019『八日市地方遺跡』から掲載、石川県埋蔵文化財センターの写真
スライド52：石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2019『八日市地方遺跡』から掲載
スライド53：大阪府立弥生文化博物館2005『北陸の玉と鉄』、富来町教育委員会1999『高田遺跡』、石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2019『八日市地方遺跡』、林　大智1999「吉崎・次場遺跡の板状鉄斧について」『石川県埋蔵文化財情報第２号』（財）石川県埋蔵文化財センターから掲載
スライド54：石川県埋蔵文化財センターの写真
スライド55：大阪府立弥生文化博物館　2000『神々の源流ー出雲・石見・隠岐の弥生文化』、鳥取県埋蔵文化財センター2006『稲作とくらし』、石川県立歴史博物館2008『弥生ムラの風景』から掲載
スライド56：林　大智・河合　忍1999「弥生時代中期の複合口縁壺について」『石川県埋蔵文化財情報第２号』（財）石川県埋蔵文化財センター、石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2009『三木Ａ遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター1985『北安江遺跡』、新潟県立歴史博物館2013『弥生時代のにいがた　時代がかわるとき』から掲載

スライド57：石川県立埋蔵文化財センター1987・1988『吉崎・次場遺跡』、小矢部市教育委員会2005『平成16年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概要』から掲載
スライド58：小松市教育委員会2003『八日市地方遺跡Ⅰ』・2006『県文化財指定記念特別展　八日市地方遺跡』から掲載
スライド59：石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2004『八日市地方遺跡』から掲載、写真は石川県埋蔵文化財センターで撮影
スライド60：久田正弘2006「北陸地方の絵画資料」『原始絵画の研究　論考編』六一書房から掲載
スライド61：小松市教育委員会2008『八日市地方遺跡Ⅲ』・2016『八日市地方遺跡Ⅱ』、石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2019『八日市地方遺跡概要報告』から掲載、大阪府立弥生文化博物館2000『神々の源流ー出雲・石見・隠岐の弥生文化』に加筆
スライド62：石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2004『戸水Ｂ遺跡（10・12・13次）』、大阪府立弥生文化博物館1998『卑弥呼の宝石箱』・2001『弥生クロスロードー再考・信濃の農耕社会』から掲載
スライド63：大阪府立弥生文化博物館2001『弥生クロスロードー再考・信濃の農耕社会』、久田正弘2018「能登・加賀地方の中期社会と交流」『弥生時代の地域社会と交流ー転機８号』地域と考古学の会から掲載
スライド64：久田正弘2009「弥生時代の東日本系土器集成」『石川考古学研究会々誌第52号』石川考古学研究会に加筆、石川県立埋蔵文化財センター1998『中相川遺跡』、富山県文化振興財団埋
蔵文化財調査事務所2006『下老子笹川遺跡』、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2008『持明寺遺跡』、（公財）石川県埋蔵文化財センター2019『石川県埋蔵文化財情報第41号』から掲載
スライド65：石川考古学研究会1977「鳥屋・高階古墳群分布調査報告」『石川考古学研究会々誌第20号』石川考古学研究会、谷内尾晋司1982「北陸地方の墓制」『西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会から掲載
スライド66：久田正弘2003「弥生時代における影響関係について」『石川県埋蔵文化財情報第９号』（財）石川県埋蔵文化財センター、石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター　2004『東的場タケノハナ遺跡』、松任市教育委員会2008『野本遺跡』、石川県立歴史博物館2008『弥生ムラの風景』、氷見市役所2002『氷見市史７資料編五考古編』から掲載
スライド67：大阪府立弥生文化博物館2005『北陸の玉と鉄』、石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002『一針Ｂ遺跡・一針Ｃ遺跡』から掲載など
スライド68：左端の写真は羽咋市教育委員会提供、石川県立歴史博物館2008『弥生ムラの風景』、石川県立埋蔵文化財センター1987・1988『吉崎・次場遺跡』、林　大智2000「羽咋市吉崎・次場遺跡出土の土製鋳型外枠について」『石川県埋蔵文化財情報第３号』石川県埋蔵文化財センター、あわら市教育委員会2007『南稲越遺跡』から掲載
スライド69：久田正弘2014「木製品の木取りと割付けについて」『石川県埋蔵文化財情報第32号』（財）石川県埋蔵文化財センターを元に作成
スライド70：鳥取県埋蔵文化財センター2012『海を渡った鏡と鉄』・2013『日本海を行き交う弥生の宝石』から掲載
スライド71：鳥取県埋蔵文化財センター2008『弥生の至宝～花弁高杯とその背景』から掲載
スライド72：金沢市教育委員会1996『西念・南新保遺跡Ⅳ』から掲載と筆者撮影
スライド73：鳥取県埋蔵文化財センター2008『弥生の至宝～花弁高杯とその背景』から掲載と石川県埋蔵文化財センターの写真
スライド74：石川県埋蔵文化財センターの写真
スライド75：鳥取県埋蔵文化財センター2005『木製容器・かご』から掲載と石川県埋蔵文化財センターの写真
スライド76：鳥取県埋蔵文化財センター2006『稲作とくらしー鳥取県の考古学第２巻』、福井県教育庁埋蔵文化財センター2001『第16回福井県発掘調査報告会ー平成12年度に発掘された遺跡』から掲載
スライド77：新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団2014『大武遺跡Ⅱ』から掲載
スライド78：（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2010『惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡』から掲載
スライド79：鳥取県埋蔵文化財センター2005『木製容器・かご』、新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団2014『大武遺跡Ⅱ』、上越市教育委員会2008『釜蓋遺跡範囲確認調査報告書』から掲載、石川県埋蔵文化財センターの写真
スライド80：島根県教育委員会2009『倭と韓』、大阪府立弥生文化博物館2007『稲作とともに伝わった武器』、新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団2014『大武遺跡Ⅱ』から掲載、石川県埋蔵文化財センターの写真
スライド81：鳥取県埋蔵文化財センター2013『緑土塗布の木製盾復元製作』から掲載、石川県埋蔵文化財センターの写真
スライド82：石川県埋蔵文化財センターの写真
スライド83：樋上　昇2019「北陸型木製品の展開と地域間交流～工具の問題も含めて」『北陸の弥生世界～わざとこころ』大阪府立弥生文化博物館、新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団2014『大武遺跡Ⅱ』から掲載
スライド84：石川県立埋蔵文化財センター1982『漆町遺跡』から掲載、長者ヶ原考古館の展示
スライド85：七尾市教育委員会1998『奥原峠遺跡』、七尾市役所2014『図説七尾の歴史』、石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002『一針Ｂ遺跡・一針Ｃ遺跡』から掲載
スライド86～89：村上市教育委員会2013『山元遺跡』から掲載
スライド89：下側は富山市教育委員会2006『向野池遺跡』から掲載
スライド90：大阪府立弥生文化博物館2000『神々の源流ー出雲・石見・隠岐の弥生文化』に加筆、福井市教育委員会2011『高柳遺跡』、七野古墳発掘調査会2010『七野墳墓群』から掲載
スライド91：七野古墳発掘調査会2010『七野墳墓群』から掲載
スライド92：福井市教育委員会2011『高柳遺跡』から掲載
スライド93：石井智大2009「弥生時代Ｌ字状石杵の歴史的意義」『古代第122号』早稲田大学考古学会に加筆
スライド94：中屋克彦2011「万行遺跡と謎の巨大建物」『図説能登の歴史』郷土出版社、七尾市役所2014『図説七尾の歴史』から掲載
スライド95：左側は筆者撮影、石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2008『小島西遺跡』から掲載と石川県埋蔵文化財センターの写真
スライド96：金沢市埋蔵文化財センター2016『大友Ｅ遺跡』から掲載と筆者撮影
スライド97：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2009『林・藤島遺跡泉田地区』から撮影
スライド98：崔　榮柱2010「三国・古墳時代における土製煙筒研究」『立命館大学考古学論集Ⅴ』に加筆、伊都国歴史館2017『古代出雲と伊都国』から掲載
スライド99：富来町教育委員会1989『鹿頭上の出遺跡』・2000『富来城跡』から掲載
スライド100：石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2004『穴口遺跡・穴口貝塚』、志賀町役場1974『志賀町町史資料編第一巻』から掲載
スライド101：松任市教育委員会1995『旭遺跡群』、石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2012『千代・能美遺跡』などから掲載、写真は小松市教育委員会提供
スライド102：小松市教育委員会1994『念仏林南遺跡Ⅰ』から掲載
スライド103：小松市教育委員会2004『八里向山遺跡群』から掲載
スライド104：大阪府立弥生文化博物館2017『海に生きた人びと』、林田好子・中尾篤志2014「九州型石錘の集成と展望」『研究紀要第４号』長崎県埋蔵文化財センターから掲載
スライド105：伊都国歴史博物館2007『倭人の海道』、大阪府立弥生文化博物館2000『神々の源流』、鳥取県教育委員会2009『倭と韓』などから掲載
スライド106：石川県埋蔵文化財センターの写真、久々忠義1992「大島町荒畑遺跡の九州型石錘」『大境第14号』富山考古学会などから掲載
スライド107：石川県立埋蔵文化財センター1998『東小室ボガヤチ遺跡・東小室キンダ遺跡』、石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2017『福井ナカミチ遺跡』、鹿島町教育委員会1985『小竹ガラボ山古墳・小竹平遺跡』から掲載
スライド108：石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2006『畝田西遺跡群Ⅲ』、財）石川県埋蔵文化財センター2000『平面梯川遺跡-第２・３次』から掲載、カラー写真は石川県埋蔵文化財センターの写真
スライド109：石川県埋蔵文化財センターの写真、黒埼町1998『黒埼町史資料編１　原始・古代・中世』、長岡市教育委員会2011『五千石遺跡』から掲載

スライド110：大阪府立弥生文化博物館2013『弥生人の船　モンゴロイドの海洋世界』、新潟県立歴史博物館2013『弥生時代のにいがた　時代がかわるとき』

第２章　企画展の概要と企画展関連講演会アンケート結果

令和元年度は史跡古津八幡山　弥生の丘展示館で企画展を３回催した。また、企画展の期間中に、外部から講師をお招きするなどし、関連講演会（第１章に収録）を実施したほか、市文化財センター企画展担当職員による展示解説を行った。

なお、各講演会では参加者を対象にアンケートを実施した。

以下では、企画展及び関連講演会の概要と、関連講演会のアンケート結果について記す。

（１）令和元年度「史跡古津八幡山　弥生の丘展示館」企画展の概要

（Ａ）企画展

企画展１　「古津八幡山遺跡発掘調査速報展」

開催期間　令和元年４月23日（火）～６月２日（日）

会　　場　史跡古津八幡山　弥生の丘展示館

概　　要　史跡古津八幡山遺跡では、史跡をより適切に保存･活用していくために、史跡内外における遺跡の状況把握を目的とした確認調査を行っている。

平成29・30年度は、標高約50ｍの遺跡の最高所から一段下がった、標高約25ｍの史跡指定地外において発掘調査を行い、古津八幡山遺跡で初となる掘立柱建物や、最大の竪穴住居が見つかるなど大きな発見があった。

本企画展では、平成29・30年度に実施した発掘調査の成果について、写真やイラストなどとともに展示・解説を行った。

展示解説　令和元年４月28日（日）
13：30～　市文化財センター職員

企画展２　「弥生時代から古墳時代の大形建物ー古津八幡山遺跡の大形竪穴住居と掘立柱建物を考えるー」

開催期間　令和元年６月11日（火）～10月27日（日）

会　　場　史跡古津八幡山　弥生の丘展示館

概　　要　古津八幡山遺跡では、平成29・30年度の発掘調査において、本遺跡で初となる掘立柱建物や、最大の竪穴住居が見つかるなど大きな発見があった。これらは、弥生時代から古墳時代へと移りかわっていく当時の社会情勢の一端を示していると考えられる。

本企画展では、これまでの調査で明らかとなった古津八幡山遺跡における建物の構造や変遷などを確認し比較するとともに、他遺跡や他地域の動向も踏まえながら、それら大形竪穴住居と掘立柱建物が出現した背景について探った。

展示解説　令和元年８月11日（日）、10月20日（日）
13：30～　市文化財センター職員

企画展３　「邪馬台国の時代７　弥生時代後期の北越と北陸・長野との交流ー北陸・長野の天王山式土器ー」

開催期間　令和元年11月６日（水）～令和２年３月29日（日）

会　　場　史跡古津八幡山　弥生の丘展示館

概　　要　東北南部や阿賀北（新潟県の阿賀野川以北）で作られた天王山式土器やその直前の土器が、北陸の富山・石川・福井や長野県北部（長野市周辺や松本市など）で出土する。弥生時代後期初め（紀元１世紀）頃の事である。

この頃、東北南部や阿賀北の人々が、何かを求めて、北陸や長野県北部へ行ったのではないかと思われる。

北陸へは日本海の海岸沿いに、長野北部へは、信濃川を遡って地域間交流があったと考えられる。その謎に迫った。

展示解説　令和元年11月10日（日）、12月８日（日）
13：30～　市文化財センター職員

（Ｂ）企画展関連講演会

企画展２関連講演会（第１回）

演　　題　北陸における弥生時代後期から古墳時代前期の大型建物とその背景―新潟県を中心に―

演　　者　滝沢　規朗　氏（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長）

日　　時　令和元年９月１日（日）13：30～15：30

会　　場　市文化財センター研修室

人　　数　45名

企画展３関連講演会（第２回）

演　　題　弥生時代における北陸西部と下越地方の交流

演　　者　久田　正弘　氏（石川県埋蔵文化財セン

ター　調査部　県関係調査グループ　グループリーダー）

日　　時　令和元年11月17日（日）　13：30～15：30

会　　場　市文化財センター研修室

人　　数　51名

（C）フォトコンテスト展

開催期間　令和元年４月23日（火）～令和２年３月29日（日）

会　　場　史跡古津八幡山　弥生の丘展示館

概　　要　平成28年から古津八幡山遺跡フォトコンテストを開催している。作品の募集では、複数のコンテスト情報サイトなどに取り上げられ、遺跡の広報にも一役買った。また、市内を中心に多数の応募があり、写真撮影や作品展により、遺跡の利用者増に寄与している。なお、第３回目となる今回は、利用の比較的少ない中・高校生も含めたさらなる利用者増を目指す目的で、新たに学生の部を設けた。今回のフォトコンテスト展では、第３回目でいったん企画を中止するため、第１回目から３回目までの合計16作品の入賞作品を展示した。（53～55頁）

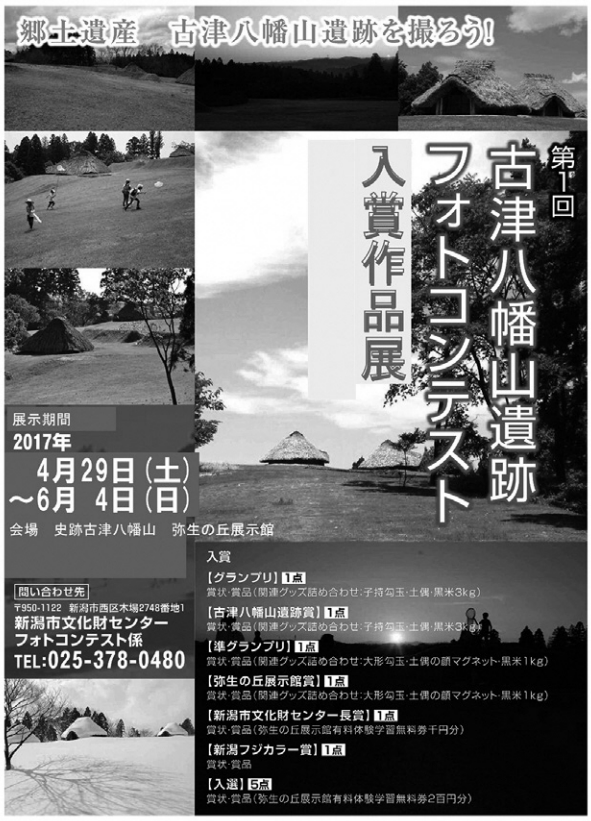
企画展２　チラシ

企画展１　チラシ

企画展３　チラシ

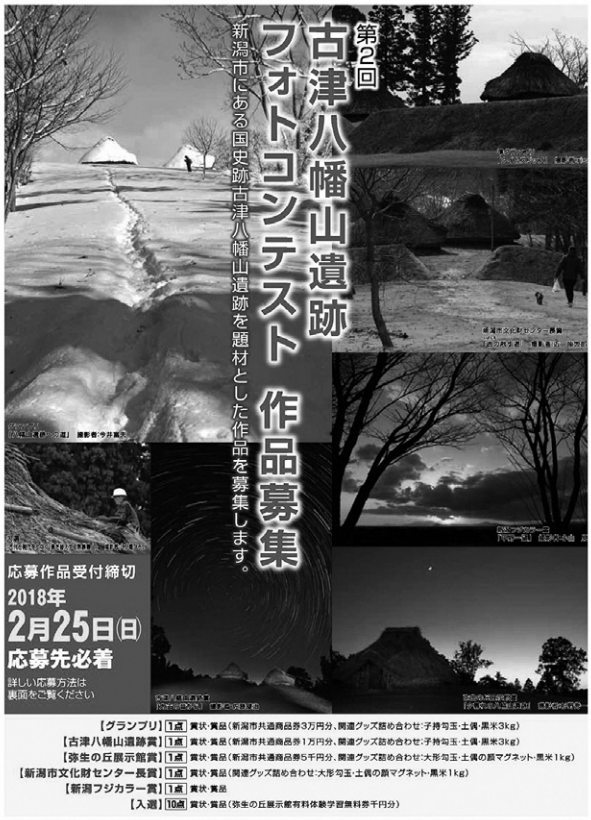
主催／新潟市文化財センター　協賛／株式会社新潟フジカラー

第１回　フォトコンテスト　作品募集チラシ



主催／新潟市文化財センター　協賛／株式会社新潟フジカラー

第１回　フォトコンテスト　入賞作品展　チラシ



主催／新潟市文化財センター　協賛／株式会社新潟フジカラー

第２回　フォトコンテスト　作品募集チラシ

第３回　フォトコンテスト　作品募集チラシ

（2）企画展関連講演会アンケート結果

アンケートは各講演会ごとに実施した(52頁)。2回分の講演会のアンケート結果を合計した表・グラフは51頁に掲載した。

年齢　講演会参加者の年齢構成は、70代が最も多く、次いで60代、50代、80代以上と続く。これまでの年齢構成とおおむね同じであり、昨年度と同様に20代の参加は見られたものの、20代未満の参加者は見られなかった。次世代を担う若年層にも分かりやすい企画を考えていく必要がある。

住まい　参加者の居住エリアは、昨年度に引き続き市外からの参加者が最も多かった。市外・県外を合わせた参加者は全体の約３割を占め、遠方の方も聞きにきていただけるような興味をもつ内容を提供できたのではないだろうか。

市内参加者では、講演会場の新潟市文化財センターが所在する西区が多く、以下、秋葉区、江南区と続く。昨年は一番、参加者数が少なかった秋葉区が今年は少し増加した。遺跡の所在地である秋葉区の方が、気軽に来られるようにこれからも努力していく。

交通手段　交通手段はこれまで同様、自家用車が約８割を占める。

情報入手先　昨年度に引き続き、ポスター・チラシが、一番有効な広報手段のようだ。次いで市報、まいぶんナビと続く。多くの方が弥生の丘展示館に来られた際に、チラシなどを見て講演会の存在を知るようである。

講演会について　講演会については、時期以外の項目で不満と答えられた方が見られた。全体の満足度も多くの方から満足と回答していただいた反面、不満に思われた方もいるため、今後改善していく。

また、今後検討すべき貴重なご意見も多く頂いた。以下に主なものを箇条書きで示す。今後の検討課題としたい。

講演内容についての要望

・スライドがよく見えないので、資料は詳しいものを配布してほしい（プロジェクターで使われている写真なども手元にほしい）。
・もっと焦点を絞った話にしてほしい。
・バスツアーを組んでほしい。

企画展についての要望

・企画展についての質問の答えを文字に起こして、次の講演会などで配布してほしい。

会場についての要望

・現在は車の運転が可能だが、車を運転できなくなると講演会に参加しづらい。交通の便が良い場所で開催できれば、もっと幅広い年代の人が参加しやすいのではないか。

史跡　古津八幡山遺跡　弥生の丘展示館

企画展〇関連講演会　アンケート

お越しの皆様へ
本日は史跡古津八幡山遺跡弥生の丘展示館企画展〇関連講演会「〇〇〇〇〇〇〇〇〇」にお越しいただき、誠にありがとうございます。弥生の丘展示館の活動について今後の参考とさせていただくために皆様のご意見をお聞かせ下さい。
ご協力をお願いします。

★　開催日：　令和〇〇年〇月〇日（〇）

1　あなたのこと（お客様のプロフィール）を教えてください。

次のそれぞれの質問で、あてはまる項目を１つだけ選び、〇で囲んでください。	
①年齢は	20歳未満　20代　30代　40代　50代　60代　70代　80代以上
②性別は	男性　女性
③職業は	小学生　中学生　高校生　大学生（短大・専門学生含む）　会社員　公務員　自営業 教職員　主婦　無職　その他（　　）
④お住まいは	北区　東区　中央区　江南区　秋葉区　南区　西区　西蒲区 市外（　　市・町・村）　県外（　　都・道・府・県　　市・町・村）
⑤こちらへの主な交通手段は	自家用車　自転車・バイク　徒歩　タクシー　路線バス・区バス ＪＲ　その他（　　）
⑥弥生の丘展示館へ行かれたことはありますか	ない　1回　2～5回　6～9回　10回以上
⑦弥生の丘展示館で開催中の企画展〇「〇〇〇〇〇〇〇〇〇」をご覧になりましたか。	はい　いいえ ※いいえの方に質問です。これからご覧になる予定はありますか。 ある　ない
⑧講演会情報の入手先	ポスター・チラシ　市報　その他広報誌　テレビ・ラジオ 新聞　雑誌・情報誌　インターネット　市ホームページ　まいぶんナビ 人から聞いて　弥生の丘展示館を利用して　その他（　　）

※質問は表・裏の両面にあります。
【ウラ面に続きます】

2　講演会について

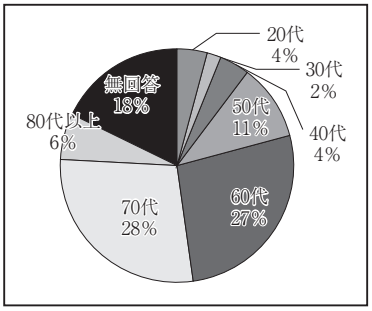
次のそれぞれの質問で、あてはまる答えを１つだけ選び、数字を〇で囲んでください。 ※答えられない質問は、記入する必要はありません。					
①講演会：時期	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
②講演会：場所	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
③講演会：内容のわかりやすさ	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
④施設全般：映像、照明、空調、バリアフリー	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑤職員の対応：言葉づかい、マナー、対応、説明	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑥印刷物：わかりやすさ	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑦全体の満足度	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑧次回の講演会に参加したいですか？	ぜひ参加したい　できたら参加したい あまり参加したくない　参加しない				
⑨弥生の丘展示館周辺施設を利用されたことはありますか？	古津八幡山遺跡歴史の広場　フラワーランド　新津美術館 県立植物園　県埋蔵文化財センター　石油の世界館（石油遺産関係） 中野邸記念館　ビジターセンター　その他（　　）				
※今後の会場の場所についてのご希望をお書きください。 ・現在の場所で満足 ・別の場所を希望（　場所：　　） ※今回の講演会についてご自由にお書きください。 ※ご希望のイベント・講演会等がございましたらお書きください。 ※弥生の丘展示館へのご意見・期待することなど、ございましたらご自由にお書きください。					

ご協力ありがとうございました

アンケート用紙（表・裏）

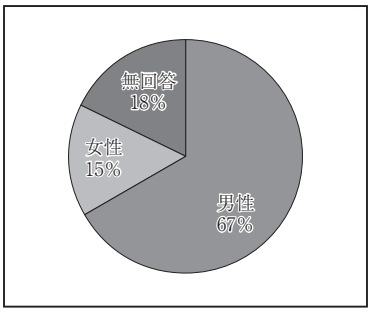
1.年齢

20歳未満	0
20代	4
30代	2
40代	4
50代	10
60代	26
70代	27
80代以上	6
無回答	17
計	96



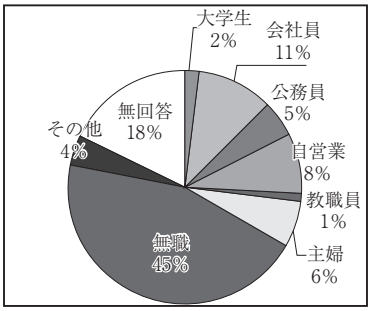
2.性別

男	64
女	15
無回答	17
計	96



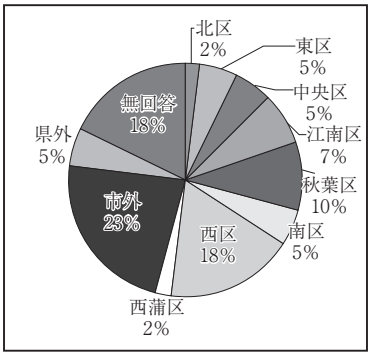
3.職業

小学生	0
中学生	0
高校生	0
大学生	2
会社員	10
公務員	5
自営業	8
教職員	1
主婦	6
無職	43
その他	4
無回答	17
計	96



4.住まい

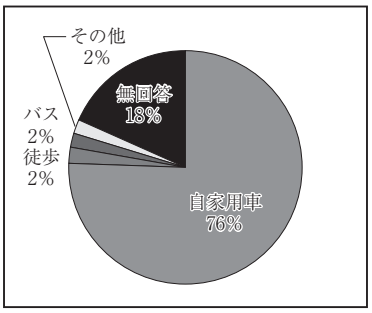
北区	2
東区	5
中央区	5
江南区	7
秋葉区	9
南区	5
西区	17
西蒲区	2
市外	22
県外	5
無回答	17
計	96



5.交通手段

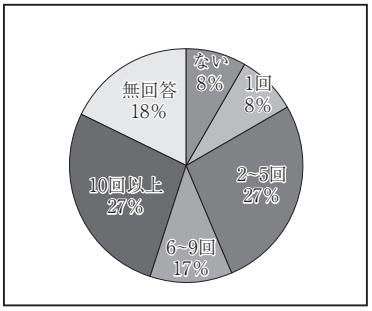
自家用車	75
自動車・バイク	0
徒歩	2
タクシー	0
バス	2
その他	2
無回答	18
計	99

※複数回答あり



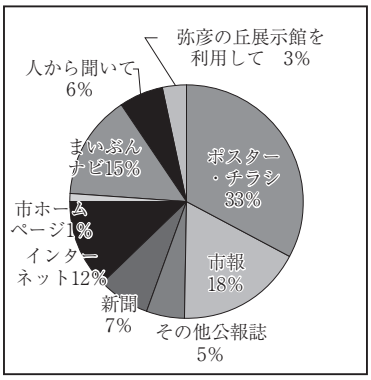
6.弥生の丘展示館来館回数

ない	8
1回	8
2～5回	26
6～9回	11
10回以上	26
無回答	17
計	96



7.講演会情報入手先（複数回答あり）

ポスター・チラシ	32
市報	17
その他広報誌	5
テレビ・ラジオ	0
新聞	7
雑誌・情報誌	0
インターネット	12
市ホームページ	1
まいぶんナビ	14
人から聞いて	6
弥生の丘展示館を利用して	3
その他	0
計	97

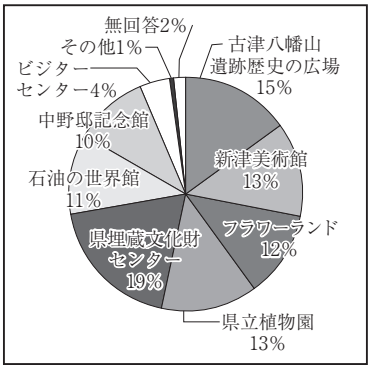


弥生の丘展示館周辺施設の利用（複数回答あり）

	大変満足	満足	普通	不満	大変不満	無回答	計
時期	13	40	20	0	0	23	96
場所	16	37	14	8	0	21	96
内容のわかりやすさ	20	28	12	6	0	30	96
施設全般：照明、空調、バリアフリー	19	40	11	1	0	25	96
職員の対応：言葉づかい、マナー、対応、説明	18	42	14	1	0	21	96
印刷物：わかりやすさ	8	32	24	8	0	24	96
全体の満足度	16	41	15	1	0	23	96

8.弥生の丘展示館周辺施設の利用（複数回答あり）

古津八幡山遺跡歴史の広場	55
新津美術館	48
フラワーランド	43
県立植物園	49
県埋蔵文化財センター	68
石油の世界観	41
中野邸記念館	37
ビジターセンター	15
その他	2
無回答	6
計	364



アンケート結果一覧（２回分の講演会の合計）

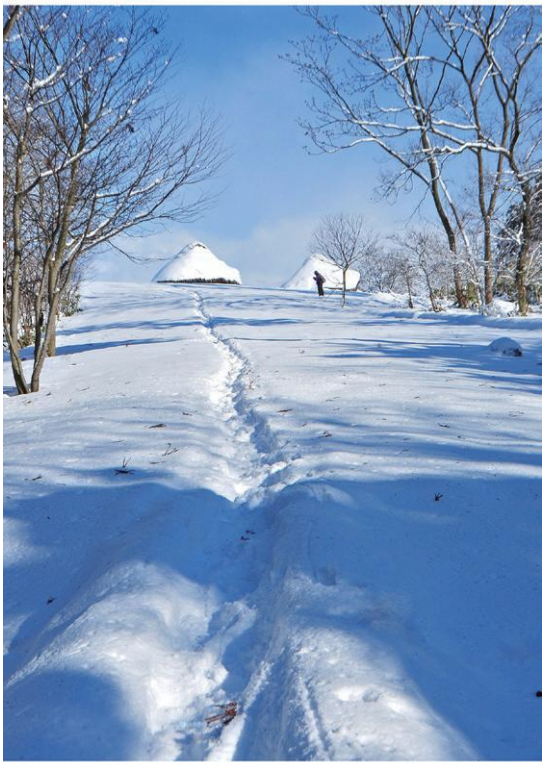
アンケート結果一覧（講演会別）

	項目		第１回	第２回	計
プロフィール	年齢	20歳未満	0	0	0
		20代	2	2	4
		30代	1	1	2
		40代	2	2	4
		50代	4	6	10
		60代	13	13	26
		70代	15	12	27
		80代以上	5	1	6
		無回答	3	14	17
		計	45	51	96
	性別	男	38	26	64
		女	4	11	15
		無回答	3	14	17
		計	45	51	96
	職業	小学生	0	0	0
		中学生	0	0	0
		高校生	0	0	0
		大学生	2	0	2
		会社員	7	3	10
		公務員	2	3	5
		自営業	4	4	8
		教職員	1	0	1
		主婦	2	4	6
		無職	22	21	43
		その他	2	2	4
		無回答	3	14	17
		計	45	51	96
	住まい	北区	1	1	2
		東区	3	2	5
		中央区	3	2	5
		江南区	4	3	7
		秋葉区	5	4	9
		南区	3	2	5
		西区	10	7	17
		西蒲区	2	0	2
		市外	8	14	22
		県外	3	2	5
		無回答	3	14	17
		計	45	51	96
	交通手段（複数回答あり）	自家用車	41	34	75
		自動車・バイク	0	0	0
		徒歩	0	2	2
		タクシー	0	0	0
		路線バス・区バス	1	1	2
		その他	0	2	2
		無回答	3	15	18
		計	45	54	99
	講演会情報入手先（複数回答あり）	ポスター・チラシ	15	17	32
		市報	13	4	17
		その他広報誌	1	4	5
		テレビ・ラジオ	0	0	0
		新聞	6	1	7
		雑誌・情報誌	0	0	0
		インターネット	7	5	12
		市ホームページ	0	1	1
		まいぶんナビ	6	8	14
		人から聞いて	4	2	6
		弥生の丘展示館を利用して	2	1	3
		その他	0	0	0
		計	54	43	97

	項目		第１回	第２回	計
講演会・講演会場（市文化財センター）などについて	時期（無回答あり）	大変満足	6	7	13
		満足	23	17	40
		普通	9	11	20
		不満	0	0	0
		大変不満	0	0	0
		無回答	7	16	23
		計	45	51	96
	場所（無回答あり）	大変満足	8	8	16
		満足	22	15	37
		普通	7	7	14
		不満	2	6	8
		大変不満	0	0	0
		無回答	6	15	21
		計	45	51	96
	内容のわかりやすさ（無回答あり）	大変満足	14	6	20
		満足	19	9	28
		普通	5	7	12
		不満	0	6	6
		大変不満	0	0	0
		無回答	7	23	30
		計	45	51	96
	施設全体：映像、照明、空調、バリアフリー（無回答あり）	大変満足	12	7	19
		満足	20	20	40
		普通	4	7	11
		不満	1	0	1
		大変不満	0	0	0
		無回答	8	17	25
		計	45	51	96
	職員の対応：言葉遣い、マナー対応、説明（無回答あり）	大変満足	11	7	18
		満足	25	17	42
		普通	3	11	14
		不満	0	1	1
		大変不満	0	0	0
		無回答	6	15	21
		計	45	51	96
	印刷物：わかりやすさ（無回答あり）	大変満足	4	4	8
		満足	20	12	32
		普通	10	14	24
		不満	4	4	8
		大変不満	0	0	0
		無回答	7	17	24
		計	45	51	96
	全体の満足度（無回答あり）	大変満足	10	6	16
		満足	24	17	41
		普通	4	11	15
		不満	0	1	1
		大変不満	0	0	0
		無回答	7	16	23
		計	45	51	96
	次回講演会に参加したいか（無回答あり）	ぜひ参加したい	27	19	46
		出来たら参加したい	10	16	26
		あまり参加したくない	0	0	0
		参加しない	0	0	0
		無回答	8	16	24
		計	45	51	96
	今後の会場（無回答あり）	現在の場所でよい	20	16	36
		別の場所がよい	8	6	14
		無回答	17	29	46
		計	45	51	96
企画展・企画展示会場（弥生の丘展示館）などについて	項目		第２回目	第３回目	計
	来館回数	ない	4	4	8
		１回	5	3	8
		２～５回	13	13	26
		６～９回	4	7	11
		10回以上	16	10	26
		無回答	3	14	17
		計	45	51	96
	開催中の企画展を見た（無回答あり）	はい	17	17	34
		いいえ	24	18	42
		無回答	4	16	20
		計	45	51	96
	開催長の企画展を見る予定（無回答あり）	ある	16	14	30
		ない	1	1	2
		無回答	28	36	64
		計	45	51	96
	弥生の丘展示館周辺施設の利用（無回答・複数回答あり）	古津八幡山遺跡歴史の広場	28	27	55
		新津美術館	30	18	48
		フラワーランド	18	25	43
		県立植物園	28	21	49
		県埋蔵文化財センター	37	31	68
		石油の世界観	22	19	41
		中野邸記念館	22	15	37
		ビジターセンター	10	5	15
		その他	1	1	2
		無回答	2	4	6
		計	198	166	364

（3）フォトコンテスト入賞作品紹介

第１回目

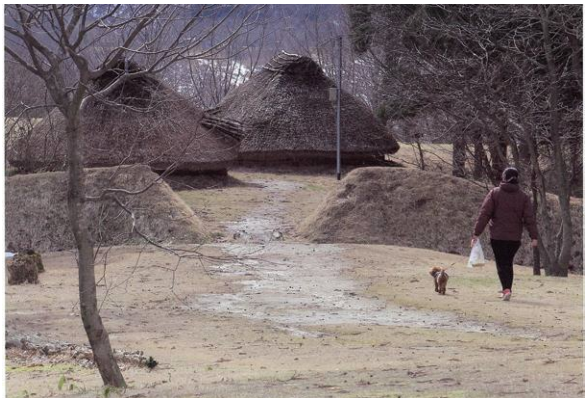


グランプリ「八幡山遺跡への道」（今井富夫氏撮影）

準グランプリ「タイムスリップ」（riso氏撮影）

弥生の丘展示館賞「夕暮れの八幡山遺跡」（杉野秀一氏撮影）

古津八幡山遺跡賞「太古の昔から」（佐藤健治氏撮影）



文化財センター長賞「古の散歩道」（近伸太郎氏撮影）

フジカラー賞「平野一望」（小山覚氏撮影）

第 2 回目

グランプリ「月照の古津八幡山遺跡」（樋口廣治氏撮影）

古津八幡山遺跡賞「燻蒸維持」（小山覚氏撮影）

弥生の丘展示館賞「悠久の光」
（是永進氏撮影）

文化財センター長賞「時空を超えて」
（seiji 氏撮影）

フジカラー賞「タイムマシン」
（大澤朋恵氏撮影）

第３回目

グランプリ「静寂を刻む影」（是永進氏撮影）

古津八幡山遺跡賞「望郷」（杉野秀一氏撮影）

弥生の丘展示館賞「新緑の頃」
（佐々木進氏撮影）

文化財センター長賞
「散歩中にバッタリ」
（斎藤優氏撮影）

フジカラー賞「西高東低」
（小山覚氏撮影）

目　次

第１章　企画展関連講演会の記録

企画展２関連講演会（第１回）
北陸における弥生時代後期から古墳時代前期の大型建物とその背景－新潟県を中心に－
（滝沢　規朗）…… 1

企画展３関連講演会（第２回）
弥生時代における北陸西部と下越地方の交流（久田　正弘）……19

第２章　企画展の概要と企画展関連講演会アンケート結果

（１）令和元年度「史跡古津八幡山　弥生の丘展示館」企画展の概要 ……47
（２）企画展関連講演会アンケート結果　……50
（３）フォトコンテスト入賞作品紹介　……53

本書は、新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（以下、市文化財センター）が、令和元年度に催した「史跡古津八幡山 弥生の丘展示館」企画展関連講演会の記録集である。

スライドは講座・講演会で使用されたものを基本的に収録したが、都合により編集したものも含む。また、当日紙で配布された資料については紙幅の都合上省略した。

第２章には企画展の概要と関連講演会のアンケート結果などを収録した。

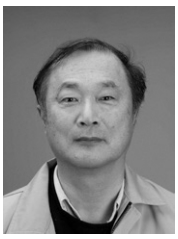
本書の編集は小林美土里（文化財センター）が行った。

※表紙写真：上空から見た古津八幡山遺跡・北東から

講師略歴

滝沢　規朗（たきざわ　のりあき）
新潟県新発田市（旧紫雲寺町）出身
新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長

久田　正弘（ひさだ　まさひろ）
石川県鳳珠郡能登町出身
（公財）石川県埋蔵文化財センター　調査部
県関係調査グループ　グループリーダー



令和元年度
史跡古津八幡山 弥生の丘展示館
企画展関連講演会　記録集

編集・発行　新潟市文化財センター
〒950-1122　新潟市西区木場2748-1
TEL　025-378-0480　　FAX　025-378-0484
発行日　2020年3月30日
印　刷　株式会社ハイングラフ